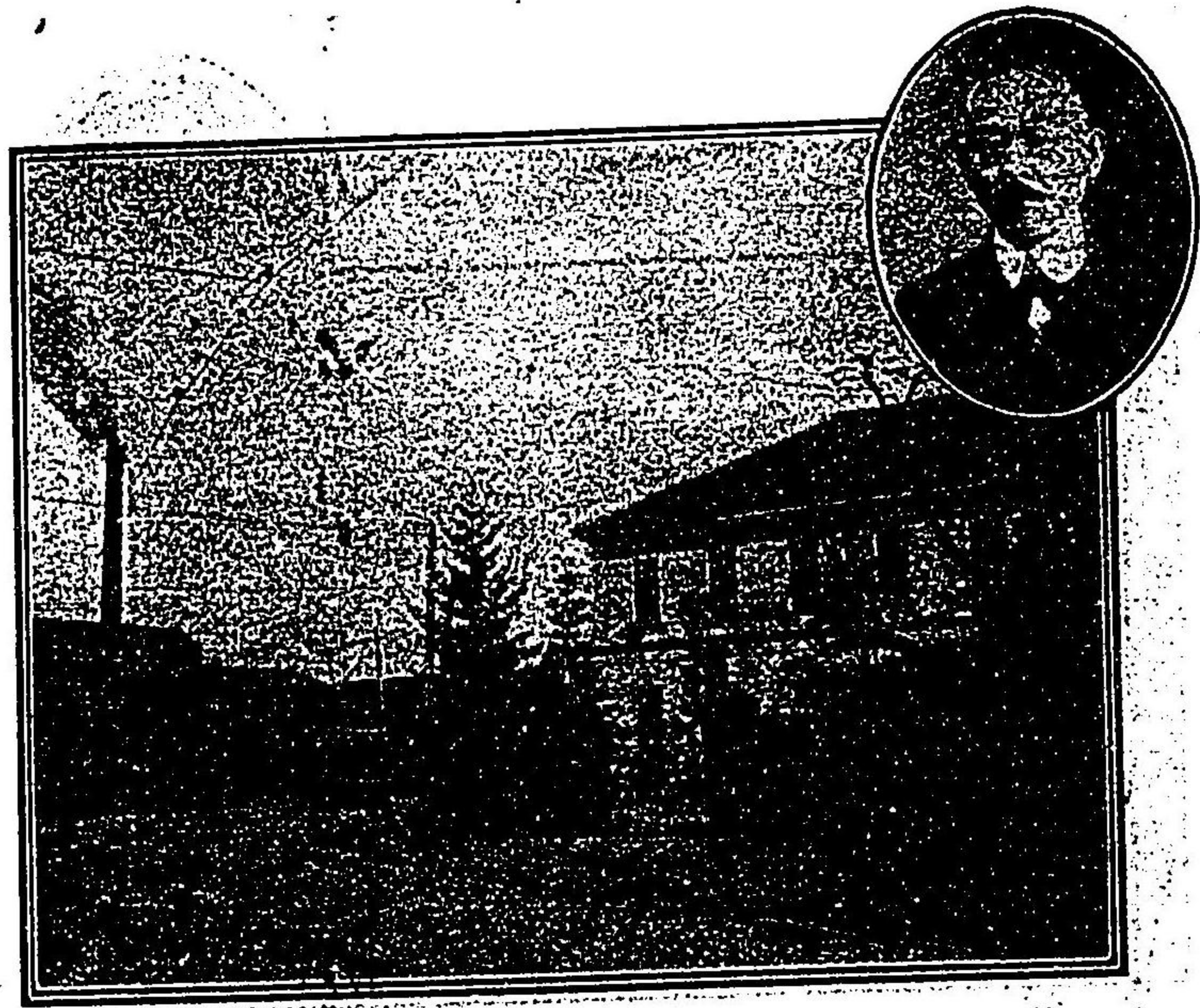


名古屋瓦斯新會社(山田常務)

【名古屋瓦斯新株式會社】 文明的事業の一つとして三十九年十月産聲を擧げ許りな新進有望の會社、創業以來漸く三ヶ年にも充たぬが供給燈數及び熱用二萬四千燈、需要者八千軒、馬力千二百と云ふ大した發展、千五百馬力の設備は明春の共進會迄に忽ち不足を感ずると云ふので、之を三千馬力に倍加すべく目下設備進行中である、資本二百萬圓、拂込額七十萬圓、前年下半年期の配當八分強、重役は社長奥田正香、取締役(常務)山田才吉、大橋新太郎、井上茂兵衛、服部小十郎、鈴木摠兵衛、梅浦精一、監査役伊藤幹一、岡谷惣助、上遠野精之助、支配人岡本櫻の諸氏、所在地は中區大津町。

(三五)

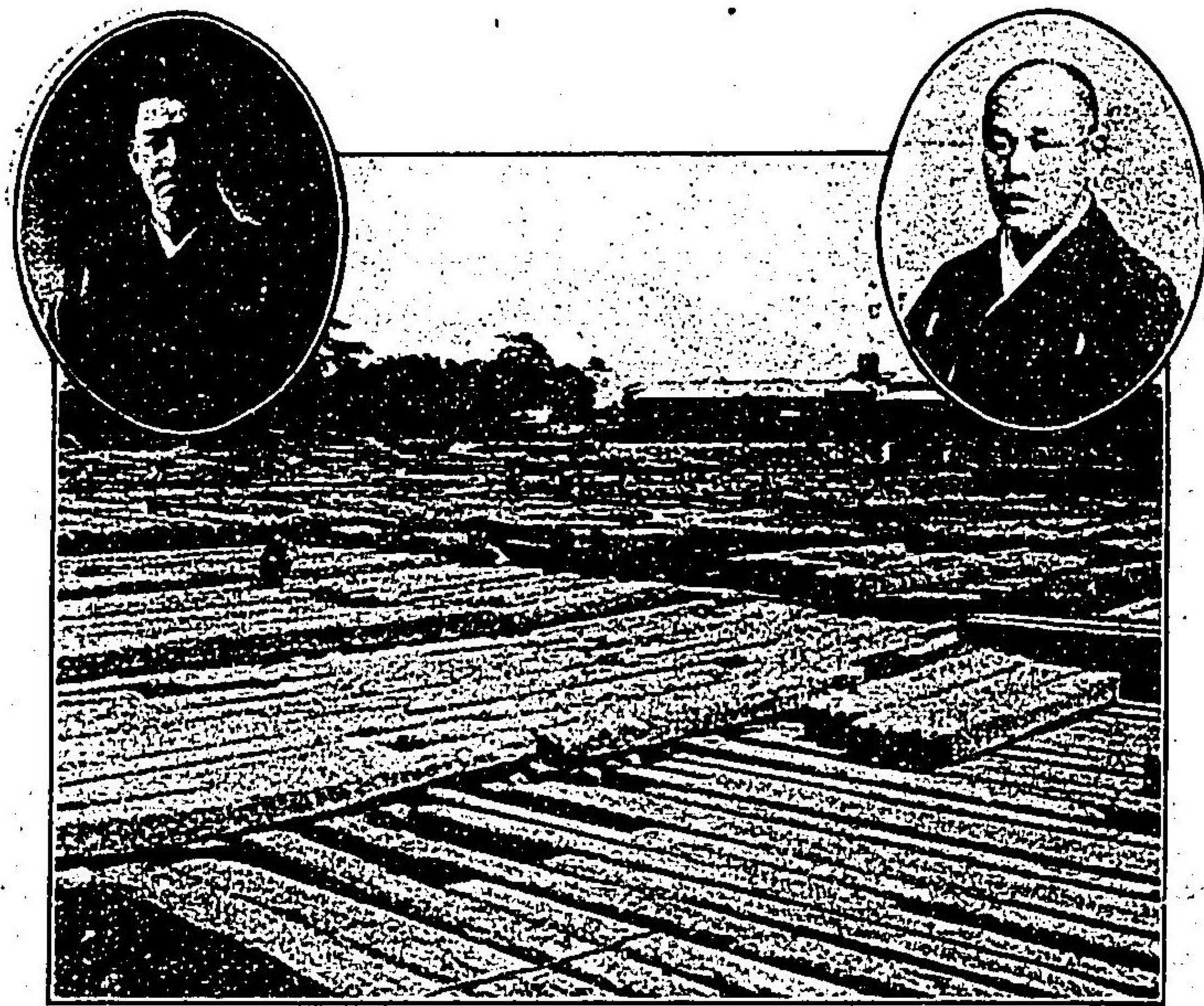


名古屋電氣鐵道株式會社(本常務)



【名古屋電氣鐵道株式會社】 前身は馬鐵で二十七年創立から三十一年電鐵に組織變更した以後四五年間は、随分困難と闘つたが、時代の進歩に伴ひ漸次發展の機運に向ひ、現今市内に七哩四十二鎖の線路を有する外、近く着手すべき線路に公園線、築港線あり、市外を聯絡するの批杷島線、犬山線、一宮線、津島線あり、最近一割以上を配當する隆運に加へ、全線完成の曉は其發展刮目して見るべき者があらう、重役社長富田重助、取締役(常務)岡本清三、白石半助、監査役松居庄七、支配人倉岡勝彦の諸氏、資本二百萬圓、拂込資本金廿五萬圓(所在地那古野町)

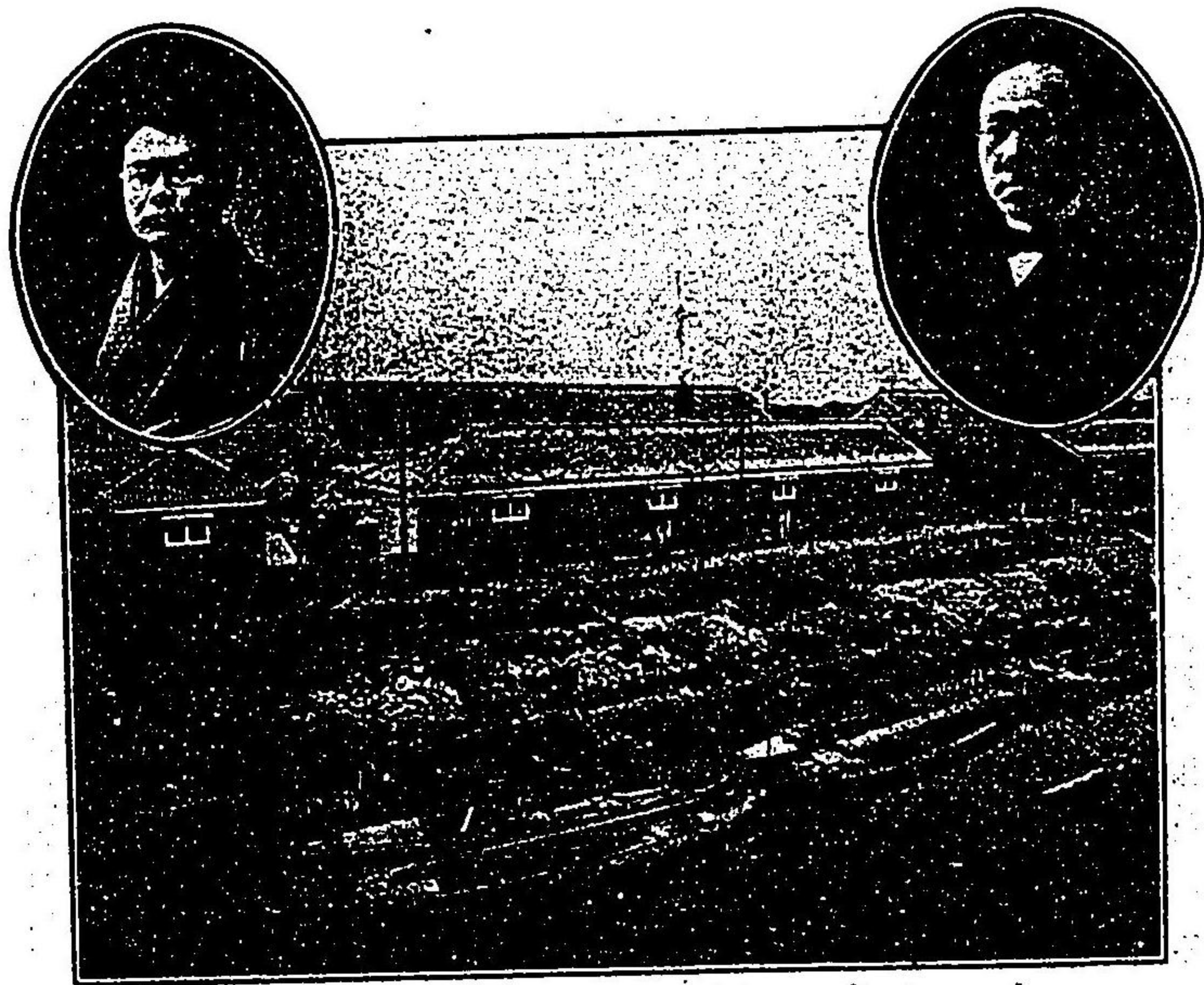
(三五)



(務專谷熊) 社會材木屋古名 (長社川谷長)

【名古屋木材株式會社】當社は明治三十年創業の愛知木材株式會社を合併して、四十年五月に創立したもので、營業は諸木材の委託販賣、買入、保管、擔保附貸金等である。當社の誇りとすべき特色は廣域二萬八千坪の貯材池で、設備の完全と規模の雄大とは他に本邦第一だ、是が又從來當市木材商が、木材擔保に銀行から融通が出来なかつたのを、完全な荷預證書を發行して融通を開かせる道を作る事になり、創立方針宜きを得たので翌年から配當が出来た、資本は百萬圓拂込二十五萬圓、重役は取締役(社長)長谷川糾七(専務)熊谷常光、原田勘七郎、竹内兼吉、鈴木寅之助、監査役上遠野富之助、永田甚三の諸氏(所在地)

(七)



(務專田原) 社會庫倉海東 (長會本森)

【東海倉庫株式會社】廿九年極月の創立、創立の新しい丈け營業の本體なる倉庫其者が建築設備共に最新式で模範的である。敷地は徳川家倉庫のあつた天王崎、堀川から倉庫敷地内へ丁字形運河を穿ち舳舟の出入貨物積卸に至便ならしめてある。倉庫は總數二十四棟、二階地下を併せて三千八百六十三坪、別に龜崎支倉庫一千坪あり、倉庫の最新式、地位の至便、貨物積卸の叮嚀迅速及び金融の紹介等は、當會社の呼物である。重役は取締役(會長)森本善七、(専務)原田勘七郎、春日井丈右衛門、井口半兵衛、伊藤傳七、監査役瀧定助、伊藤由太郎、磯貝浩の諸氏、資本金百萬圓、内拂込二十五萬圓、最近配當年五分。

(六)



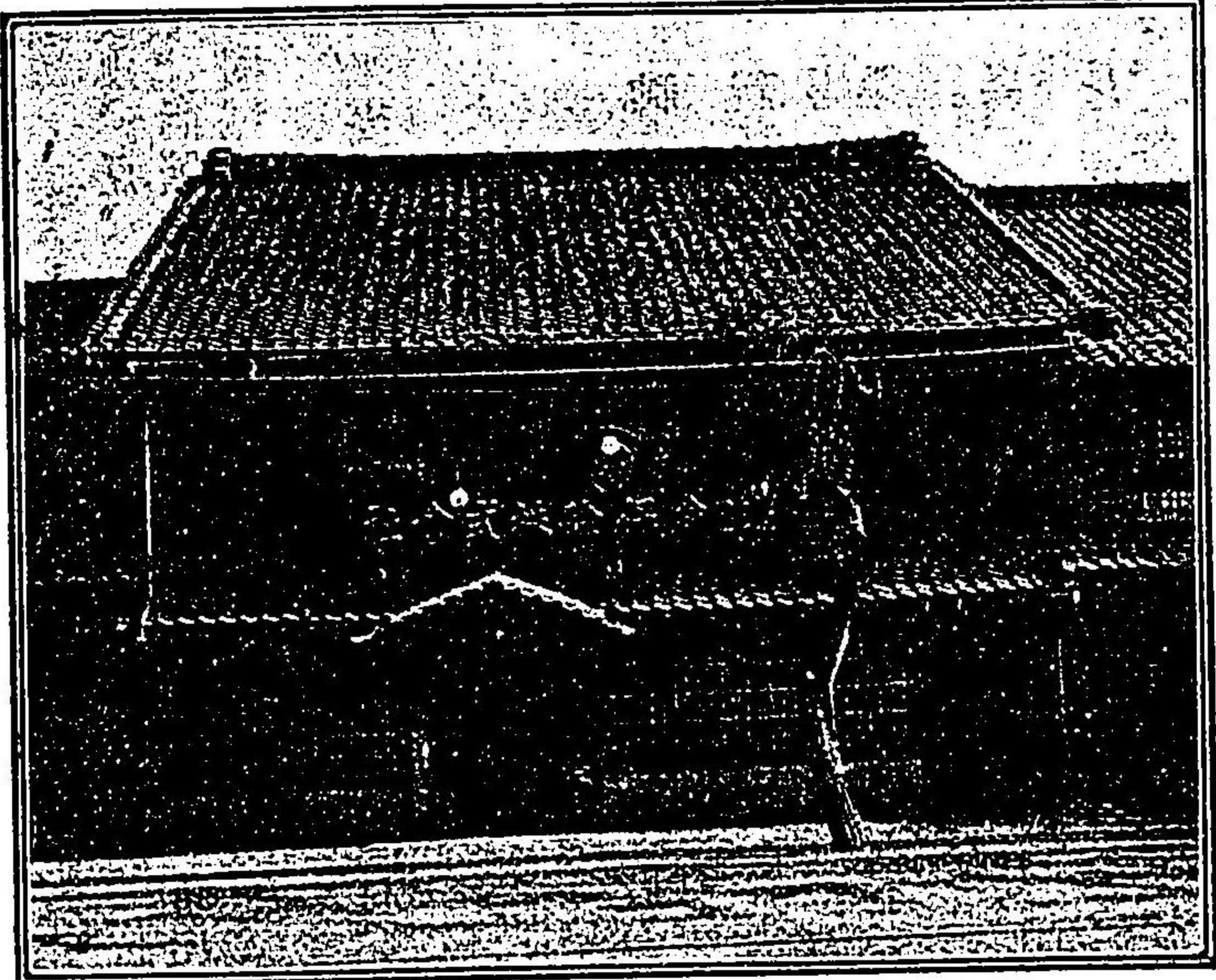
店支社會險保(災火)命生治明

【明治生命保險株式會社名古屋支店】明治日本帝國の三大會社は日本保險界の三山である。殊に明治の社長阿部泰藏氏は斯業最初の鼓吹者開拓者先覺者で、最も奮闘した人、最も記憶されるべき人である。明治生命は明治十四年率先創立以來二十九ヶ年穩健な漸進的發展を遂げ、僅十萬圓の資本を以て、本年七月末現在積立金七百八十萬圓、保險契約高五千八百四十七萬圓の大成績、明治火災は二十四年開業、是又資本百萬圓に對し昨年未現在積立金三百四萬圓、契約高一億九千五百六萬餘圓の好成績、兩社の信用は明に數字の示す所である。支店の開業は三十年四月、支店長(生)川原林順次郎氏(災)原錦吾氏、(美觀を助くる壯麗なる歐風建築)

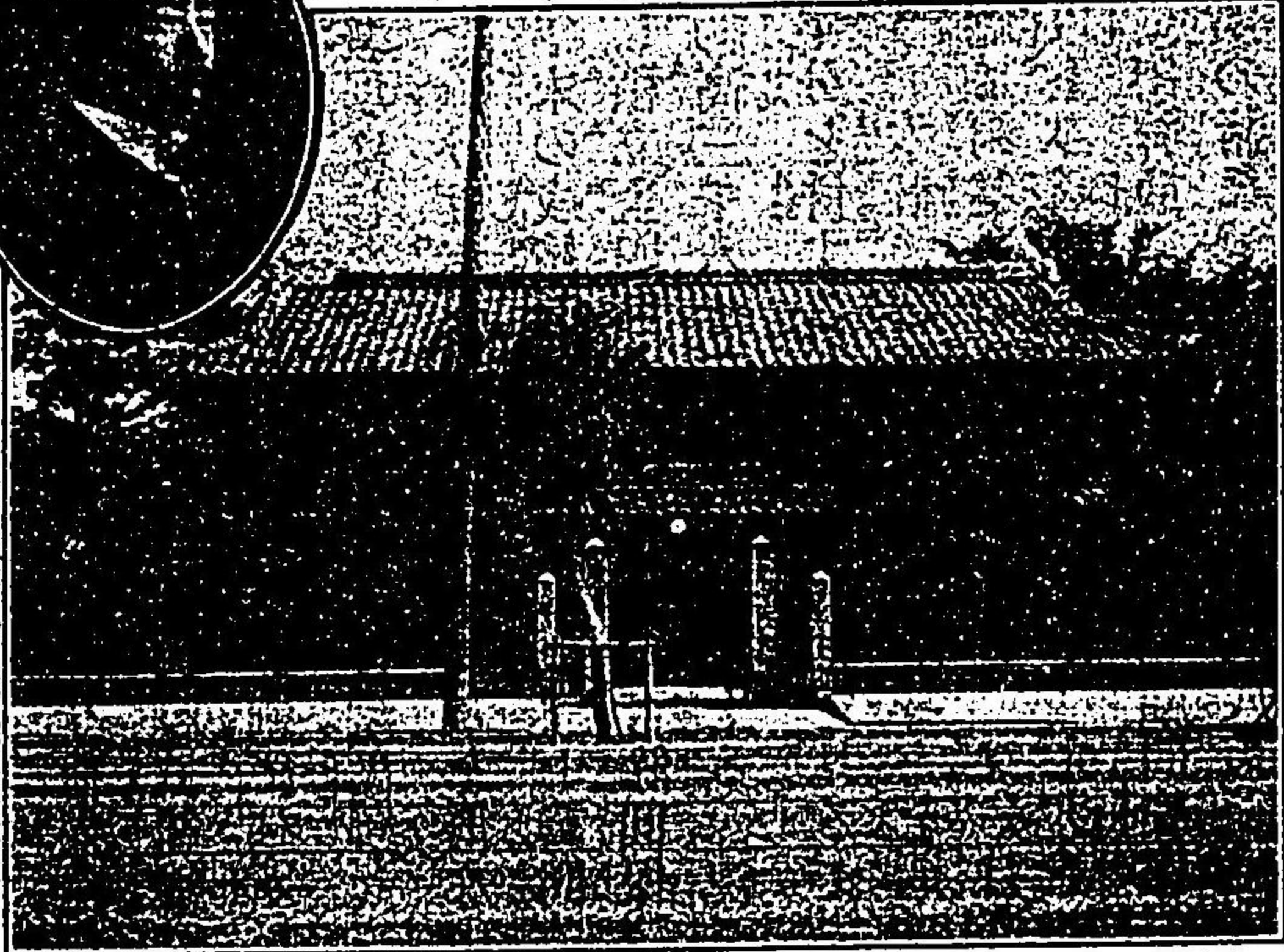


伊藤 野

【福壽生命保險株式會社】當市に本店を有する中京唯一の生命保險事業で、神野富田其他有力者の發起創業に成り、昨四十一特長は職業住所旅行等に依り料金の割増又は保險金の割引をなさず、且つ利益の大部分を一般契約者に配當し、所謂相互的株式組織の美點長所を發揮せんとするに在るので、營業方針の頗る進歩的な所から、創業日淺きに拘らず成績見るべきものがある。資本は五十萬圓内拂込十二萬五千圓、重役は取締役(長)神野金之助(務)富田重助、伊藤傳七、渡邊喜兵衛、監査役神野二郎、平子徳右衛門、鈴木治左衛門、支配人近藤徳次郎の諸氏、本店市内榮町支店東京、金澤、福岡の三ヶ所。

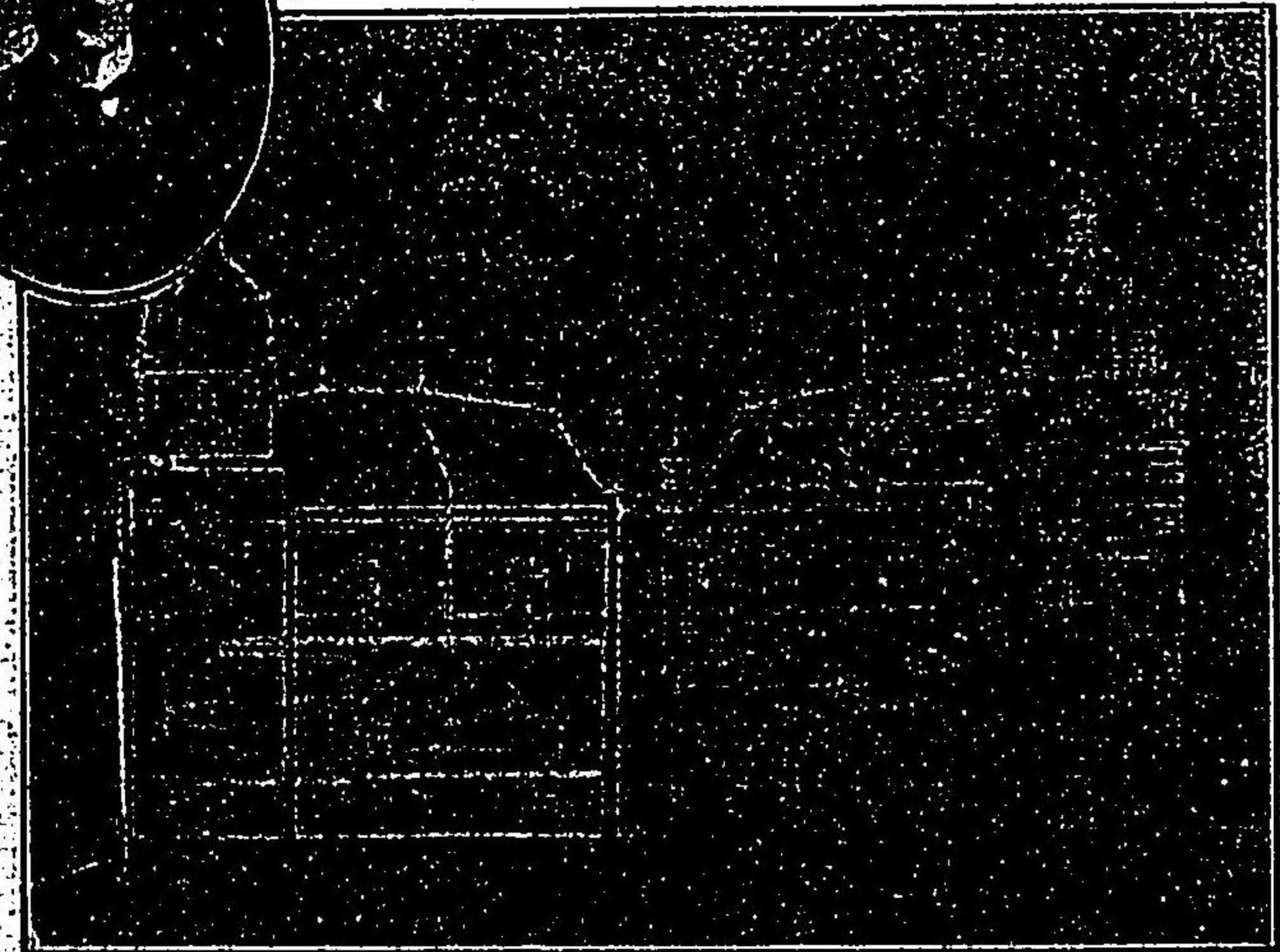


社會險保命生壽福



(長店支橋高)社會險保命生國帝

【帝國生命保險株式會社名古屋支店】明治
 二十二年の古參株、三大會社中
 に着實を以て特色とする、社員以外に囑託員を
 置いて勧誘範圍を廣くしたのは帝國が嚆矢で
 始は人格も善かつたが其後弊害が現れた爲に
 之を全廢し、今日では二十三年間經驗の結果
 或程度の競争は兎に角無限の競争は廢して着
 實に遣る方針に傾き、一面審査を嚴重にした
 ので、死亡率も大分減じて基礎が固くなり、
 資本百萬圓に對し積立金八百四十二萬五千餘
 圓、契約高五千四百四十四萬五千餘圓(此六月
 の大成績を挙げた)、信用の鞏固支拂の迅速云
 ふ迄もない、取締役は(長)福原有信、矢野義
 徹、小西安兵衛、相談役高木兼寛、淺田正文
 の諸氏、支店長高橋來次氏(所在地)



(長店支代田)店支社會險保命生本日の中築建

【日本生命保險株式會社名古屋支店】三大
 會社中の最も後進(明治廿二年)として最も先
 頭に進み、大阪に據つて雄を天下に稱する概
 あるのは日本生命、最小の資本三十萬圓に對
 し、最高の契約高七千一萬三千餘圓(此八月)
 最大の準備金一千二十八萬六千餘圓(昨年未
 を有し、殊に一昨年千六百萬圓の新契約を得
 て保險界のレコードを破つたなほ、社長片
 岡直温氏以下の戰振實に目覺しいものだ、特
 色は明治三十年未決算の際、一日五百圓以
 上の契約者に對し三十萬圓の利益配當を行つ
 た點で、今や四十五年の大決算に對する配當
 準備金として、既に一百十萬圓を積立て居る、
 支店長は打てば響く新頭腦の田代循氏(十餘萬
 支店は目下馬場町は假住居の體)

【共済生命保険株式會社名古屋支店】

創業は明治十三年一月、本邦生命保險會社の開祖である、安田一家の株式組織で經營が質實であるから、舊い割に華々しい發展はしないが、夫丈穩健且鞏固で、三社を除けば指を共済に屈せざるを得ない。昨年未の成績を見ても資本金三十萬圓に對し積立金四百十六萬八千七百餘圓保險契約高三千八十二萬八千圓に上る、況て本年分を併すると餘程の増加を見るであらう。本社の特色は短期と終身とを問はず總て利益金の分配あるとて、又一口百圓以上の低利貸金の便もある、重役は社長安田善助、監督安田善三郎、顧問安田善次郎の諸氏、支店長は吉武蘇人氏(所在地新柳町)

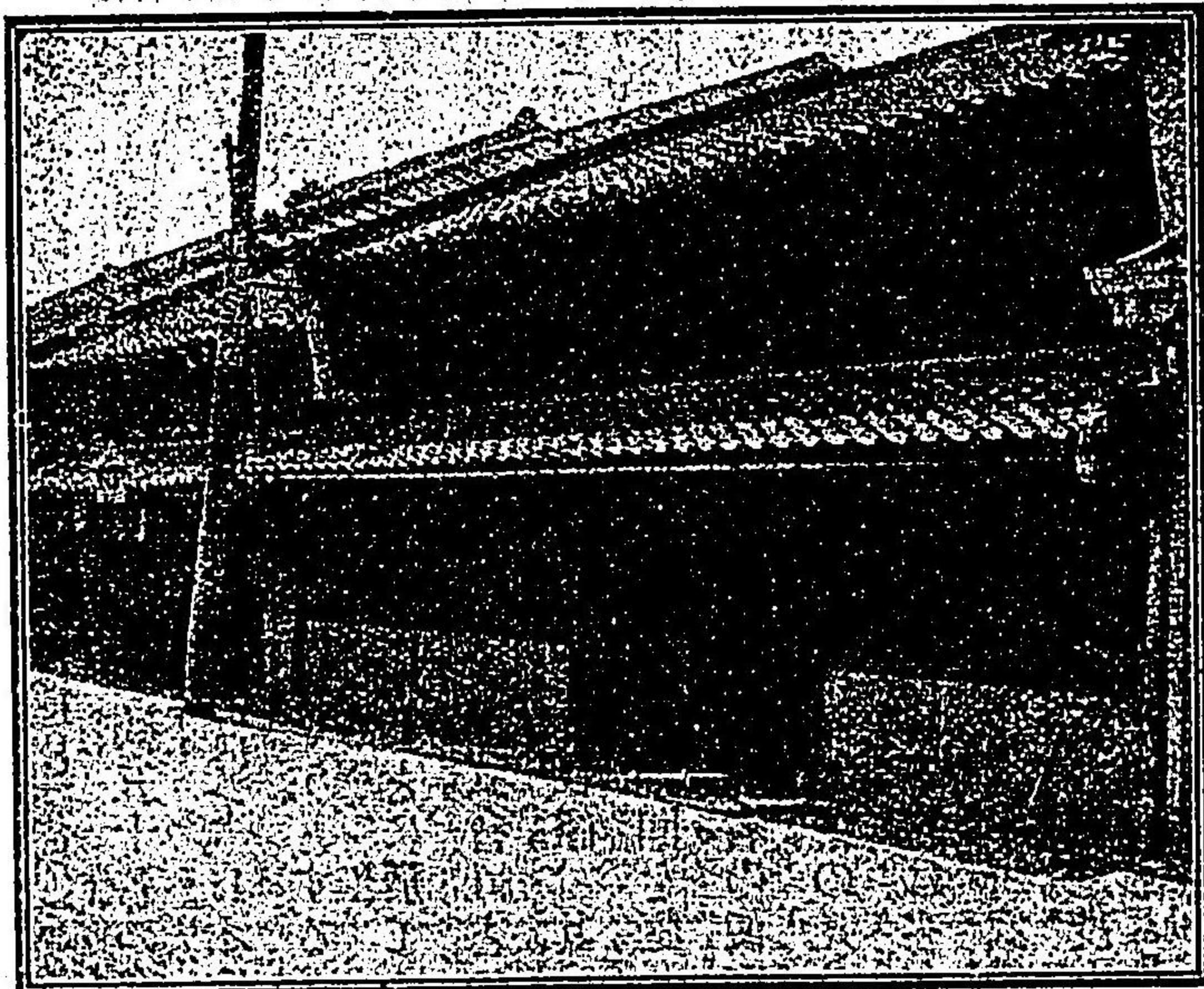


店支社會險保命生濟共

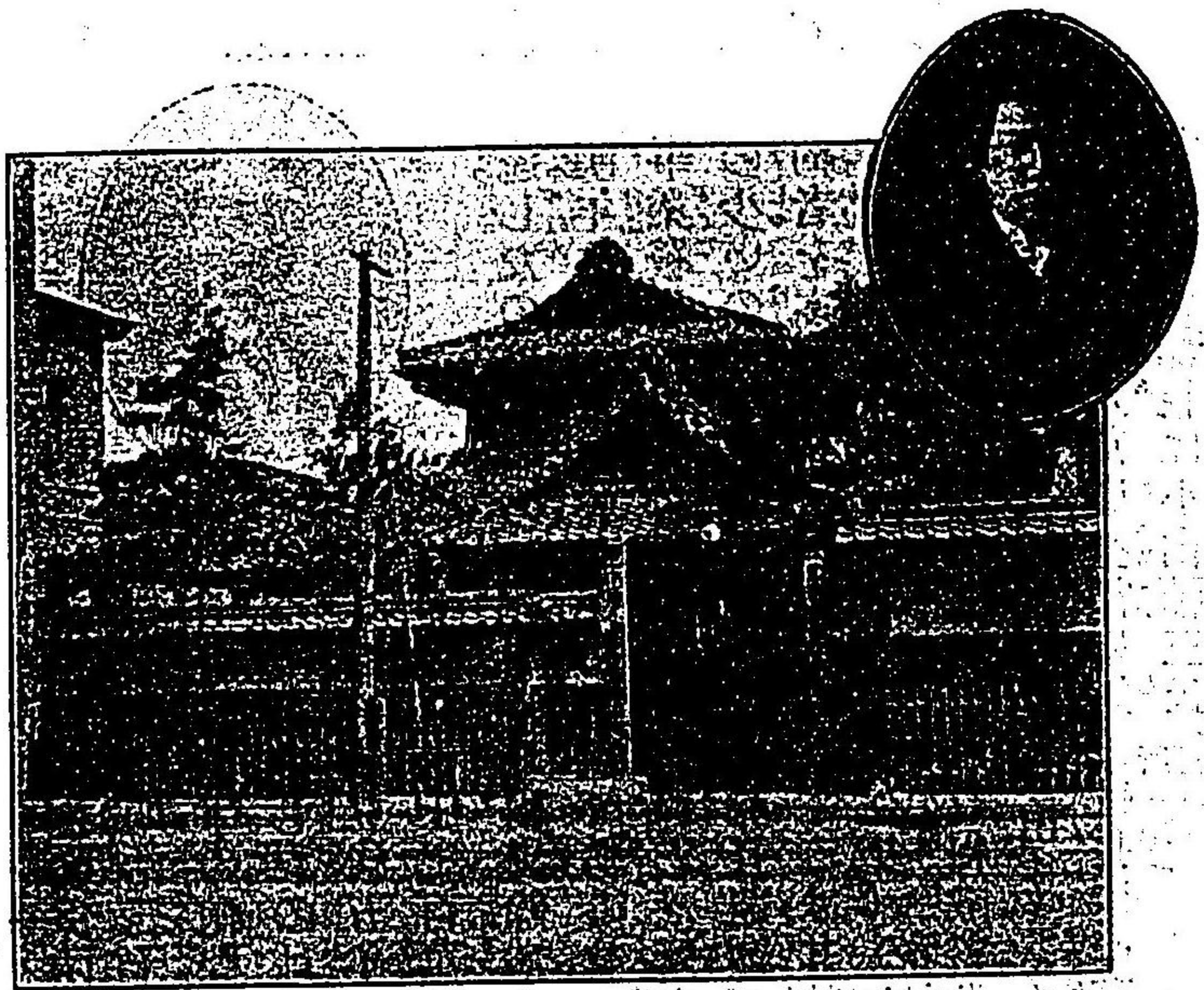


【千代田生命保險株式會社支店】

明治三十七年四月日露戦争の砲聲を聞きつゝ開業したのは千代田生命、創立後五年で保險契約高二千二百萬圓に達したのは同社の隆運を證し得て餘ある、明年は三萬萬の聲を聞き得てあるまい、事業發展の割合に經費の掛らぬと、死亡率の少いのは經營着實な所以、相互組織で契約者を本位として利益を配當するは其特色、有價證券と銀行預多く不動産の少いのは其財産状態、又損益勘定には未收保險料を計上せず、有價證券の評價損を掲出すさうな、資本は三十六萬圓全額拂込、社長は門野幾之進氏、支店長は小山禎三氏(所在地宮町)



部支屋古名社會險保命生田代千

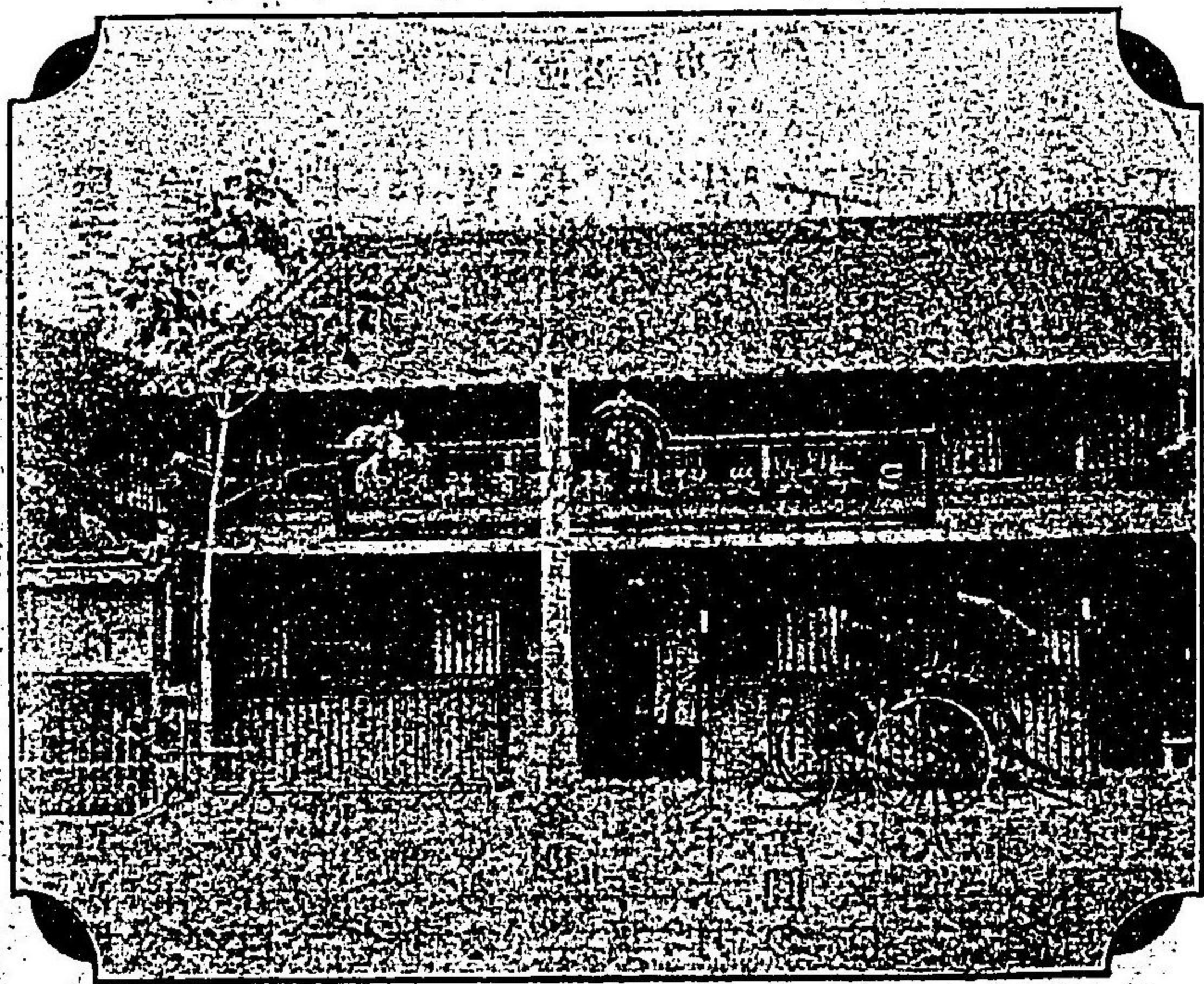


(長所田永)所張出社會險保命生清日

【日清生命保險株式會社名古屋出張所】大隈伯、澁澤男を始め知名實業家約五十名の發起創立に成り、百萬圓の資本を掲げて、日本は勿論清韓四億の大地盤を開拓しやうとする新進氣鋭の會社で、先づ成立と地盤とに於て一頭地を抜く。組織は相互會社と株式會社との長を採り所謂損失負擔利益配當の仕組、其他保險種類を多くし又料金拂込猶豫期間を延長するが如き、各種の方面に於て契約者の便利を謀り、未だ創業時代乍ら其施設經營の見べき者がある。重役は社長前島密、専務は多年海外留學の池田龍一、相談役澁澤男、中野武營、相馬永胤、清人麥少彭の諸氏、在名古屋重役上遠野富之助氏、出張所長永田金三郎氏(所在地島田町)

(四七)

【日本火災保險株式會社名古屋支店】日本、明治、横濱は火災保險界の三大會社である。事業の盛大基礎の鞏固殆ど伯仲の間に在つて優劣は間髪を容れない。日本火災は明治二十七年藤田松方外山田中平瀬などの大阪一流紳商に依つて創立され、最初資本も十萬圓で生れたが、廿七年以後三回の増資を企て三百萬圓の大會社となり、四十年七月大阪の本社を東京に移し、東西呼應して敏捷に活動した結果、契約高二億千九百七十九萬餘圓積立金百四十七萬餘圓(四十一)の大盛況に達し、大抵の損害では貧乏搖ぎもしなくなつた。重役は社長藤田四郎、取締役飯村丈三郎、益田太郎、藤山雷太、神野金之助の諸氏、支局長清水耕太郎氏(所在地島田町)



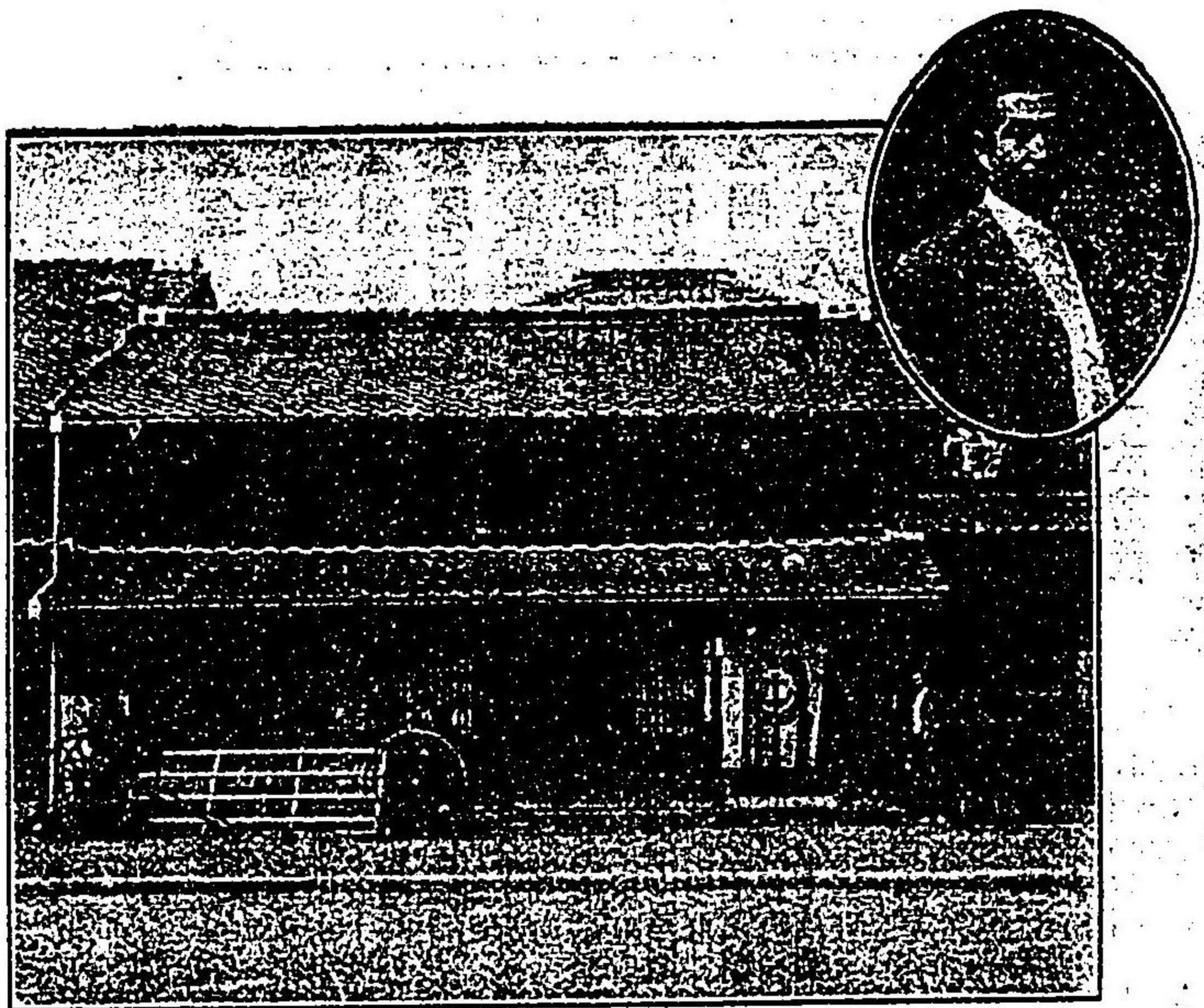
店支社會險保災火本日



横濱生命火災海上運送信用保會支店

【横濱生命火災海上運送信用保株式會社名古屋支店】横濱火災は資本五百萬圓、明治三十年の創立、日本に後ると五年であるが、最近成績契約高一億八千五百五十萬圓、積立金百七十三萬圓に達し、將に追及せんとする勢、其取扱振の堅實牢固なるに斯界の重鎮である。社長富田鐵之助氏、副社長土子金四郎氏、横濱生命は資本百萬圓創立は四十年實際の仕事は翌四十一年から始め本年六月迄僅々一年有半の間に一千百廿三萬圓の契約高を得たのは實に異數の成績と云はなればならず、是れ畢竟本社が火災との連絡があると又利益配當の外に生存分配金の如き經營の妙あるに依る。社長小野光景氏、兩社兼務支店長三宅光彦氏(富町)

(四六)



神戸海上運送火災保險株式會社出張所(金主任)

【神戸海上運送火災保險株式會社名古屋出張所】横濱市の横濱火災、神戸市の神戸火災、共に都外れた港に根據を有し、共に五百萬圓の資本を有し、共に社名の長過ぎる點に於て好一對である。併し神戸は四十年五月創立した許りの青年或は少年會社であるから、既に老成の位置に達した横濱の成績と比較を試みる迄には到らぬが、其閱歴年數の短い割合に新進活動の元氣の見えるのは將來大に成するの證差と云ふべく、殊に懇到周密なる應對振取扱振は人に快感を與へ、五百萬の巨資は契約者に安心を與るに充分なので、應て着々地歩を占めるであらう。社長岡崎藤市氏、常務田中省三氏、出張所主任金森慰之助氏(南大津町)

(四七)

其他の銀行會社

資本額十萬圓
以下を除く

- ▲金城銀行 (株式) 資本額五十萬圓
- ▲愛知農商銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲村瀬銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲尾張銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲愛知實業銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲伊藤銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲伊藤貯蓄銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲關戸銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲丸八貯蓄銀行 (同) 資本額五十萬圓
- ▲日本貯金銀行支店 東區南久屋町
- ▲日本儲蓄株式會社 資本額五十萬圓
- ▲磁器鐵器株式會社 資本額五十萬圓
- ▲名古屋水産株式會社 資本額二十五萬圓

産業組合

- ▲愛國生命保險株式會社支店 四區傳馬町
- ▲無限責任七寶信用組合 同上
- ▲無限責任名古屋購買組合 四區島田町

同業組合

- ▲愛知燐寸同業組合 四區伊倉町
- ▲尾三濃勢農具同業組合 東區神樂町
- ▲鑄物鍋釜農具同業組合 中區南大津町
- ▲愛知綿毛布同業組合 中區本重町
- ▲名古屋國産絞商工同業組合 四區本重町
- ▲愛知縣時計製造同業組合 中區南鍛冶屋町
- ▲愛知塗箸同業組合 東區亞代官町
- ▲愛知縣麥稈真田同業組合 南區熱田宮江町
- ▲名古屋材木商同業組合 中區正木町
- ▲名古屋味噌溜溜製造同業組合 東區東樓町

準則組合

- ▲東海紡績株式會社 資本額二十五萬圓
- ▲名古屋倉庫株式會社 資本額二十萬圓
- ▲尾張炭礦株式會社 資本額二十萬圓
- ▲眞田貿易株式會社 資本額二十萬圓
- ▲名古屋製油株式會社 資本額二十萬圓
- ▲愛知時計製造株式會社 資本額二十萬圓
- ▲名古屋製函株式會社 資本額十萬圓

- ▲日本郵船株式會社出張所 四區木挽町
- ▲内國通運株式會社支店 同 泥江町
- ▲大日本麥酒株式會社出張所 中區新柳町
- ▲加富登ビル株式會社支店 同 笹島町
- ▲東京火災保險株式會社支店 同 榮町
- ▲海上運送保險株式會社支店 同 榮町
- ▲共同火災海上運出出張所 四區傳馬町
- ▲送保險株式會社 東區鶴巻町
- ▲仁壽保險株式會社出張所 東區鶴巻町
- ▲生命保險株式會社出張所 四區東町
- ▲有隣生命保險株式會社出張所 四區東町

(五)

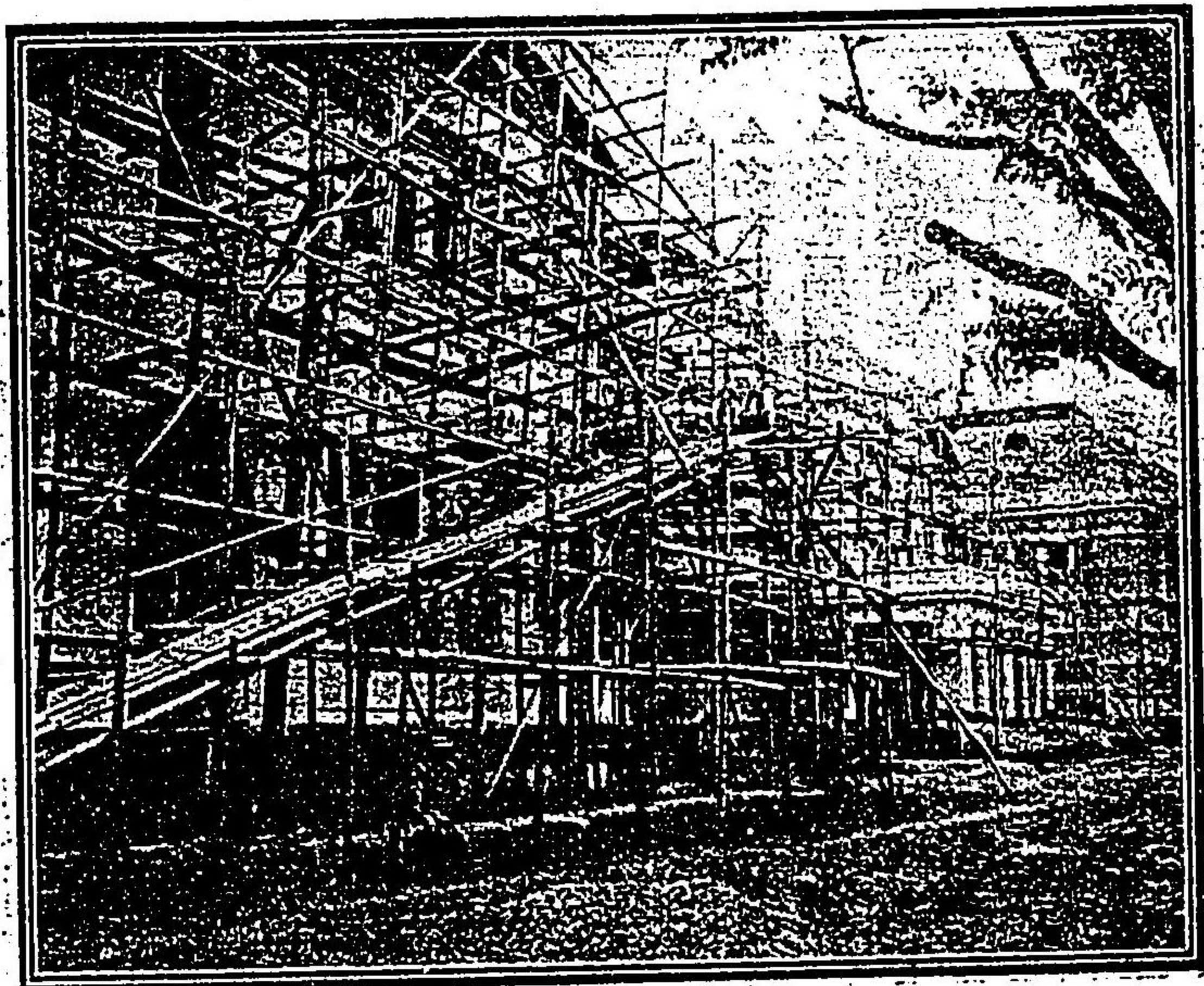
- ▲和洋什立物職組合 四區島田町
- ▲名古屋肥料米穀問屋組合 四區大船町
- ▲名古屋汽車積業組合 中區堅三藏町
- ▲名古屋硝子製造組合 東區四二葉町
- ▲名古屋建具商工業組合 四區皆戸町
- ▲名古屋寄物商組合 中區新柳町
- ▲名古屋菓子製造組合 四區澤井町
- ▲名古屋市文房具商工組合 四區井桁町
- ▲名古屋油商組合 東區赤塚町
- ▲名古屋瓦商組合 西區木挽町
- ▲名古屋足袋問屋組合 西區伊倉町
- ▲鮮鰯組魚業組合 熱田木免町
- ▲名古屋米穀業組合 東區南久屋町
- ▲名古屋雜菓子製造組合 四區鏡下町
- ▲稼商組合 中區南廟宜町

實業團體

- ▲愛知縣五二會 中區南長島町
- ▲名古屋商工懇話會 四區本重町

陳列館及勸工場

【愛知縣立商品陳列館】 中區門前町の舊博物館を取壊はし、建築費三十七萬二千圓を投じて明春共進會迄に、以前に倍する商品陳列館の一大建築を完成すべく目下工事取急ぎ中で、敷地六千二百六十餘坪、建物九百六十坪、第一號館二階建五百四十坪、第二號館第三號館平屋建各二百十坪の三館に分れ、紅紫燦爛たる縣産物を滿載せられる筈であるから竣成の上は必らず人目を惹くべく、尙農科大學に設計を委嘱し、敷地内に五棟の植物温室建設の計畫もあり、又敷地の一隅に有名なる猿而茶席の古雅愛すべきものもあるから、産業獎勵上に又娛樂上

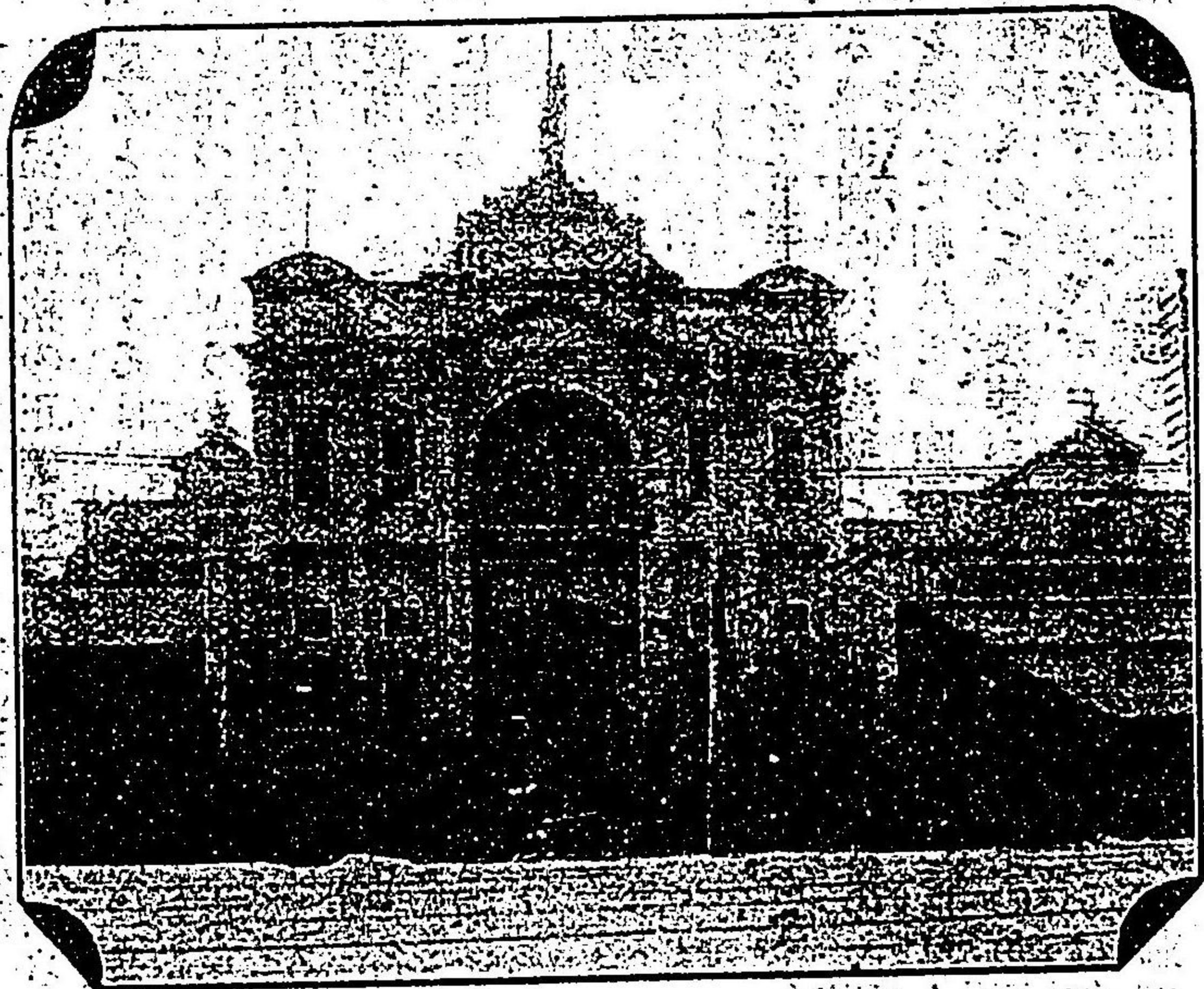


愛知縣商品陳列所

(三)

に唯一の勝區となるであらう、として明春共進會開催中は市に於て借受け、工業美術教育品の展覽會場に充つる等、【五二會陳列館】 廣小路通新柳町、白塗の棟高く丁藝の女神が電燈を指上げて、美的に云へば中京産業界を照耀して居るのが五二陳列館、中へ這入れれば勸工場式の毛の生えたもの乍ら、孰れも縣産品の而も品が堅く價も比較的廉であるから、つゝ知らず、財布の紐の解ける所、又時々日本刺製品共進會を開き、全國の製産品を陳列して即賣もやる。

【勸工場】 勸工場は廣小路と本町通との交叉する近邊に三ヶ所あるが、孰れ



愛知五二會館

(四)

も小規模で品数が少なく且つ下等品許り。其上品質價格の正確と云ふ勸工場の原則さへも暖昧で、斯んなものを名古屋の勸工場に御座ると紹介するは、少々お耻しい次第。又々中央大府を昇ぎ出して、都府相應の勸工場を作つたらどうかと相談したくなる。東京上野三橋の第二博品館の如く、買物食物寫真屋床屋女髪結。浮世の物は何一つ備はらざるはなぐ、唯無いものは湯屋許りと云ふやうな大設備の、せめて半分の設備があつても、名古屋に於て大當りを取るのが必定である。算盤に明るい市民諸君は、一つ此方面をも弾いて見るが好からう。

市場

〔熱田魚市場〕熱田魚市場は、緩漫悠長な名古屋に於ける活動的なもの、珍奇なもの、殺伐なもの、小氣味の好いもの、随一である。清洲時代の遺物として幅の利くもの、親玉である。猶豫すれば腐つて役に立たぬ生物を扱ふに馴れて、四百年間素早く手取早く養ひ成された商賣の調子は、随分と鋭く激しいもので、幾等か薄く溶した江戸兎の魚河岸臭い匂いがする。打てばゴチンと金石の響を發するか。ポコ、木魚の音を出すかは知らぬが、兎に角血の循環の早い生ッ粹の熱田ッ兎は、此界限の魚臭い隊長共に止めを刺す。

(四五)

商賣は朝の五時半から七時半、六軒の間屋と、市内七百名の魚屋と、之に従ふ下廻りを併せて一千三百五六十の磯臭い連中が、競賣競買の敵味方に分れて、最も少い夏季の八九百圓から、最も多い十二月中旬頃の七八千圓迄、何千何百貫と云ふ魚類を、僅二時間の中に咄嗟に片附けて了ふ(年額約三十)實に目覺しい戦々振り、不思議の商法だ。非運を人類の胃中に葬るべく、此處へ集つて来る鱗族の客は、尾張三河伊勢紀伊駿河遠江の沿岸は勿論、遠く敦賀金澤九州邊から来る鐵道客、或は樺太朝鮮臺灣滿洲などの舶來客が主で、是等が忽ち午前中に市内を飛び廻り、刺身照焼煮肴と姿を交へて、市民諸君が午時の膳上を賑すと云ふ寸法である。

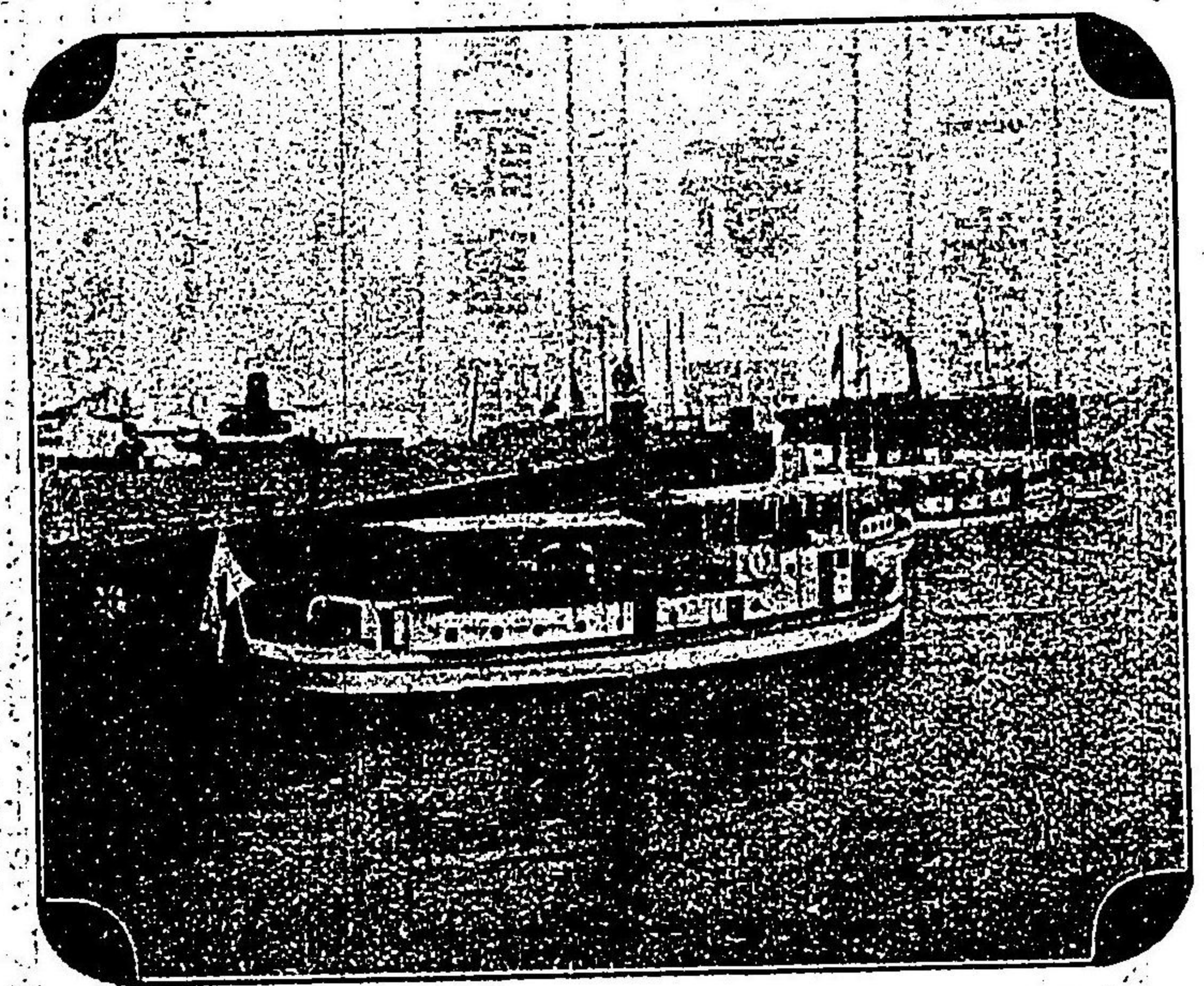
〔枇杷島青物市場〕市外乍ら市外と云はれぬ町續きの枇杷島、此處は云ふも管なる中京市民の食膳に、野菜の緑りを供給する青物市場、魚市場の魚類に於ける、青物市場の野菜に於ける、共に市民の生活に一日も缺くべからざるもので、昔から顯著に存在を認められて居るものである。さりと乍ら野菜は魚類ほど腐り易きものにあらず、芋大根を取扱ふと、鯛鰹を取扱ふとは氣心の上に大なる相違あり、魚市場の骨ッぼきに對して筋ッぼく、急忙しさに對して緩みのあるは青物市場である。噛んで碎くべき骨なく、齒切れのしない筋あ

り、青市趣味はどうしても肌障りが柔らかい。市場は庄内川に架した枇杷島橋を挟んで、西に清洲時代以来の間屋二十二軒。東に明治生れの間屋十一軒。併せて三十三軒。野菜は知多郡の皮腐豆、海東海西の蓮、有名な宮重大根を始め、尾張北西各村の産物を主とし、京都の筍、紀伊大和の密柑を始め近県の産物亦少なからず、是等は馬の背や荷車に依つて夜中絶えず市場に運び込まれ、荷車丈でも千輛乃至千五百輛。寄附く土臭い青臭い隊長が四千から五千人、夜が明けて六七時になると、狭い僅の場所人間と荷車と蔬菜とが、一杯に押詰つて一種異様の働作と聲音とを以て、小氣味好き競賣取引を始める。附木片手に筆を啣へた競子がさア幾何と八方に駆け廻り、咄け値も競り上げも手拍ちも存外サツサと運びが早く、何千萬貫の野菜が大抵正午頃迄に片附いて了ふ。取引は野菜の性質上、春秋二季は閑散で夏冬二季は繁忙、種類は生物よりも乾物が多額、得意先は近縣全部は勿論、關西中國九州滿韓西比利亞米國に及び、一年の市場取引額約五十萬圓。

名古屋築港

名古屋築港は、最初縣事業として明治三十二年春から工事を始めたが、三十九年之を市

に移して市營となし、翌四十年竣工を告げて開港する事になつたので、四千噸の汽船を入港する筈の干潮時二十尺の水深と、一時に港内に三十萬噸の大小船舶を碇泊する筈の豫定計畫が、果して其幾部を完成したか分らぬが、兎も角も一旦竣工は告げた、併し開港以來滿二ケ年を経過しても、一向目に立つ汽船の入港も見ねば、耳寄りの出入貨物をも聞かぬ所を見ると、築港はまだ未製品で、此儘では例へ臨港電鐵並に精進川等の、海陸聯絡事業が完成しても、大した發展を期待し難く、殊に競争港たる四日市に對して、其向を張るが如きは先づ以て不可能



名古屋築港

(五)

(英)

NAGOYA HOTEL

御 旅 館

名古屋ホテル

名古屋市西區堅三藏町

電話 二二一五番(日本館部)
二七二番(西洋館部)

青年實業派 機關

報導忠實記事穩健

扶桑新聞

改革後歩一步發展

中央新聞業
矢 嚆

である。だから名古屋港を根本的に不完全とし、知多郡日長沖の天然良港を外港にしようとする説と、或は現在の築港に第二期の計畫を加へ、廣袤水深共に完全の設備にしようとする説とが起つて居る位で、其何れに着手するにしても、市民は今後港湾問題に就て一大奮發しなければなるまい。

名古屋味噌醬油製造業同組合

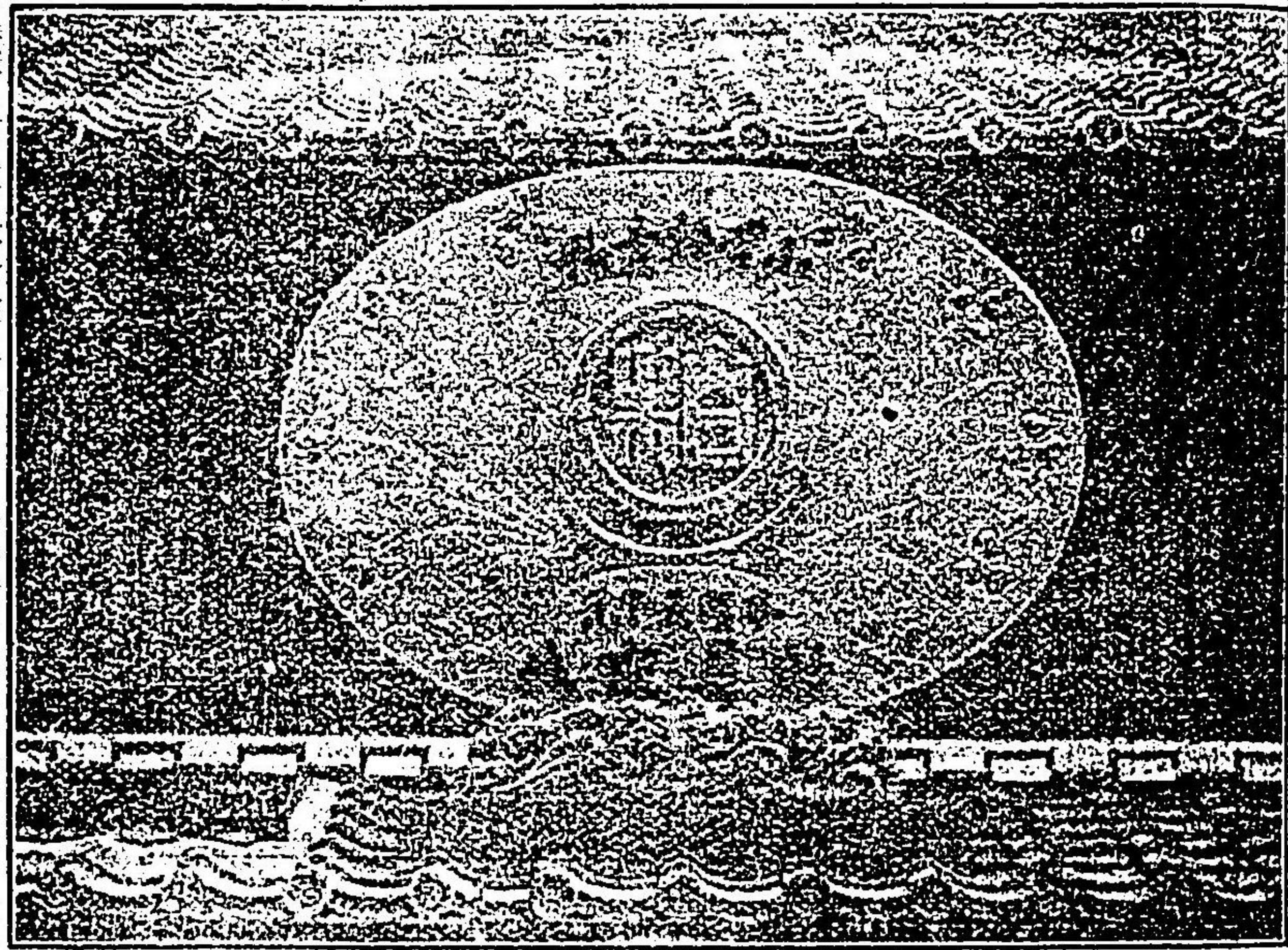
標章



組員

(氏名いろは順)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|------|-------|-------|--------|-------|---------|---------|-------|-------|--------|---------|--------|-------|--------|-------|--------|--------|
| 中市場町 | 堀詰町 | 四瓦町 | 神樂町 | 熱田東町 | 皆戸町 | 梅ヶ枝町 | 東ノ町 | 和泉町 | 伊倉町 | 押切町 | 熱田白鳥町 | 押切町 | 駿河町 | 江仲町 | 相生町 | 傳馬町 | 小舟町 | 中市場町 |
| 杉江藤左衛門 | 森本鐵三郎 | 志村量吉 | 水野伊助 | 酒井菊次郎 | 齊田庄左衛門 | 淺井鋸太郎 | 合資社鈴木商店 | 吹原重太郎 | 牧野作兵衛 | 山田藏三郎 | 藏木八左衛門 | 奥村市三郎 | 太田藤吉 | 村井治兵衛 | 神谷傳右衛門 | 渡邊喜兵衛 | 早川四郎兵衛 | 蜂須賀光次郎 |
| 坂上町 | 押切町 | 鍋屋町 | 古山來町 | 赤塚町 | 坂上町 | 神樂町 | 宮町 | 荳屋町 | 赤塚町 | 仲ノ町 | 熱田新屋頭町 | 上園町 | 赤塚町 | 八阪町 | 上園町 | 小市場町 | 傳馬町 | 赤塚町 |
| 鈴木利助 | 森田清助 | 森川市次 | 柴田嘉兵衛 | 宮崎平四郎 | 酒井孫六 | 赤尾清太郎 | 近藤武兵衛 | 合名會社佐野屋 | 深田源六 | 山田治吉 | 矢代吉次郎 | やまに合資會社 | 大島善左衛門 | 井桁商會 | 種田勘七 | 加藤かよ | 堀田合資會社 | 蜂須賀周三 |



貴金屬美術品

寶石珍玉珊瑚珠類

御儀式用鼈甲櫛笄

囊物及裝身具

新柄半襟化粧品等

御注文并に修繕品貴意に可應候
尙御進物用商品切手發行仕候

名古屋市本町五丁目



柏屋 伊藤庄八

電話 長三三番
振替口座東京六三六九番

熱田海岸

(船客取扱)

御料理御旅館

いせ久

電話六二二番

御料理御旅館

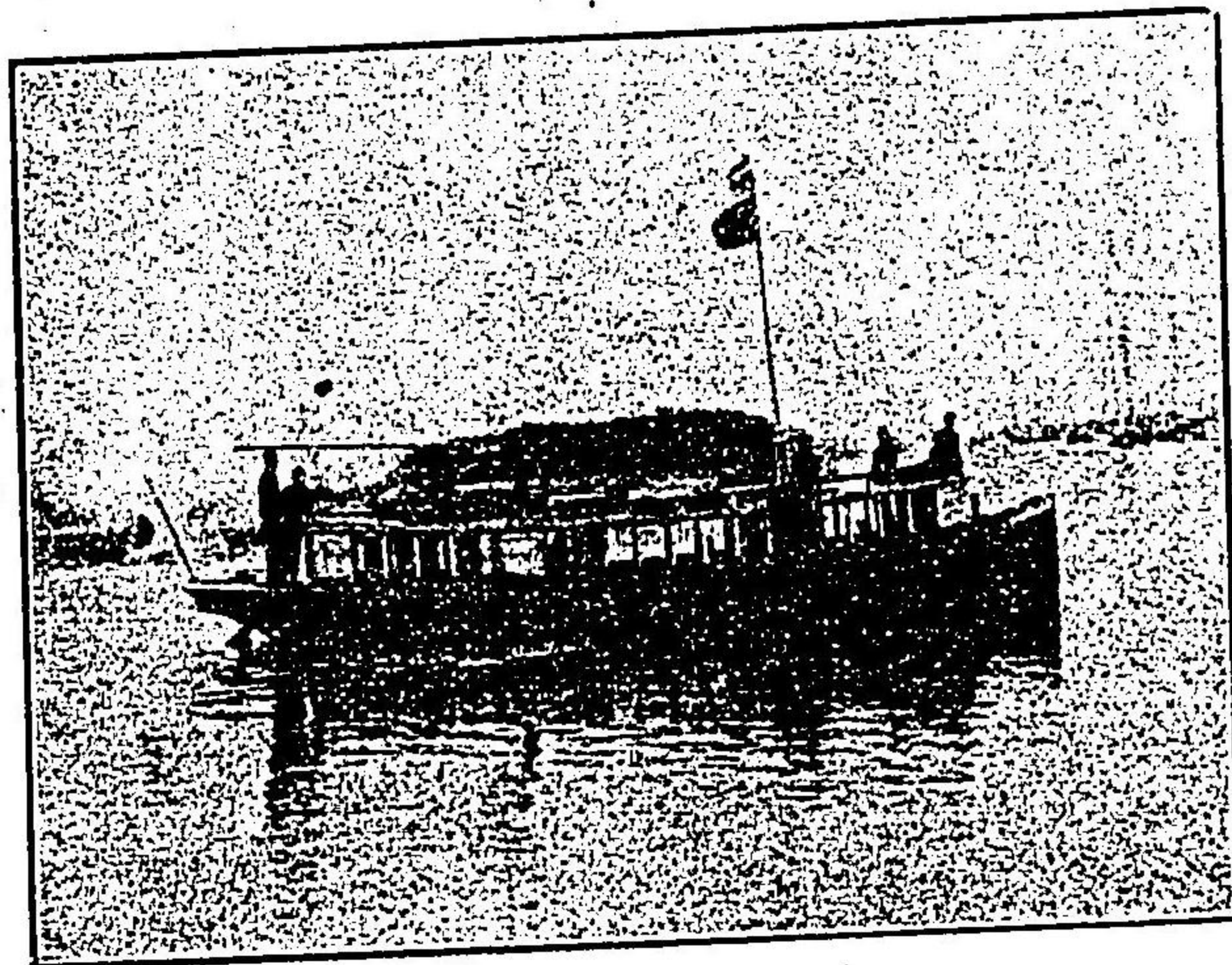
大森

大森仙左衛門
電話二二三三番

御料理御旅館

岡田屋

電話二二五番



名古屋市南區熱田海岸

名古屋
巡航機船
合資會社

電話一六二四番

巡航船は熱田海岸より發し近くは築港の見物並に名古屋教育水族館の觀覽に便をなし遠くは知多郡西沿岸の各所に向ひ毎日數回の巡航をなす極めて簡便なる交通機關なり船内清潔速力快捷風光清美なる伊勢灣内の觀望を擅にしつゝ往復せらる

京源繡箔店

當店は總ての繡物
各宗の打敷
祭禮用の飾物
角力の化粧禪

等を製造し併して錦、金欄類を賣る市内で一番手堅い店な
ので開業は元祿の初年現世は八代目誠に好く打續た評判の
店である依て奇麗な繡物は此店でなければならぬ様に云は
れて居る

名古屋市本町三丁目

京屋上田源治

御料理

市内南區傳馬町

釜揚うなぎ

山丸

いけ洲

山丸娛樂部

御料理

釣月

舊圖書新田

電車熱田終點ヨリ南へ約一丁半



述 廊
吾金樓波金 子和家木笠

實

確

町砲鐵市屋古名
店北助惣谷岡

番二一特電
番四九二話

諸 器 械 製 作 所	塗 佛 具 類 支 店	鑛 油 肥 料 東 店	度 量 衡 金 庫 東 店	釘 針 鐵 金 鋼 鐵 店	器 物 地 類 南 店	銅 鑰 金 類 南 店
----------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------------	---------------------------------	----------------------------	----------------------------

熱田町高倉神社北

店 支 店	鋼 支 店	鐵 阪 大	洋 大	商 物 支 店	鐵 支 店	諸 支 店	洋 支 店	和 東 店
-------------	-------------	-------------	--------	------------------	-------------	-------------	-------------	-------------

目丁一通北堀長西區四

目丁三町馬俣小橋本日

強

勉



盛 榮 連
大 葛 辰 長 吉 新 旭 小 染



株式會社
愛知銀行

名古屋市西區玉屋町

電話

一七一一
二七八五
二七〇八
番番番

半田支店 (電話 七番)
 豐橋支店 (電話 二五六番)
 津島支店 (電話 八番)
 岡崎支店 (電話 二〇八番)
 津市支店 (電話 一二番)
 四日市支店 (電話 三番)
 古渡出張店 (電話 三五番)



陸 運
秋の家小玉 福 旭 染

有栖川宮殿下御買上の光榮を蒙りたる名譽ある

♡
メリケンハート印掛時計

首府東京銀座街頭讀賣新聞社屋上及長岡市北越新聞社屋上に屹立する四方面大時計は共に本店工場の製作品なり

一は帝都の中天に一は北陸の一角に聳へ共に示時の標的を爲す

總てメリケンハア

ートの印ある掛時

計は機械の堅牢と

示時の正確なるを

以て好評嘖々とし

て名聲洽く中外に

振ふ



名古屋市玉屋町四丁目

長谷川時計店

電話五〇六番・五五九番



連 榮 盛
やらもお屋松若

連 榮 盛
奴若屋松若

連 榮 盛
女乙屋葉若

連 日 朝
代 梅 家 梅

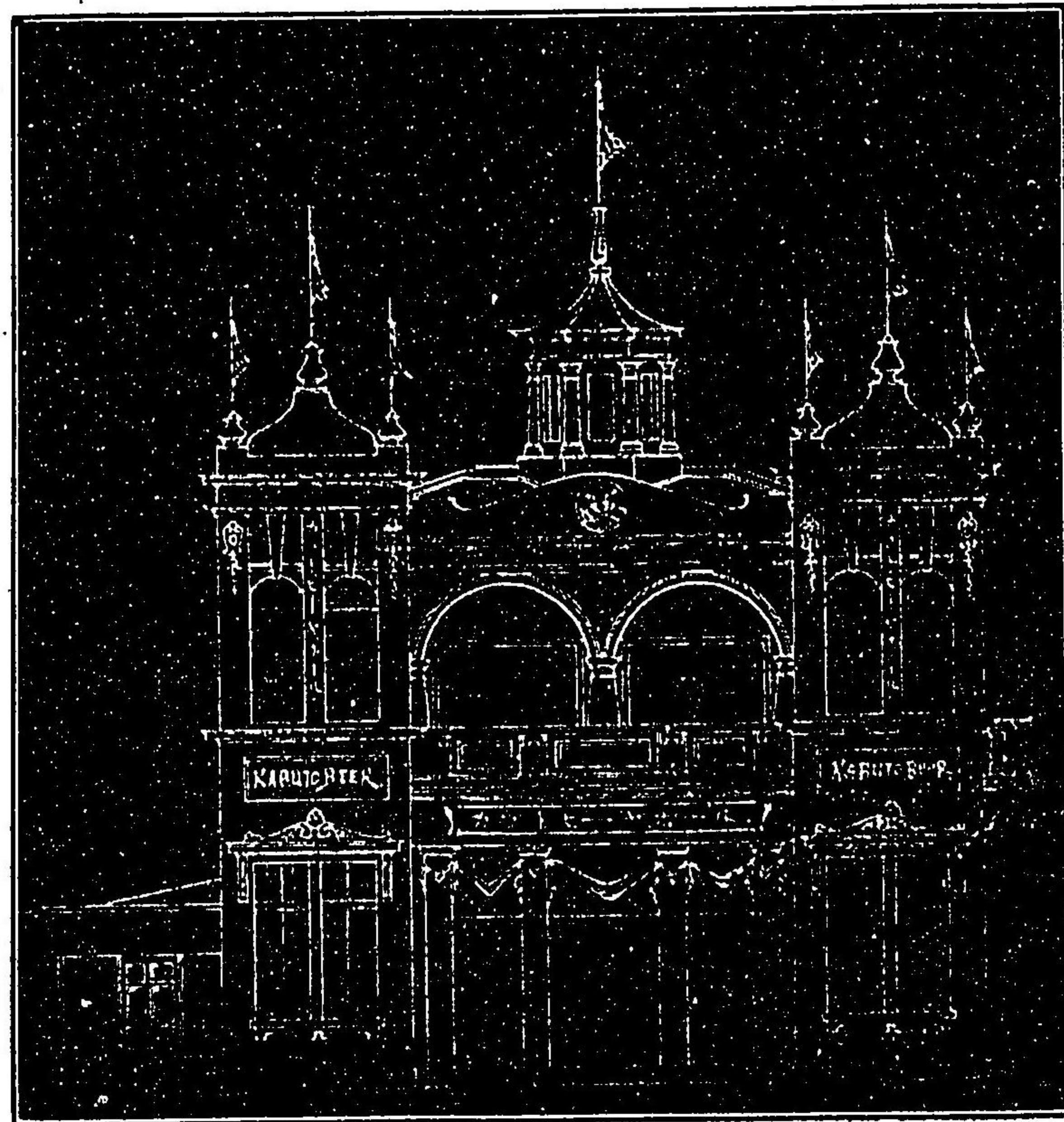
連 日 朝
めそ小屋筒井

株 加
式 富
會 登
社 麥
酒

東 京 銀 座 三 丁 目
大 阪 名 古 屋 新 柳 一 丁 目
愛 知 縣 半 田 一 丁 目
東 京 向 島 小 松 島 (中設建)

本 支
工 場
店 場

第 十 回 關 西 府 縣 聯 合 共 進 會 場 內
カ ブ ト ビ ヤー ホ ル





連 陸 連 廓
 とい家の秋 樂小樓岡福
 連 榮 盛
 代喜屋花新
 連 榮 盛 連 陸
 とい屋丸 ない小やゝさ

館旅正河

〜向(文河)町原田小市屋古名

番 二 三 二 話 電 園

目丁一町勢伊南市屋古名

館旅屋田岡

番 六 三 四 一 乙 話 電

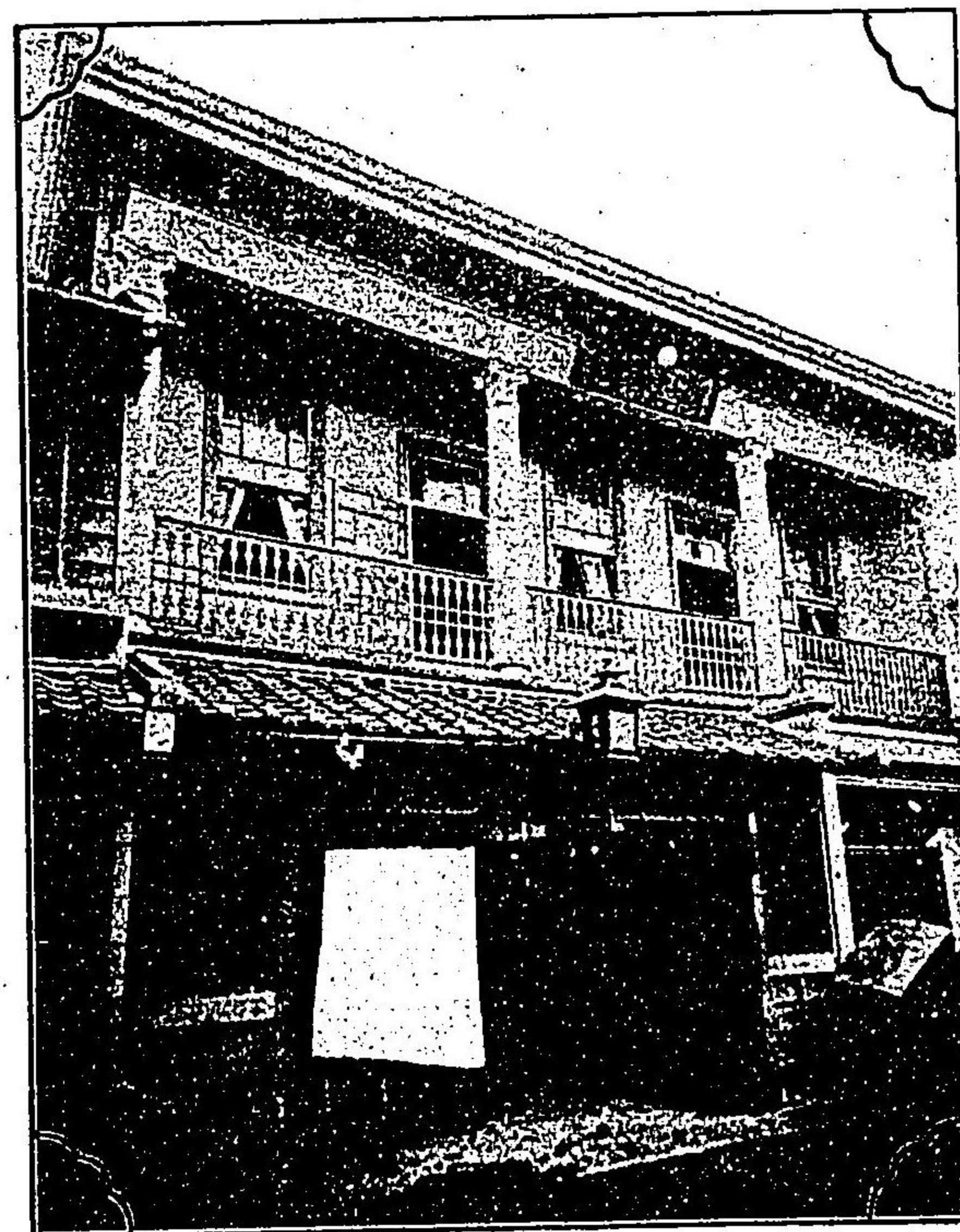


連 卯 連 日 朝
 金小波金新 また辰田山
 連 日 朝
 三長辰田池
 連 卯 連 日 朝
 代千岡福 れたやりどみ

西 洋 料 理
借 樂 亭

名古屋市富澤町四丁目

電話 八四二番





連 榮 盛
子 重 屋 浪 信



連 城 金
や ち も お 屋 梗 桔



連 田 熱
ほ ん と 山 丸

朝 日 連 紀 伊 國 家 す す め



連 田 熱
な ず す 楓 海 晴

名古屋市中東區
富澤町二丁目

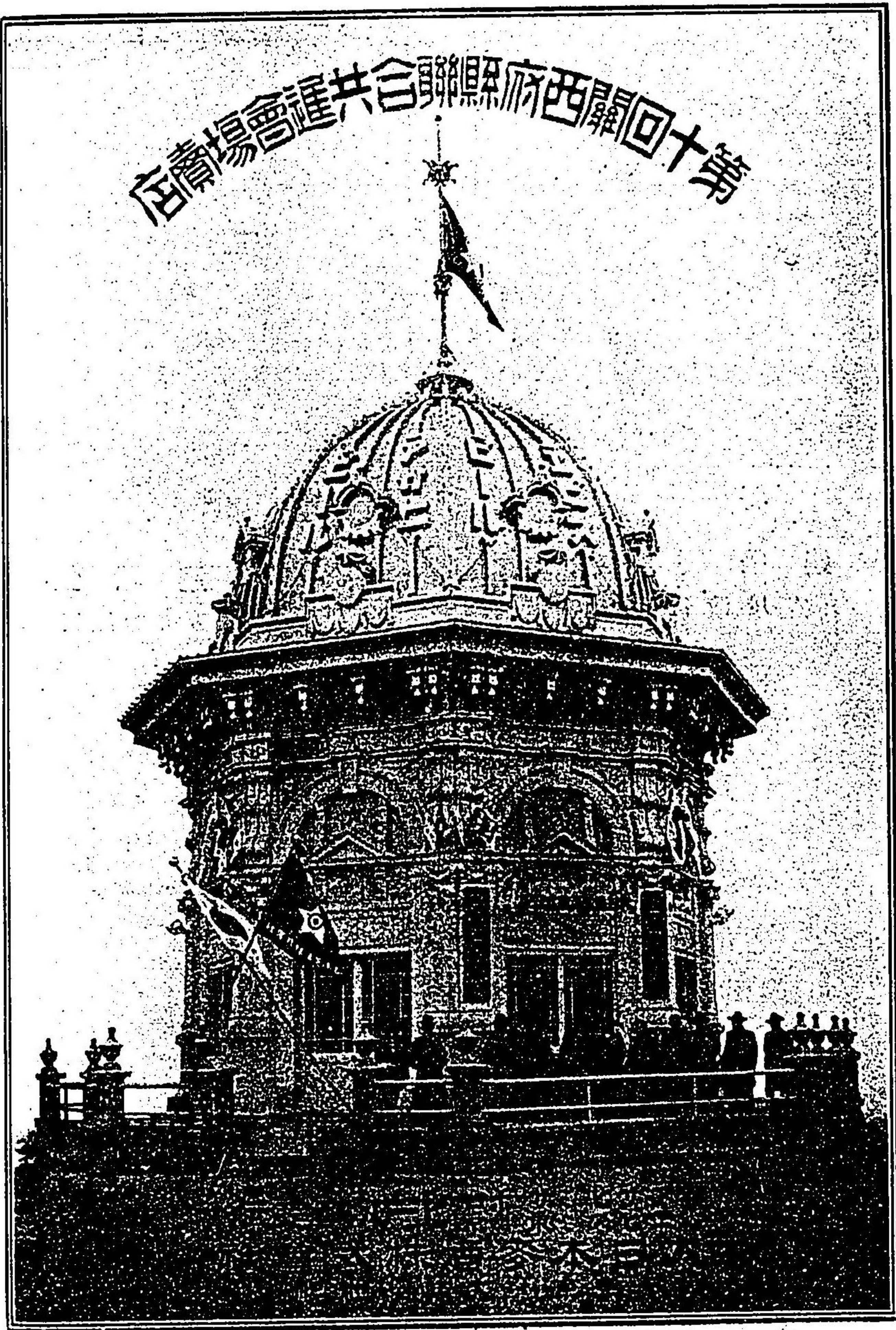
● 引割 迅速 配達 配 東 籍 書 刊 誌 雜 ●

● 類 書 集 繪 人 美 屋 古 名 ●

店 書 堂 京 中

● 電 話 一 七 九 四
振 替 九 五 七 七 ●

第十回關西府縣聯合會場商店



一 勝地

名古屋は平面な都であるから、風景上山の奇と水の美に乏しく、市内には取立てて紹介するほどの名勝もないが、信向の盛んな所丈に、神社佛閣などに一見の価値あるものは随分少くない方だ。殊に歴史的舊蹟に至つては、日本一の英雄産地であるから、例へ其古跡は充分の保護を缺いて居るにもせよ、尙誇るに足るものは幾等もある。

名 勝

南部の八事山興正寺とは、最も築山の風致を深からしめるものだ。名古屋人が東山を京都の丸山に比較するの尤もである。併し此東山の特色は、京都の如く肌理の濃やかな肥た土質ではなく、瘦せて疎く脆い土質なのと、色が黒でなく大赭色なのが特色である。即

【東山の風光】東山一帯女松が崗の丘陵は、殺風景な名古屋の風光を保護するの、一大築山然たるもので、北部の覺王山日蓮寺と、



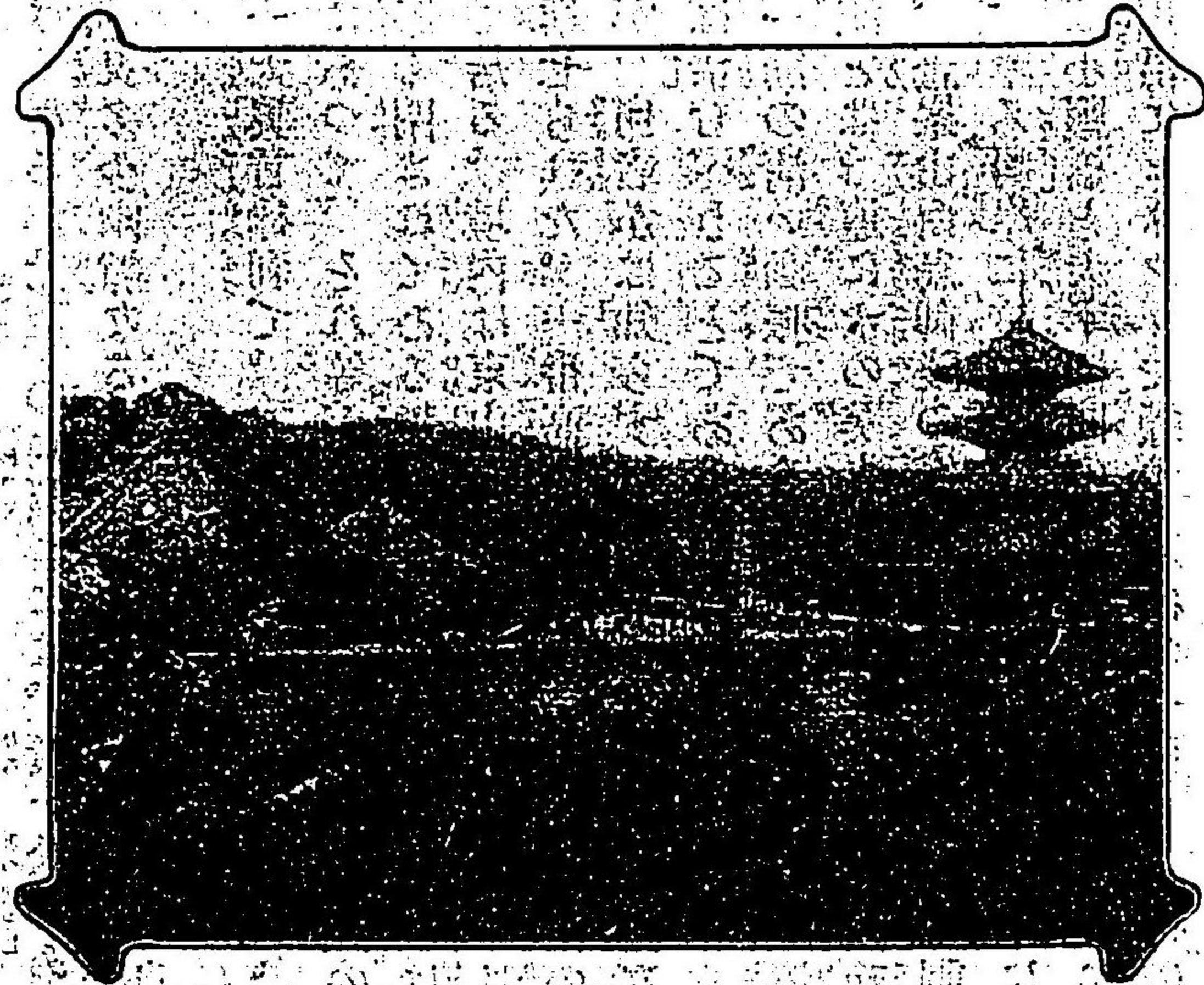
東山の風光

ち地味が瘦せて居るから、普通の樹木の成長に合せず、岩石の上でも平氣に成長する女松男松のみの獨天下となり、松の翠と土の大楮との配合が、別種の趣味ある風光を作るので、又瘦せて枝葉の疎らな所に一種の風致ある此界限の女松が盆栽として東京人に珍重せられ、近年盛んに輸出するものも是が爲である。好日美晴、半日の郊外散策を試みる場所として、市の附近に最も適當な所は此東山位のものである。試に一度杖を曳て見よ、産毛よりも少ない女松の落葉は、燃料取る乙女子の熊手に掻き寄せられて新しい腐植土を造るに至らず、樹疎らに枝疎らに日光の到らぬ隈もなく、何所に寝ても衣の汚れる憂がない、實に乾燥

(二)

て又明麗である、一體明麗と云ふ以上は、乾燥の反對温潤明麗となるのが普通であるが、此東山の風物は乾燥明麗であるから面白い、そして此女松が崗の淺翠を縫ふて、小櫻織黒皮胴、思ひく、に鎧うた武者共が、種々の旗指物を木の間に靡かせ、追つ捲りつ鎧を削つた元龜天正の昔を思ふと、四條派の繪を其儘に、何とも云ひ知らぬ優しい詩情が起るのである。

「覺平山日還寺」は、信向の部に説いた通り、暹羅波來の佛骨を納めた爲に一つの靈場となつた丈で、別に大した由緒もなく、伽藍も好い加減なものであるが、佛骨其者が珍且つ有難いので、納骨堂は近く金銀づくめの七寶塔となり、又境内は一圓櫻樹を以て埋められるさうだから



八事山興正寺の景

(三)

附近の桃林と相俟つて、俗的名勝になり掛けてゐるが、北手の崗嶺には、廣い松林あり、委蛇たる細徑あり、芝生あり、見晴しあり、又多少幽靜なる森の趣味をも味ふことが出來る。

〔八事山興正寺〕は、東山南部翠丘上の一大真言律刹で、五重の塔、大日堂を始め、元祿元年創建以來の古色を帯んだものが澤山にあつて、それ等が高低委蛇連々した小丘の彼方此方に程なく配置せられ、松深く或は藪深く閉ざれてゐる趣もある。此一區域は東山も古氣沈着と云ふやうな別種の趣を呈して居る。境内は東山西山の二つに分れ、東は昔女子禁制であつたので、一名尾張高野山と稱せられた、一番高い吐月峯に上ると、梢の先に遠く青海原を眺め、一寸好い景色であるが、何者かは知らず玩弄物のやうな、俗悪な手洗鉢や堂などを設け、折角の感興を殺すのは惜むべきことである。(八事行馬車 鐵道五錢)

〔堀川の風光〕堀川は中京に於ける、唯一筋の清い動脈である。人家櫛比、百貨輻湊の中流は、繪にも詩にもならぬが、上流と下流とは、道に水の美と郊外の風物との、調和を認められぬ譯でもない。下流は尾頭橋以南、鷺峯山白鳥御陵の邊迄が、水と兩岸との調和する所で、幾等か風景らしい心地もするが、寧ろ對岸に渡つて、片脚を菜圃麥浪の中に入れば乍ら、漫歩する方が一段と面白い。上流は小鹽橋と大幸橋間の右岸が松樹の鬱蒼たる舊三の丸の土堤脚に、櫻と楓を植えたのと、川沿にヒネクレた蠟の木(楓の一種)を、行儀よ



く並べたのを以て、一寸人の脚を引き留める價值がないでもないが、寧ろ今三町進んで筋違橋上流の趣多きを見るに若かない。檣樓を洗ふ薄汚なき舟小屋を越して、練兵場の邊に到ると、水流は急に清淺となり、眼界は急に濶大となる。廣い田野を見透しに、水盤の置物のやうな村や杜が參差錯落した上に、信越の山々を薄墨の背景と眺める所、如何にも濶大である。しかく濶大であるが、伸んびり緩つたりとして、如何にも呑氣な光景である。殊に永門の上流、河床が急に高くなり、流れが緩くなつた堀川の兩岸に並行する、葦草のやうな松並木が、此風景の中心となつて、總てを靜かに、穩やかに、總てを物柔らかに感じさせる。名古

屋式風景の特色、名古屋式樹木の特色を手ツ取早く見るには、先づ此邊が適當である。

【廢園の趣味】 物質的大都府に、斯んな草深い、感興の深い、荒れるがまゝの廢園があらうかと、珍らしく思はれるのは葵町の舊藩主下屋敷の遺趾である。此所は例の潤達な宗春公が、庭園内に東海道五十三次の風景を、小さく墨み込んだ豪奢の名残で、今現に存して居るのは、箱根の山を始め二三の小丘に過ぎないが、饅頭笠を伏せたやうな松山傳へ、樹木の蓊々と生え茂つた險阻の箱根を越えて、後の谷合に下り、熊笹分けて前の小丘に攀ち上れば、直下に池があつて、島もあれば松もあり、昔の亭榭も其傍を存して居る。そして此丘上から市の東南部、殊に共進會場を手に取るやうに見えるのは、中々の眺めてある、名所は大抵下らぬものなり、斯んなヒネッタ方面を見るのは、却つて活きた中京の見た方であらう。

【英雄代表の松】 名古屋の好季候は、樹木に取つて寧ろ有難迷感である。なぜかと云ふに天然の好季候は、總ての樹木を温室仕立に育て、早く成長させる代りには、又早く枯死させるからである。酷烈な風霜と闘つて根幹を鍛へ、震動千年木精の化けさうな名木となるを許さぬからである。名古屋の名所舊蹟が案外に詰らなさは、古跡保護の觀念と相容れない、實利主義の盛んな爲でもあるが、手近い理由は、古跡に深く根を張り、悠久な時間と風雨の侵蝕に對抗して、思ひ出多き昔を語る雄大な樹木の乏しい爲である。併し乍ら面

積三方里の大府であるから、此原則の例外と見做すべき、二三の雄大な樹木がないでもない、そして物好きな編者が、市中の樹木狩を始めた結果、選み得たのは樟と松との三種で他の樹木の多くは、幹ごとへん折つて爐に焚べても惜からぬ代物の中に、獨り亭々として群小を睥睨する概あるものは、織田豊臣徳川三氏の雄姿に似た、三株の巨松である。

其一は門前町性高院の長松で、名古屋市の年齢に二倍する、六百五十年以上のものである。高さ十丈、周圍五間、直徑約九尺、一見直ちに人の膽を破るに足る。幹は三丈にして正しく二幹に分れ、幹々更に二幹に岐れて、蓋々天を刺し、肩を聳かした屈鐵の剛枝は、手のやうに



性高院の長松

低く垂れ、餘勢殆んど地を摩せんとする。枝幹些の缺損なく、生氣は表皮に溢れて、針葉濃且つ密で、傘蓋の下正に五百人を座らしめる事が出来る。眞に樹木の霸王、男性の完璧、英雄の好模型である。之を豊太閤の代表的樹木としても、決して不倫ではあるまい。

其二は壽經寺(同町)の松である。軀幹するく延びること約八丈、半空に到つて急に羽翼を張り、盤桓すること約二十間、頗る豪壯である。けれど幹に枝を切つた痕の鮮かなのと眺めるに適當の位置のない點は、缺點の多い織田右府を代表するものと云つて好い。其三東本願寺別院の松は、以上の二株とは全く行方を異にし、丈よりも幅に全力を注ぎ、高さは僅に五丈足らずだが、枝は幹下四尺から行儀よく七八階に及び、段取の正しく枝葉の繁茂した點は、華を避けて實を取り、家門の繁榮を圖つた、家康式をそつくり其儘である。

樟の雄なるものは、熱田神宮境内に數株の古楠樹がある。最も古いものは鑑武者の五六人も這入るやうな空洞を拵へ、若くして枝葉の繁茂したものは、若葉の眺め又格別である。年数は大抵千有餘年を経過したもので、七五三繩を張らなくとも、多くは神木と稱すべきものであるから、悠久と云ふ觀念に於ては、松の到底及ぶ所でないが、松が深い詩的感興を惹く點は、又到底樟の及ぶ所でない。

【風景上の金城】 名古屋城の結構及び歴史等は、既に第一編に於て述べたから、茲には

風景上から聊か述べて見よう。何れの城廓でも、城廓と云ふ以上は、一地方を支配すべき形勝の地を占めて居るのみか、永い年代の寂びや若が附いて居る爲に、例へば廢殘の城趾でも、尙ほ其都市に於ける風景の中心點たるを失はない。況して天下有數の名城で、而も一の丸から三の丸まで略ぼ昔の儘なる名古屋城が、名古屋風景の中心たるは勿論である。

名古屋城は平地の城廓であるから、東西南北の四面、皆觀望に可ならざるはなしである。が、近く眺めるに適當の位置は、低い西北隅筋違橋の邊から、堀を隔て、城廓を仰ぎ見るに若くは、遠く望むには、北練兵場を隔て、堀川の畔に立つに若くはない。單に正面から見たりは、名古屋城の眞價が分らぬ。もし城廓を名匠の手に成つた大繪巻物とするとは、白龍雲を喚んで、將に昇天せんとする勢あるものは、天守閣、龍に睛を點じ、天守の眼玉となつたものは、一双の金鏡で、此堂をたる白開と燦爛たる金鱗との相映發する美觀は、平原の何れからでも望むことが出来る。名古屋風景の一種雄麗なるものあるのも、實に天守閣が中心となるからである。尾張名古屋は城で持つと云ふ俗語も、要するに天守



風景上の金城

の美観を讚美したものに過ぎぬ。序に云ふ、朝夕天守を眺めて暮す城北の農民が、鯉の金光は作物を養ふと云ふ迷信を懐き、毎日黄白(天守の白色)金鯉の黄色)を眺めて暮す市民が、拜金主義を懐くのは、是れ皆天守閣の感化でなからうか。

【將來の公園】是迄の名古屋は四十萬の大都市に、唯一つの公設公園さへもなかつた。名古屋風景の中心で、最も公園に適當な舊城廓は、本丸は離宮となり、二の丸三の丸は兵營に占領せられ、他に早速形勝の地も見當らなかつたのが、公園的設備の後れた原因であるが、明春共進會の敷地たる、舊御器所村の地域十二萬二百坪は、共進會閉會後、縣設公園としての設備に着手せられる筈であるから、將來は大都市に似合ひる公園となるてあらう。尙ほ以前公園にする筈で、規模の狭隘な爲に廢された、門前町の元浪越公園は、區域は猫の類ほどであるが、園内の樹木のこんもりとした小丘は、元浪越山(或は那古野山)の最高部が、僅に保を殘したもので、名古屋地理研究上、趣味ある遺物だ。此園内に在る枝葉の少い、長い一本棒のやうな特種の松も、亦昔からの遺物で、公園入口の柳の井戸も、名古屋三名水の隨一で、中に由緒のあるものだ。

【花の中京】花の中京と云へば、花の大坂、花の東京などより、遙かに粹に響くが、本物の花は誠に以て少ない。粹筋な解語の花は、有り餘る程多いが、清い自然の花は、情けない程少ない。こんな風では、中京人が一年二三度の生命の洗濯は、何を以て遣るのか

と問ひたくなる。或は中京人が解語の花に食傷して、自然の花を愛する餘裕がなく、従つて花の培養を面倒臭がるのかも知れぬ。或は中京人の主義は、花より園子、花より算盤、花より女などの、色も香もない肉感宗であるのかも知れぬ。眞逆斯んなに極端でもあるまいが、兎も角中京人が、概して自然の趣味のお留守なのは事實である。是では趣味を解する大市民とは云はれまい。

中京の地味は櫻に適せずと云ふ人あるが、是は大變な間違で、師團の老櫻の如き、數は少ないが、立派に花の王たる資格ある。決して地味に適しない譯はない。念入れて培養さへすれば、満都を花の都と化すること寧ろ容易である。つまり四季の花はあれども、規模は狭く、又培養が入念でないから、名所として誇る價值がないのである。けれど案内の手前、名所の價值がなくとも、一渡り花の紹介もしなければならぬ。

花の魁の梅花は、大木村晴雪園、葵町寺尾別荘の二ヶ所、晴雪園は熱田神宮と向ひ合つた。東山丘上の二區域で、約三反歩三百株の白紅梅がある。木が若いので著花は随分多いが、嵯峨たる老幹の趣がないのと、庭内は殺風景な野良畠なのと、茶屋や食物の俗悪な爲に、梅花の特色は毫も現はれない。竹冷宗匠句あり曰く、「ひと幾人訪ふても梅の静かなる、俳人と云ふものは、眞赤な嘘を吐くものだ。之に較べては寺尾別荘の梅林は、木も古く幹に苔あるのが五百株に餘り、手入も能く行き届いて、花も繁く香りも高く、花片に頬

を打たれ乍ら、縦横の細徑を漫歩する心持は、眞に梅林に入つた氣がする。中々以て晴雪園などの及ぶ所でない。尙ほ園内には築山泉水茶室などもあつて、幾等か風致を助ける。殊に一人の別荘で、酒を酔つて騒ぐのが禁物なものと、門番の爺さんに頼めば、敢て入るを拒まないのは、何奇嬉しい。

【櫻花園】の最も立派なものは、司令部及び師團廊内の老樹であるが、数が少ない上に、大部分は司令部の増壁内に在るから、一般市民に取つては、手の届かぬ高嶺の花であるのが遺憾。先づ一般の遊覽所として、東本願寺別院内二三十株の彼岸櫻を訪ふの外がない。もし微醉機嫌の逍遙なら、旭廓花園町の夜櫻を眺めるも一興なが。是さへ大したものではない。其他落ち離れを拾ふとき堀川長畦の邊とか、浪越公園とか、七つ寺とか、人の庭園軒端とかに、ちらばらと櫻花がないではないが、花の名所と云ふ以上は、紅雲十里、一目千本の人は花雲に埋もれて、春の行衛を知らぬ底のものでなければならぬ。多くて三十本や五十本寄り集まつたからとて、花の名所もないものだ。斯く名古屋に見べき花がないから、四季の享樂の第一たるべき花見と云ふこともないのである。そこで花見らしい花見をせやうと云ふ人は、止むなく、市外の木曾川堤邊へ出掛けるのだ。

【木曾川堤の櫻】は、濃飛平原第一の名を擅にすべき。花の名所である、もし花を開くと充分であつたなら、東京の向島をも遣り込めるに好いが、惜い事には樹木の手入れを



木曾川堤の櫻

知らず、枝葉の川放題に任せて置くから、枝のみ繁茂して、肝腎の花は少々寂し氣である、けれど駒馬を並べて驅けさせるに好いやうな、堂々たる長堤が、緑の芝生に蔽はれた堤脚を、長く緩やかに延ばし、上に櫻と松、下に松を二行に並べせ、それが限りもなく續くのである。其上堤畔の一方は廣い平原で、村、森、人家、小流、菜園、苗圃などが、程能き間隔を置いて、飛白の模様のやうに配置され、此種模様が堤を横となして、平原の彼方迄、又限りなく續くのである。雄麗壯美の點に於ては、確に日本一の巨堤の名に背かぬ。斯う云ふと花は、景物扱ひになるやうなが、幾等充分に開かなくとも、吉野櫻は千株の上に出るのである。堤上

が、一面花の雲に蔽はれるは、云々迄もなり。
 其他名古屋に桃花藤花牡丹などもあるから、是等を十把一束に上げると桃花は覺王山及び枇杷島の近郊、藤花は市内車道の白藤園、米野の藤の棚、躑躅は八事山近邊、牡丹は八幡山の富貴閣、七本松の牡丹亭其他、菖蒲杜若は熱田神苑、秋の千草は矢田川堤、菊は萬松寺の黄花園、花屋敷、序に螢狩は城北の辨天森、清水町の町端附近、月見は東廣見附近、雪見は前津の香雪軒、



熱田神苑の菖蒲

大曾根の十州樓と、斯う云ふ相場であるが、併し是等を名

所として誇るには、聊か心細い次第、編者は寧ろ菜の花を以て、名古屋の誇るべき随一のものだと思ふ。春の名古屋は、四方四面悉く黄金の波濤に包まれ、天守の金鯱は、此金波の中から躍り出たのてないかと怪まれる。其角も今日の名古屋を見たなら、菜の花の中に城あり郡山とは云はなかつたらう、次に誇るに足るものは紫の匂ひ床しき蓮華草である。尾東の農民は、水田の肥料として、春早く蓮華草の種を蒔くので、花盛りの頃、十里の平野は、一大紫野と變じ、中々の美観である。萬松寺内黄花園、門前町花屋敷などの菊人形は、東京の園子坂を真似たもので、人形の顔や姿は如何にも拙いが、電気仕掛や廻し舞臺などの俗受に趣向を凝らすので、女子供の間で大した評判である。近頃花屋敷は、淺草公園に大規模の分園を設け、黄花園は、兩國國技館に大袈裟な菊人形を始めたが、成功不成功は兎に角、中央に乗出した勇氣は嘉すべしである。
 【大須】大須觀音を中心として、有ゆる浮世の、大俗的設備の、犇々と詰め掛けた所、先づ中京の淺草公園と云ふべき所で、唯譯もなく賑やかな所である、何となく浮立つ所である、後に旭廓を控へて居るから、若い者の逆上し易い所である、諸行無常北野山眞福寺の鐘が鳴る所である、黄花園、花屋敷を始め、劇場、寄席、神社佛閣などが、落ち馴れを拾ふべく、手具脛引いて、四邊を取巻いて居る所である、食物、買物、興行物、色陣魔窟、



浮世の物は、何の備はらざるはなき所である。名古屋人にして、此一区域に足を入れぬ無粋もなかるべく、初見參の觀光客にして、此所を訪ねぬ野暮もあるまい。

〔市外の名勝〕山と水との奇勝は、近所では勝川の上流、玉野川、中央線高藏寺驛より一里餘、及び其の上流土岐川の深溪、虎溪山、同上多治見驛より一里餘の邊であるが、もし二三日の餘裕あらば、天下の奇觀たる、木曾の上流を探るに若かない、矢張中央線に依つて、車窓より勝景の一部を眺め、終點三留野驛に下り、河岸に出て、舟を僦ひ、抽堂の下つた所より一里許りの上流から、犬山まで約三里、天然が最も奇技鬼構を凝し

(十七)

た所を下るが好い。そして懸崖三十丈の犬山城下に舟を捨て、犬山城及瑞泉寺の勝景を一



犬山城附近風光

見し、ガタ馬車に投じて、名古屋へ歸る序に、有名な小牧山にも立寄ることが出来る。

次に海岸の勝景としては、智多郡衣ヶ浦に臨める、龜崎、半田などを始め、師崎の海上篠島の好風光あり、是と相對した伊良湖岬は、東海第一の絶勝と激稱する人もある位だ、其他海水浴場として、御油、蒲郡なども名高い。

美濃路に入れば、有名な養老の瀑は、大垣より僅に三里、

東海は愚か天下の名物たる、岐阜長良川の鵜飼は、名古屋より汽車僅に三十分程に過ぎず、山水の美觀に加ふるに、水を焼く篝火の壯觀を以てし、お負けに舟遊の設備が完全して居るので是は觀光客の見逃すべからざるもの一つであらう。



長良川鵜飼



英雄産地として、日本第一の名を獨占する。歴史的名古屋の詳細は、既に第一編に詳述したから、茲には舊蹟の目星きもの文を、極く簡単に挙げる。

【英雄出生地】 出生の順序に依ると、源頼朝は、熱田幡屋の誓願尼寺内に産聲を挙げた。今現に産湯の池もあれば、頼朝の祠堂もある。織田信長は、今の名古屋城の前身たる那古野城に生れた。城地改造の今日、一片の遺蹟も残らぬが、英雄を生んだ土壌は、千年経つても消滅はせぬ。豊太閤及加藤清正の出生地たる中村は、市外僅に二十町、豊公に關するものは誕生地(屋敷跡)、誕生の井、手植の柊、豊國神社等あり。清正に關するものは誕生地、清正寺、及び遺物等あるが、就中豊公の誕生地、及び豊國神社を中心として、中村公園を設け、遺跡の保護と同時に、四圍を瀟洒たる園圃にしたのは、最も適當の施設であらう。唯餘りに小細工過ぎて、毫も感興の起らぬのは遺憾である。

【名高き墳墓】 熱田白鳥町の白鳥御陵は、日本武尊が能褒野にて薨去の後、白鳥と化して飛び給ひ、三ヶ所に止まつた所に、一々御陵を設けた。其三陵の一つだと云ひ、或は單に遺物を葬つて、神靈を慰めたのだとも云ひ、或は全然尊に關係ないとも云ふが、何れにしても、

にして、尊い陵墓に相違なく、陵域一町三反歩、土墳の高さ十間に餘り、林樹翁鬱として晝尙暗く、獨り城内を徘徊すると、何とも云ひ知らぬ感慨の起る所である。其他名高き墳墓を挙げると、織田信秀の墓は、市内萬松寺境内幼稚園裏、平手政秀の墓は市内政秀寺、歸化明人である。祖義直の寵遇を被り、文武の達人であつた陳元寶の墓は、同じく建中寺に在る。市外にて最も古墳の多きは、知多郡野間村野間大坊の邊である。長田忠致に殺された源義朝、鎌田政家を始め、頼朝を助けた池の禪尼、清盛に流された平判官康賴、秀吉に追はれて自刃した織田信孝の墓等、永曆以降の舊蹟墳墓枚舉に違がない。野間大坊は大御堂寺と云つて、



豊公誕生地と豊國神社



正 流 寺

頼朝が父義朝追福の爲め、七堂伽藍を再興し、一時輪奐の美を極めたさうなが、今は僅に一坊を存するのみ、義朝の墓は、大御堂の東田上にあり、老樹鬱々古墓蕭々、風物自ら人を愁しむるものがある。

【昔の名所】 蝕みし名所園繪などを見るとき、昔は市中にも床しい名所があつたが、今は影も形もないものが多い、口繪に現はした昔の堀川、昔の山吹谷などは、封建の世の調子と色彩を偲ぶに餘りあるが、その山吹谷（東片端町坂下）は、人家稠密の市街となり、名も清い紫川は、大下水路と變じ、昔は鶯も來鳴たらうと思はれる鶯谷（洲崎橋東南）も、不潔の土地と化した、唯舊御下屋敷（葵町）の残つた一小部分が、僅かに昔の千分の一を偲

ばしめるに過ぎない。

【城址と役所跡】 那古野の古城址は、舊城二の丸の一部、名古屋高信の城址は、三の丸中小路の西方、古渡城址は今の東本願寺別院、東山村末森にある末森城址は、昔を偲ぶに足るが、織田丹波守の日置城址は、何れの邊か能く分らない、次に舊藩時代の役所跡を擧げると、町奉行所は現今の控訴院構内、寺社奉行所は、七間町一丁目中學校構内、評定所は現今の憲兵隊本部、勘定所は、南外堀町の中學校構内、牢屋は榮町二丁目元警察署跡で、斬罪人の首は此町で曝したものだ。

【三大古戰場】 無論市外であるが、最も歴史的光輝に富み、最も吊古の遺蹟に富むのは、桶狭間、長篠、長湫の三大古戰場である。

【桶狭間】 は名古屋より四里、今川義元戦死の地である、義元が志を天下に抱き、駿遠參四萬の精兵を掲げて、織田氏の尾根に亂入し、大高、沓掛、丸根、鷲津、諸城砦を、一擧に抜いた迄は威勢が好かつたが、眞の兵家てなく、尊大な公卿染みた大將であるから、此小捷に氣満ち志驕り、徒らに兵を進めて、桶狭間の本營を手薄にし、置酒高飲、眼中早や吉法師がなかつた、是は騎兵戦術に長じた織田右府の、初から待設けた所であるから、時分は好しと精兵選つて三千、雨黒く風動きの夜に乘じ、今川の本營に向つて、雨の槍襖よりも繁く殺倒し、義元を初め、油幕の中一人の生者をも剩さなかつた、實に永祿二年五

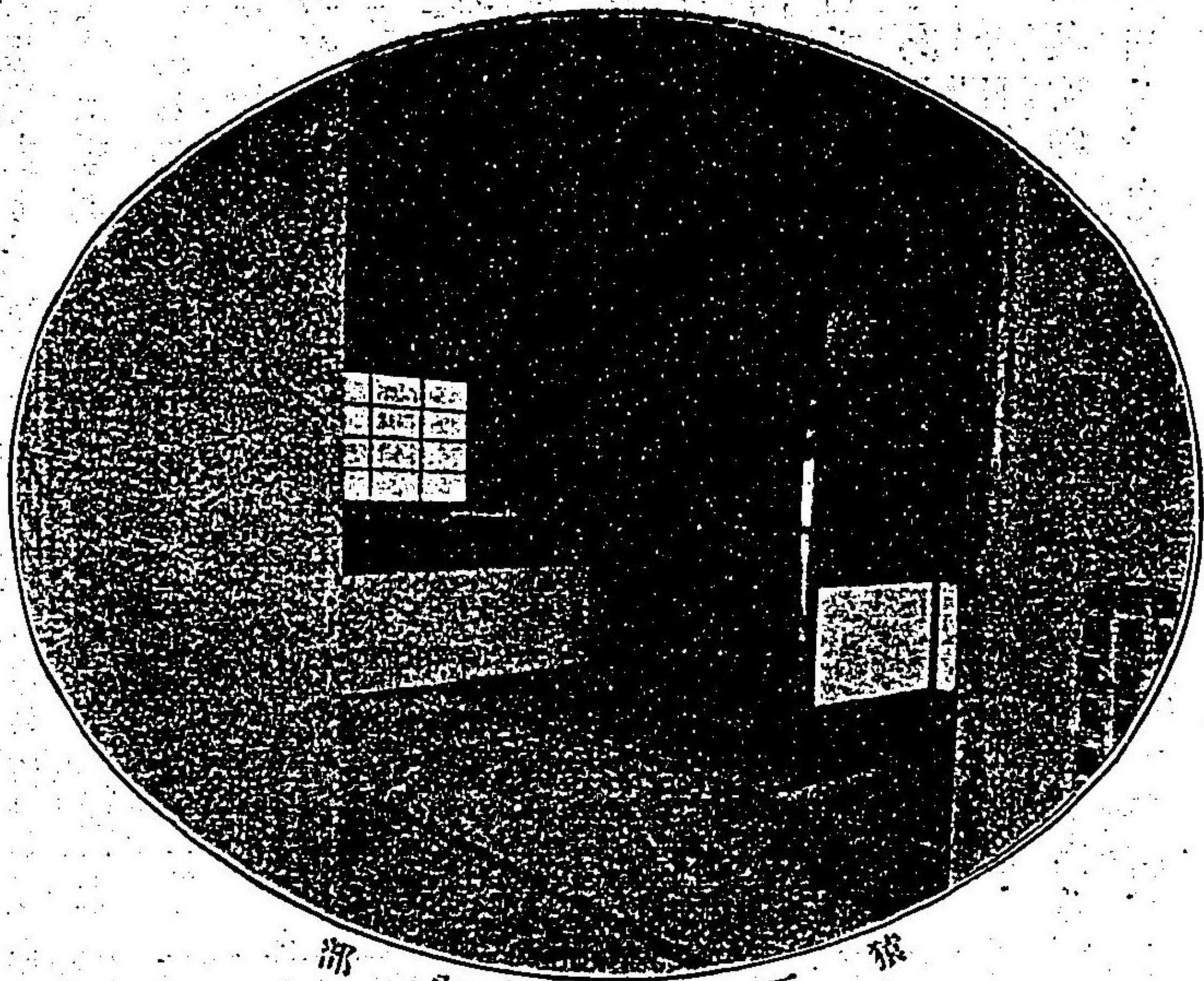
月十九日の事である。今此地に義元の石碑、並に從士の墳墓あり、松籟、古墓、頗る感慨を惹く。深く歴史を調べて、後此地を訪へば、英雄逐波の跡、彷彿として偲ぶに足るものがあらう。

【長條】は南設楽郡長條村、名古屋を去る二十三里、武田勝頼、織田徳川の血戦場である。勝頼勇あつて智足らず、賢臣馬場山縣諸將の諫を斥け、自ら家康を討たんとし、甲兵三萬五千を率ゐて、奥平信昌の長條城を圍んだ。信昌死守して降らざる内、織田信長徳川家康と兵を併せて來り援ひ、兩軍長條城下に、一大惡戰を始めたが、名にし負ふ甲州の猛士も、主將其人を得ぬため、散々に破られ、勝頼も僅に身を以て免れた。此戰は天正三年五月十八日の事であるが、城跡は今尚ほ舊形遺壘を止め、戦没將士の古墓、殘碑は、丘の陰、流の隈に散在して、四顧風物凄寥、坐るに人を愁しめるものがある。殊に此附近里餘の中に、推古以來の靈場たる鳳來寺、並に有名な秋葉半僧坊を始め、名勝舊跡が甚だ多

【長湫戰爭】は、最も大袈裟な、最も多趣味な、戦術家などの溜らなく面白がる。秀吉對家康の小牧戰爭の一部である。實に小牧の一戦は、兩雄が心血を傾け盡した舞臺で、家康の胸中では、此一戦を機會に、遇能くは秀吉の天下取の地位を蹴落すか、左なくとも十分に強味を見せて置けば、他日秀吉を挫く機會なきにしもあらず。殊に弓矢取つては、上

方流の左まで恐しい節もないから、三河武士を甲州流に訓練した。日本一の精銳猛烈な突貫を用ひなば、秀吉の中堅を突崩さんこと案の定となし、寧ろ神速に決戦を望んだが、秀吉の手段は、家康よりも一段高く、備を堅くして戦を避け、先づ緩々東軍に氣脈を通ずる越中の佐々木成政、四國の長曾我部、紀州の根來寺などを平げ、家康を孤立して、チリチリと位詰にし、遂には家康の駿遠參を、一城廓と見做し、周圍に堅牢なる城廓を築いて水も漏れぬやうに包圍し、そして自滅すると云ふ雄大な計畫であつた。秀吉の長所は城攻である。家康の長所は野戰である。もし秀吉が天下の統一を急がず、朝鮮征伐に用ひた力を家康に注ぎ、チリチリと位詰めにしたなら、其結果はどうであつたらう。

長湫戰爭の原因たる、池田信輝の三河亂入策は、必らずしも拙策ではなかつたが、對手は隙のない家康であるから、不成功に終つたので、秀吉も始めは之を許さず、再三強るに依つて之を許し、最も力にした堀秀政を軍監とした。そこで池田方の主腦たる秀次の軍は先づ榊原本多などの徳川方追縱軍に破られたが、徳川方の勝に乗じて、亂れ足に追驅けて來る所を、老功な堀秀政は、遑へ討つて、散々に破つた。併し秀政は勝に乗じて、又亂れ足に乗せられぬやう、直ちに軍を收めた。池田も秀政に習へば、勝敗は五分々々であつたが、惜い哉、秀次の敗報を聞いて、急ぎ引返した池田は、此有様を見て勢に乗じて追驅け、再び家康の大軍に遑へ討たれ、目前の般鑑を繰返して、全軍滅茶々になり、池田信輝、子



猿面茶席内

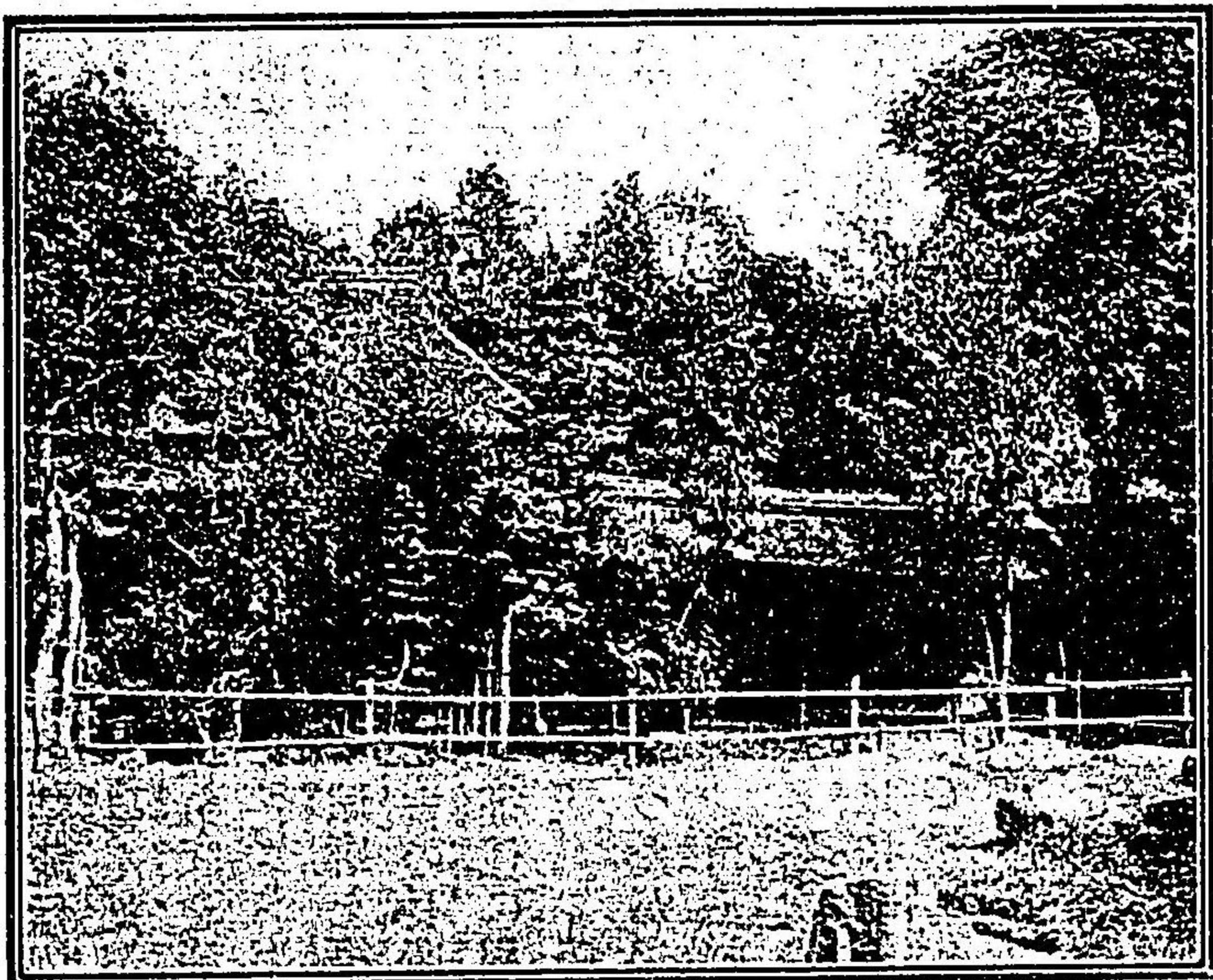
城二の丸の後庭、泉石幽邃の境に設けられ、幕使饗應の宴席に充てられた。有名な猿面茶席は是れで、廢藩後刑部玄氏が拂下を受け、風霜三百年幾部既に腐蝕に屬せるを、慎重の保護を加へて毫も舊觀を失はず、後之を舊博物館に寄附して、一般の觀覽に供した。刑部氏が名席保護の功没すべからずである。

構造は千利休の高弟古田織部正重勝の結構に成り、利休式の素朴高雅なる建築風は、茶道の蕭疎閑淡なる趣を露はして遺憾なく、加ふるに金錢にて購はれぬ年代の寂は、頗る念入に古氣沈着として居るから、氣韻又一段と高く、實に室を開けば餘閑ありの趣がある。本茶室は極りの四疊半、南の入口は板戸二枚に三尺

息之助、森長一(鬼武藏)の三將は、其一生の勇名を長湫の朝露と消して了つた。神速を以て機に乗ずるを十八番とする秀吉は、此報を聞いて電光の如く兵を進めたが、家康もさるもの神速に小幡城に、兵を上げたので、秀吉に乘せられるのを免れた。

長湫は名古屋を距る四里六町、池田父子を始め兩軍諸將の墓碑は、附近里餘の地に散在して居る。兎に角英雄の最も心血を瀝いた古戰場であるから、觀光の客は是非一度訪ねて見るが好からう。

【猿面茶席と清洲城門】 門前町愛知縣商品陳列館の一隅、猿面横町に寄つた所に松月齋と並んで、亭榭石樹古韻掬すべき、蒼蒼の建物がある。其昔し名古屋



猿面茶席と松月齋

の板椽あり、東半月形の襖を開けば爐及水屋附の四疊に入る。天井は竹と蒲筵張、高さ六尺に過ぎず。窓は北西に四箇、草葺屋根が低く垂れて日光を入れない。屋端に突き上げ窓のあるのは、是を引卸して天守閣の金鯨を真向に望む爲であつたと云ふ。床間は一疊幅の奥二尺、床柱は倍偏盤渦せる松の荒削り、丁度床の横木の附く邊に節一つ山形に削られたのが、恰も猿の面を研ぎ出したやう、猿面茶席の名是から起るのである。

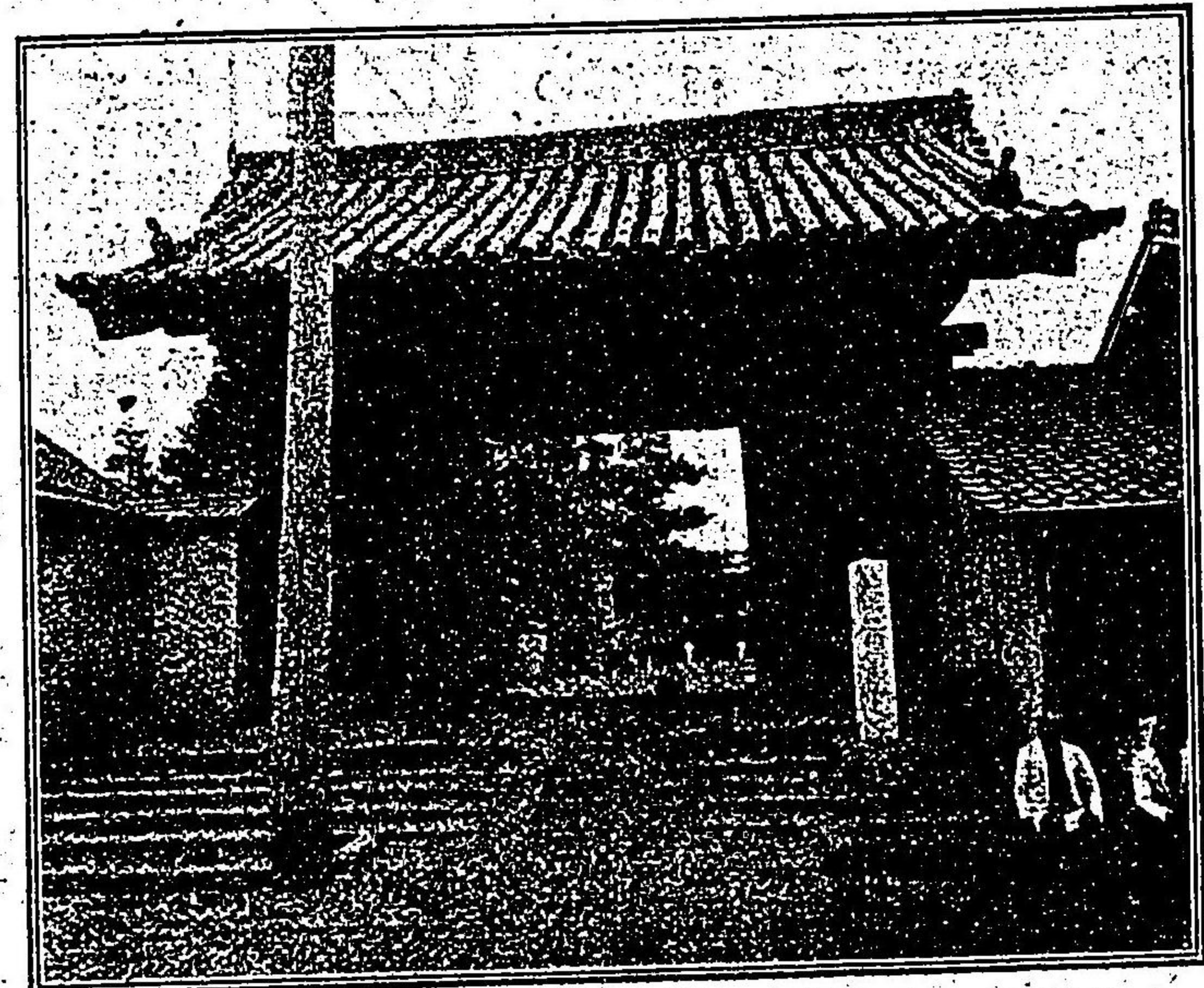
此茶席が果して織田右府の嗜好で古田織部に作らせ、清洲城に在つたもので、豪快な信長が木下藤吉を顧みて、此柱は藤吉の貌其儼ぢやと蕪笑したとすれば、如何にも小説的で面白いが、猿面茶席は名古屋城築造の際、古田織部を京都より呼んで設計した事は紛れもない事實で、此説は茶席の歴史を飾らんとする好事家の空想で拵へたものかも知れぬ、殊に織田信長と利休の高弟としての古田織部とは、全く時代が異ると云ふ事は、一切の疑問を解決して餘りある、併し断つて置くが猿面茶席は信長秀吉に縁故が無いとしても、決して茶席としての價値を失ふものではない、茶席の良否は歴史よりも、寧ろ結構の内容其者である、結構と年代既に天下有數ならば、又天下有數の茶席として誇るに足るのである。

今日天下の双壁として、宮内省の保護を受けて居るのは、泉州堺南秀寺の茶席及び山崎の茶席の二つで、前者は細大昔の儘であるが、後者は手水鉢が變つて居る爲に二流に落ちて居る、之に續くものは筑前博多の茶席であるが、是は破損の多い爲に保護に浴しない。

(三六)

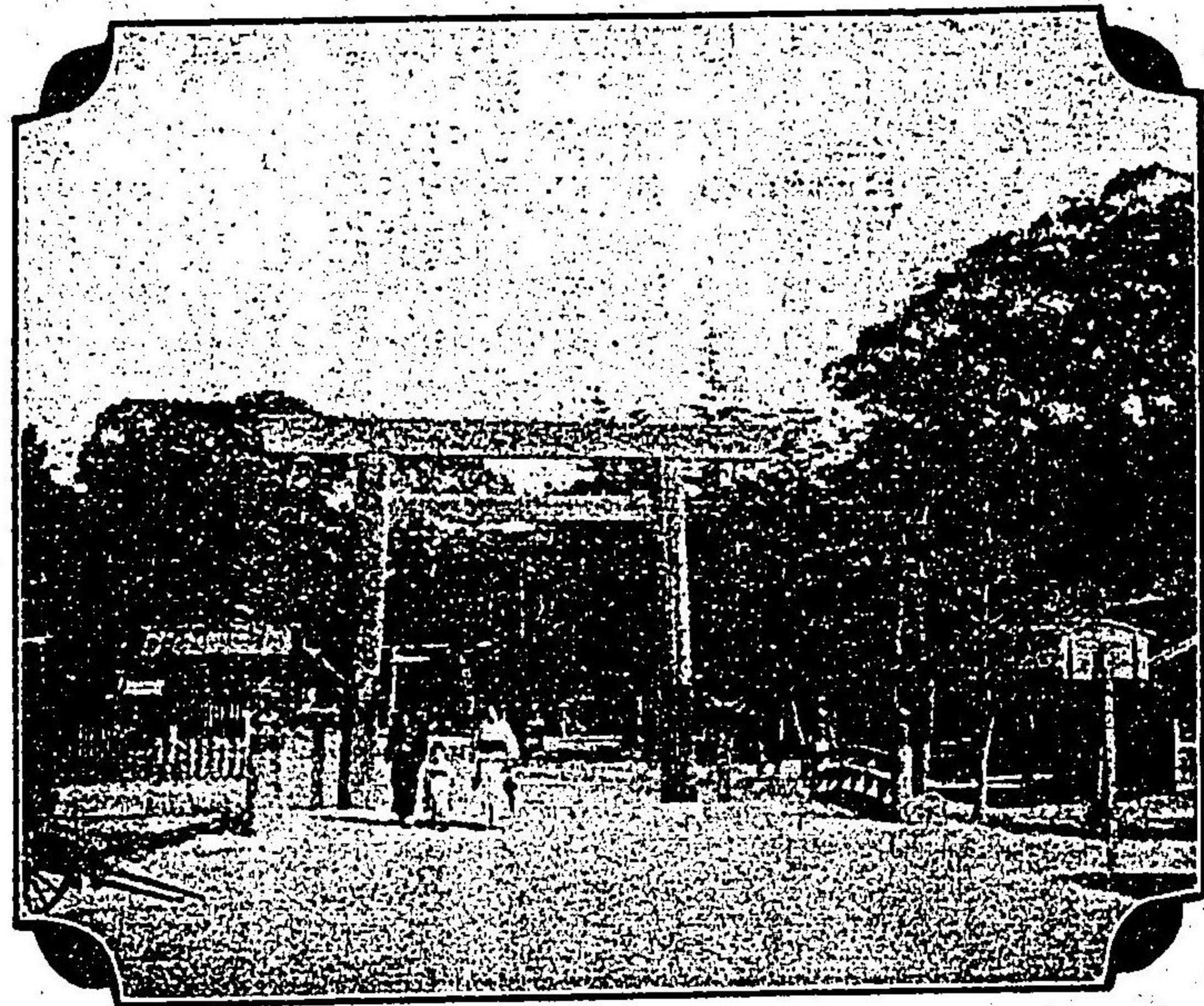
其の古來有名の茶席は、時代の變化と共に一時茶道が廢れた爲に、大抵湮滅或は破損に歸して、完全なものも甚だ少ない、此中に於て内容外形略ぼ完全した猿面茶席の如きは、最も珍重に値するものである。

清洲城門は現に東區高岳町高岳院の寺門となつて居るのが夫れて、一見した所規模左して大ならず、彫刻金具の如き裝飾品もなく、お負けに少しく傾斜して居るので、恰も大きな古道具に對する感が起るが、熱く視ると華麗を避けて實用を專一とし、骨太の堅材を組合した荒削りの頑丈造りて、其上斯波氏築城から約四百年の寂が浸み込んで居るから、一層質樸てそして寒素に見える、信長を始め戦



高岳院の清洲城門

(三七)



熱田大島神社

鎮皇海莊、清雪の四疆門、其他八疆入
 基の鳥居、今残るもの五六基あつて、方
 位を鎮め四境を監し、結構設備の儼然た
 る國家守護の靈廟の名に背かず、神前に
 誓首一拜すれば、自ら神威の人を警しめ
 るものがある、唯遺城千萬なるは、四國は
 器械的文明の勢力に蠶食され、工場煙突
 などが犇々と境籬に詰め掛け、動ともす
 ると神境を俗化する傾向ある點である、
 祭事は年中を通じて五十餘に上るが、就
 中御射の神事(舊正月)五穀祭(舊四月)神輿
 行幸(舊五月)夏越の祓(舊六月)放鳥會(舊八月)
 大祭(舊十一月)等が最も盛んで、何れも起
 古く嚴な古式に遵つて執行される、又神
 境深き所に有名な不實梅を始め、泪川、
 雲見山、玉の井の里などの詩歌的古蹟あ

國中葉の質朴な武人が、數年間此門を出入し、或は遠征に或は守備に、此門を大手の鐵壁
 と頼んだ清洲時代の昔を思ふと、云ふべからざる史的且つ詩的の感想が湧いて来る、先づ
 市中の一番年代を経たものは、此清洲城門と性高院の長松位のものである。



市内に官幣大社一、縣社三、郷社
 六、村社五十四、無格社五十五、
 合計百十九社。

【官幣大社熱田皇太神宮】伊勢宗廟に亞ぐの官幣大社、尾張上古史の最も韻致に富める
 頁を作つた日本武尊の御靈代として、叢雲一名草薙の神劍を齋祀する神宮で、神宮草創者は
 尊の深く龍幸を給はつた宮簀媛及び其父建稻種命、年代は景行天皇の御宇である(古史第一編上)
 即ち三種の神器中御鏡は伊勢大廟に奉置されて、天照大御神の眞の御靈代となり、御劍は
 熱田神宮に齋祭られて、日本武尊の御靈代となつたので、神位の尊く社格の高きは勿論で
 ある、斯く上代は一座に在したが、其後日本武尊を中殿として、東殿に宮簀媛命、建稻種
 命、西殿に天照大神、素戔嗚尊の五座を合せ祭り、神劍は渡用殿に奉置される事になつた
 境内は舊熱田の杜の丘岡に據り規模頗る濶大、千年の老樹鬱乎として社頭を掩ひ、拜殿、
 祭文殿、渡殿、廻廊、神樂殿を始め、四十有餘の攝社末社、神籬の外に簀牙を聯ね、春鼓、



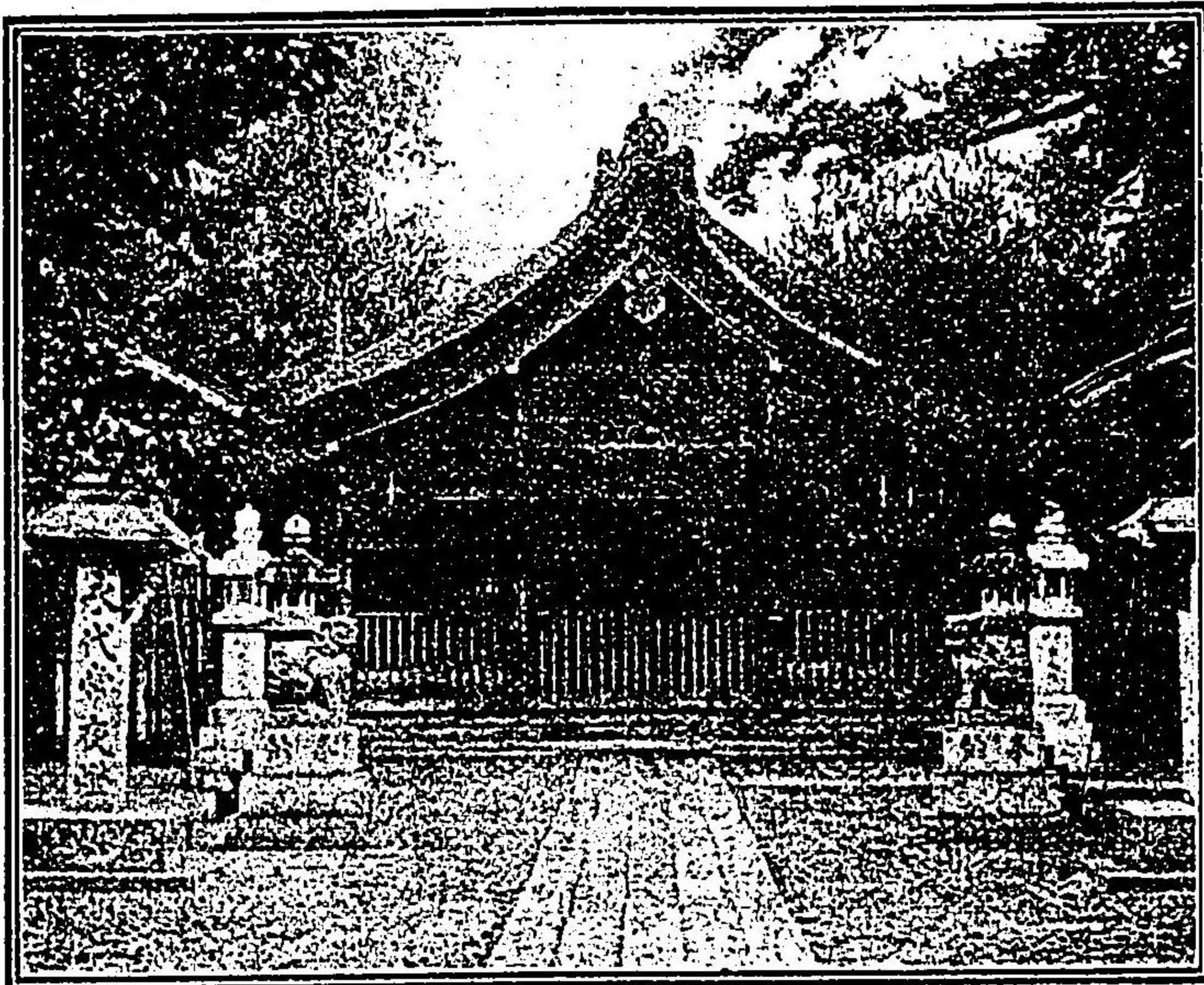
宮 幡 八 宮 若

の古い神社である。祭神は以前は牛頭天
 王を祀つたが、藩祖義直公再建の時に、
 梁牌を素盞鳥尊神社と書かれたので、牛頭
 天王は素盞鳥尊となつた。徳川家康の竹
 千代時代、人質として今川家に赴く途中
 織田信秀の幕下たる田原の戸田弾正に奪
 はれ、終に織田氏の爲に此天王坊に押籠
 られ、三年の間艱難した歴史もあるの
 織田徳川二氏に取つて因縁淺からざる神
 社である。祭禮は陰曆七月十五十六の兩
 日。

【縣社若宮八幡宮】 鎮座は文武天皇の
 御宇、名古屋第一の古い神社として、舊
 那古屋莊内の鎮守として、格式は昔から
 天王社の上であつた。祭神は現今中央は
 仁徳天皇、左は應神天皇、右は武内宿禰

り、梅や菖蒲杜若の神苑も又一見の價値
 がある。神の御庫の奥深く秘された寶物
 には、歴史家古物研究家をして、垂涎三
 千丈たらしむるものが多いさうだ。

【縣社那古野神社】 俗に龜尾天王社と
 云ひ、最古那古野草創の神社であるから
 近年那古野神社と改稱され縣社に列せら
 れた。當社は元名古屋城三の丸にあり、
 築城の際他へ遷さんとの議もあつたが、
 神慮に依つて、お城の鎮守市民の氏神と
 して其儘存置されたのを、明治十一年現
 今の上長者町に遷したので、當社縁起に
 醍醐天皇の延喜十一年勅に依つて、此地
 に祭つたとあるのは、十二坊を創建した
 年月を指すので、神社創建はずつと遠い
 昔に在り、熱田神宮を除くと、名古屋第二



社 神 野 古 那

(辛)

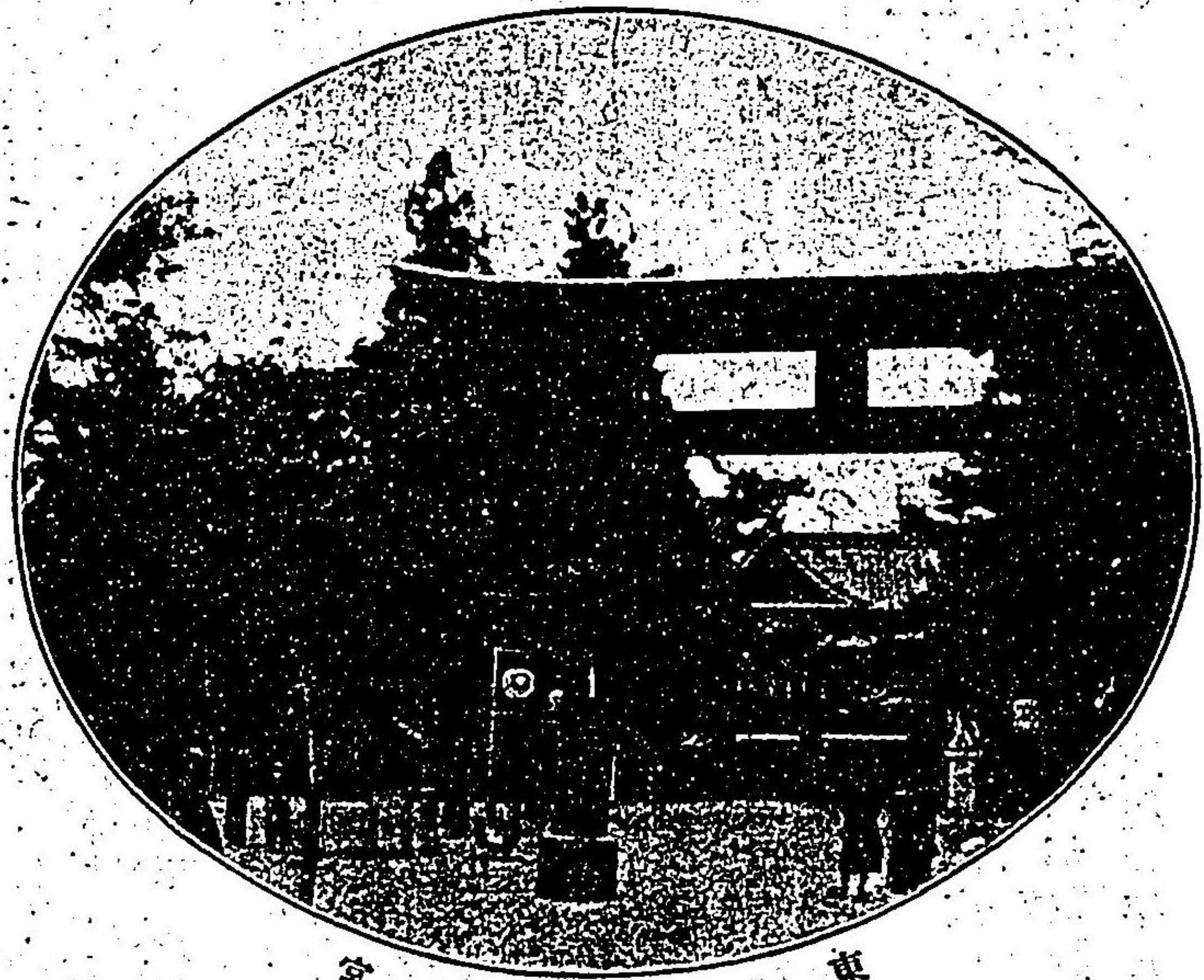
(辛)

の三座であるが、昔は熱田神宮の攝社で、祭神は日本武尊の曾孫即ち孫若御子を祀り、其俗稱彦若宮の名が、若宮の起源でないかと云ふ説がある。そして延喜年中醍醐天皇再建の節、十二字の僧坊堂宇を建添へ、佛家の掌る宮としたので、一に安養寺と云ひ、或は宮寺と云ひ、又一一般に若宮と稱された。八幡宮となつたのは餘り古い事ではない。併し此若宮の社は、一厘錢の表に鑄られた寛永年中、藩主の參詣あつてから、他社に異る氏神と深く徳川家に歸依され、代々の藩主姫君迄も社參ありて幣帛を獻じなどした。末廣町の現社地は、慶長十五年築城の際遷座され、堂宇樹木何れも三百年以上のもので、境内又頗る廣く商賈般販の巷に於ける唯一の公園と云つて好い。祭事は舊六月五日六日の兩日、六日は神輿行列美々しく、那古野神社へ渡御するが、山車の中に末廣町の黒船山車は古來有名なるもので、今は昔ほどの騒ぎはないが、山車の結構裝飾の善美は云ふも愚か。今日を晴れと着飾つた可愛らしい兒女が化粧網に取付き、鳴物囃子の調子に連れて、静々と練り行く有様は、丁度京人形の五月雛が、錦繪の館船を牽くやう、名所圖繪などに見る、名古屋歳事記の極彩色な部分は、今は僅に此黒船山車が昔の俤を傳へる許り、大に珍重すべきものである。益々此優美なる古風を保存するに勉めよ。末廣町の諸君。

【縣社東照宮】 藩祖義直公が天海大僧正と議し、日光鎮坐の儀式に準じて創建したもので、中央に徳川家康、左右に日吉大神、日光權現を安置し、後義直慶勝の二卿を合祀せる

徳川家の宗廟、結構輪奐は何れの東照宮にも見る如き丹碧彫金の日光式である。以前は舊城三の丸(司令部)に在つたが、維新後今の長島町一丁目(倫堂跡)に移された。祭事は陰曆四月に行はれ、所謂名古屋祭と稱して、舊藩時代は百萬石の威勢を現實に證據立てた、壯觀無比の祭典であつたが、斯う時代が變つては、祭事に預る町々へ配布された二百石の祭禮料も絶え、呼物であつた九輛の山車も、毎年引き出されぬと云ふ風で、昔の如き盛觀はないが、十七日若宮八幡宮へ神輿渡御の行列は、幾等か舊時を思ふに足る。

【日置神社】 中區橋町にあり應神天皇を祭る。延喜式神名帳には從一位日置天神とあり、鎮座の年月詳でないが、



東照宮

上世應神天皇の裔孫日置朝臣の末裔が、舊日置村に住み其祖神を祭つたものらしく、元龜天正時代には靈驗の著なる神社で、織田信長桶狭間出陣の朝、當社に祈願を掛けられた所、靈鳩の瑞祥が現はれ、果して奇捷を得たので、其御禮として千本松を植えた(殆ど残らず)と云ふ、歴史のある宮である。

【大曾根八幡社】大曾根坂上にあり譽田天皇に天照大御神を併せ祀る、元祿八年瑞龍院君が、社殿の荒廢を歎いて造營したので、神體の御管は東京の穴八幡の御管に均しく公の直封して奉祀したものに係る、此社往古は熱田の社家大原某が、代々奉祀して來た大社の由て、地理も片山と云ふ形勢があり、附近田地の字に神田太鼓田など神社に縁ある名もあり、又社地から古代の土器なども掘出した事もあるさうで、普通の小社にはあらず、何か縁ありげの古社である。

【櫻天満宮】西區菅原町、織田信秀の創建歸依した神社、京都北野梅松院の靈寶たる道眞公東帶の像を迎へて安置したもので、昔境内に櫻の大樹があつたから櫻天神と呼ばれた、例祭は舊二月二十五日、古例に依つて兒童の清書が澤山に上る。

【朝日神社】廣小路通榮町の最も繁華な所に位置し、目抜の場所の割に頗る廣い境内を占め、石の鳥居やら樹木やら、紅塵の巷に、珍らしく落附た神垣の構、是等が單調な市街に、或色彩を點綴するものと云つて好い、元は春日井郡朝日に在つて、鎮座の年月詳

てないが、此所へ遷座したのが慶長十六年、祭神は天照大御神と天兒屋根命、祭禮は九月十五六の兩日である。

【團森八幡宮】創建は鎮西八郎源為朝であるが、永正年中鶴見道親以下數人の修築に係るもので、祭神は應神天皇神功皇后並に創建者の爲朝をも合祀し、俗に爲朝社と云ふ社地は古渡橋より一町許の正木町、老樹陰森、晝尙暗き闇の森の小丘で、名古屋市内にお化の出さうな森と云へば、是より外にない。

【淺間社】巾下淺間町、祭神は應永五年富士山淺間社の御璽を勸請したもので、舊社地なる富士塚町は遷府以前は前山と呼び、社地二町四方又は四町四方とも傳へられて居る大社で、今の駿河町杉の町などの町名は、皆此神社から起つたのだが、築城の際社地は普請小屋場に充つる爲め、暫時此地へ遷座したのが其儘になつたのである。

【八劍神社】本社は延喜式内の古社で、熱田神宮の別宮である、鎮座は和銅元年元明天皇の勅命に依り、新造の寶劍を納め祀つて八劍宮と稱したので、慶長四年徳川家康が大修造を加へたこともあるが、今の神殿は明治二十六年熱田神宮と同時の造營で頗る宏壯である。

【高座結御子神社】鎮座は上世で年月詳かでないが、日本武尊の御子仲哀天皇を祀り、熱田神宮に亞ぐの大社で俗に高藏宮と云ふ、電鐵熱田線高藏停留場前の隣着たる社が靈社

の在る所で、境内老樹陰森、満目、悉く神寂た光景、坐るに人を警しめるものがある。古歌に有名な夜寒の里の遺跡は此社の南に當るさうだ。

【日割御子神社】日本武尊の五男武敏王を祀り、熱田七社の一である。神社は神宮の南八剱宮の東方に在り、日割は干崎の意で、今の曾夫久死町の東南は、往古は凡て入江の氷際であつたことが分る。

【上知我麻神社】尾張氏の始祖尾張國造小止與命を祀る。命は天火明命の御子天香命山命十一世の孫に當り、日本武尊の寵幸した宮寶媛の父君で、神社創建は殆んど熱田神宮と同じ年代で、昔は星崎に在つたが、後の世に今の熱田市場町に移したのである。

【南新宮社】南神宮天王社と云ひ、熱田神宮清雪門の前面に在りて、素盞鳥尊を祀る。祭典は舊六月五日、當日市街を曳き廻る大山車は、壯麗宏大を以て昔から有名のものである。

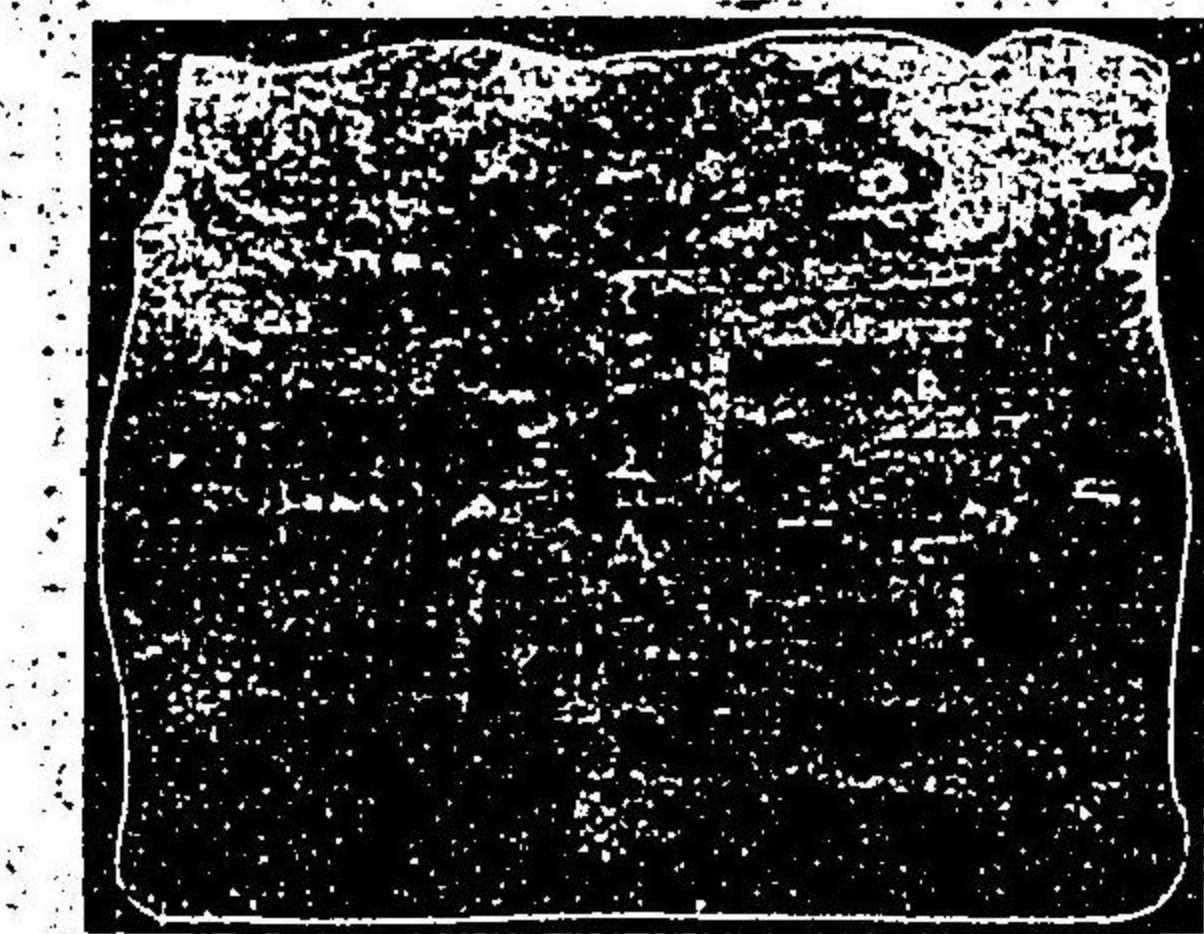
【白鳥社】熱田白鳥町白鳥山法持寺境内に在り、日本武尊の神靈を祭る。其後の老樹鬱蒼たる社は、所謂白鳥の御陵である。

【氷上姉子神社】市外大高村に在り、日本武尊が「年魚市瀉氷上姉子は吾來ひとことさるらむやあはれ姉子」との戀歌を詠じた、所謂氷上姉子の宮寶媛を、其舊館の地に祀つたもので、創建は仲哀天皇の四年である。

【物部神社】俗に石神堂とも云ひ、車道の東四五町市外千種町の區域に在り、祭神は宇麻志麻手命で、年代は詳かでないが、延喜式の古社であるから、少くとも一千年以前の創建に係るもので、一時荒廢に歸したものを元祿年間時の藩主が再建したが、近年此神社は大に流行の結果、又凡てが新しくなつた。本社殿傍の石は、地中に深く根を植えた一大巨石の、僅に頭部を露出したものだと云ふ口碑があるので、本尊の神よりは、此石に對する信心は大したもので、どうやら迷信の匂がするやうになつた。

【津島神社】

市外約六里



津島神社

津島町に在り、熱田神宮に次ぐの大社で、素盞鳥尊、大穴牟遲命を合祀し、津島牛頭天王と云ふ、縁起は欽明天皇元年神明の託宣に依り、西海對島から遷座したもので、歴代皇室の歸依を始め、織田豊臣及び累代徳川家の深く崇敬した靈社、今日俗間の信仰厚き點は寧ろ熱田神宮を凌ぐとす。勢である、殿堂樓門は總て朱丹塗の頗る善美な結構で、神宮式の神々しい趣は少ないが、境内甚だ潤く老樹霧を吹いて又多少神靈の氣に富んで居る。大祭は舊曆六月十四十五の兩日、天王川に行ふ所の船祭で、古來提燈祭と云つて廣く世に知られたものである。十四日の宵祭は黄昏から五艘の祭船を浮べ、

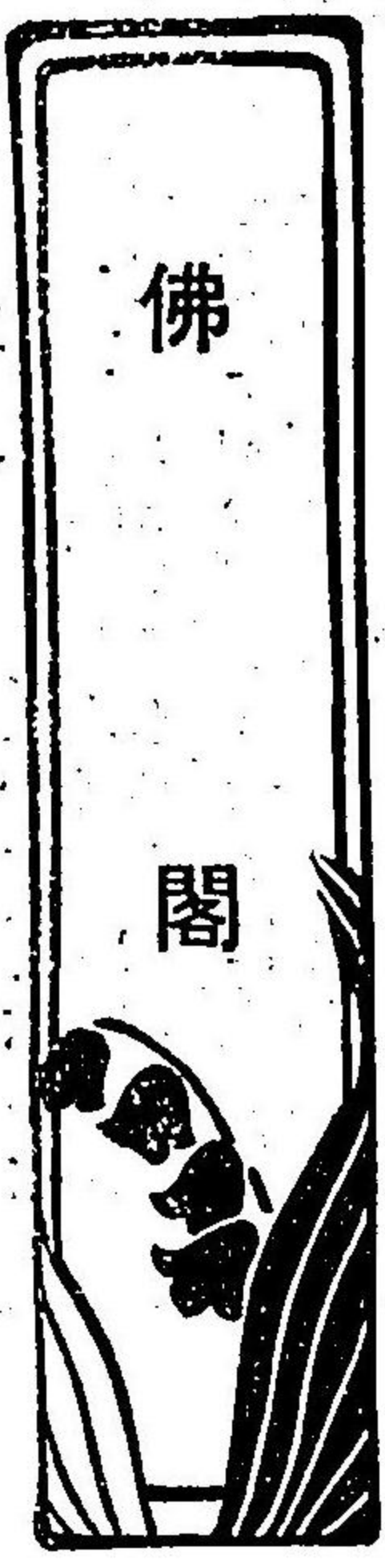
一年日數三百六十張の提灯を點し、津島笛の奏樂に連れ、徐に河流を上下するので、波を焼く提灯の美觀を見べく、群集は河畔に夜を徹すると云ふ騒ぎ、翌十五日の朝祭は、樓閣を拵へた五艘の祭船と、山車を乗せた十二艘の船とて、是亦中々の美觀である、名古屋から此地を訪ふには、關西鐵道彌富驛から尾西鐵道に乘替るのが最も便利で、春は序に天王河畔の櫻狩が出来る。

【眞清田神社】市外五里半の一ノ宮町に在る國幣小社で、國幣立尊、天照大御神外二柱を合祀し、社殿其他の結構凡ならず、社地は一萬五千坪に近く、老松古杉深く閉じて境内頗る幽邃、貫之手植の櫻、延曆三本松を始め、所藏の神寶も亦少くはない、舊三月三日の大祭は桃花祭と云つて古風の祭車を飾り、舊九月十五日の祭禮には他に餘り類のなき流鏑馬を行ふ。

【大國靈神社】市外四里の國府村に在る縣社で、又國府宮と云ふ、創建は寶龜二年、祭神は大國靈、神外五座で、神寶も多く境内も廣濶であるが、當社の最も有名なのは舊正月十三日に行ふ難追の神事である、難追とは難を追拂ふの意味で、行路の人を捕へ、夫れに一國の災厄を負はせて追つ拂ふと云ふ亂暴な譯であるが、是は昔國分寺で行つた吉祥悔過の祭事と云ふもので、八釜しい種々の儀式あり、昔は禰宜權宜何れも白刃を振り廻して行人を追捲つたさうだが、當節柄そんな眞似も出来ないから、今は村の若者數百人が、唯

(三六)

素裸て其型を演ずるに過ぎないが、兎に角御祭騒ぎ中の珍妙至極なもので、又其名の裸祭も随分振つたものではないか。



天台宗五、眞言宗三十一、淨土宗九十八、臨濟宗二十六、曹洞宗八十二、眞言宗六十六、日蓮宗四十七、黄檗宗二、合計三百五十六ヶ寺

【大須觀音眞福寺】俗に大須觀音と云つて寺號を稱へる人は稀なが、北野山寶生院眞福寺は眞の寺號である、當寺は伊勢洞宮の子能信上人の開基に係る眞言宗寺院で、南北朝時代には南朝の勅願寺であつたから、正平五年後村上天皇御祈願の繪旨、並に東南院二品親王の令旨を藏し、尙ほ第三世の住職二品任瑜法親王は、土御門宮と申して後村上天皇の皇子であつた等、極め七由緒の正しい古刹で、本寺の支配を受けざる獨立の寺院として、空海筆の三經を始め、殆んど國寶に準すべき神書佛書、而も稀世の古寫本六七百卷を藏する寺院として、中京第一の名刹である、本尊は文和元年勅命に依つて、攝津天王寺の正觀音の靈像を移したもので、弘法大師の作たと云ふ、本寺は元美濃大須莊にあつたが、同地は屢洪水の難がある爲に、慶長十七年徳川家康が當地に移轉を命じたので、本堂、仁王門、五重塔など随分壯麗を極めたが、二十五年の火災に烏有に歸し、再建したのは本堂仁



寺中 建宗土淨

僧坊を再興し、又大藏經五千卷を寫經させ、輪藏を建て、納め置いたが、光嚴帝の建武年中の兵火に寺塔經藏も、半ば焼失した。後天正年間豊臣氏の命に依つて清洲に移したのを、慶長十六年府城造營と同時に、清洲より今の門前町に移したのだ。堂宇中八年の歲月を要した三層塔は、最も見事の建築で、寺寶は佛工春日作の獅子頭角面、及び安長の納めた大藏經の殘本等である。

【建中寺】東區筒井町の雄大で而も幽邃なる大寺院で、慶安四年二代光友卿が藩祖源敬公追福の爲に創立した。淨土派の獨立寺院である。本堂は火災後の再建に係り、山門に比べて少々不釣合であるが、境内規模頗る雄大で、一面に林樹翁

(四一)

王門の二つ丈である。

【七ツ寺長福寺】稻園山正覺院と云ひ眞言宗京都智積院の末寺で、天平七年行基菩薩の開基に係る。昔は中島郡萱津の里に在り、往昔河内權守紀是廣が、秋田城介に任ぜられて赴任中、都に残した一子光應僅七歳にて、父を慕ひ出羽に下らんとて此里に至り、病を得て終に死んだ所へ、恰も父是廣任滿ちて歸國の途次此里に、愛兒の死に遇ひ、悲嘆遣る方なく、七歳の兒の冥福の爲め、延暦六年七字の佛閣と十二の僧坊を建立したのが、七ツ寺の縁起である。其後水災に遭ひ、又兵火の爲に灰燼となつたのを、六條帝の御宇に尾張權守大中臣朝臣安長が、其愛嬢の死を嘆いて、七區の伽藍、十二の



寺福長寺七宗言眞

(四二)



寺源德派濟臨

【德源寺】京都妙心寺末、臨濟禪派の巨利で、寺號を蓬萊山と云ひ、元は織田信雄の創建に係る。新出來町南側、寺域廣潤、閑靜幽雅の淨地で、輒近頌徳の僧相踵て來住し、四方の雲衲續々參禪に來たので、蓬萊山の名頗る揚つた。名古屋

本尊の地藏菩薩は空海の作と云ひ、俗に阿原村の米搗地藏と云つたもので、左したる由緒のある寺ではないが、本堂兩袖の羅漢堂には、丈六の拈華釋迦牟尼佛、文珠普賢の菩薩と、五百羅漢の木像とを安置され、羅漢の中には等身の大さの像もあり、又名匠の作に成つたものもある。彫刻美術に興味を持つた者や、一般の賽者も亦頗る多く、場末乍ら中々の繁昌である。

鬱たる様は、闇の森も三舍を避くる位、殊に位置が零落した舊士族町の端に在るので、大須の如く有象無象の靈場を汚さないのは、何奇の幸、背面の森を爲して居る所は、實に森閑として一鳥鳴かぬ趣がある。境内奥深い處に、徳川家歴代の廟所あり、住僧は代々紫衣着用、勅許の繪旨を頂戴して、昔は大に威張つたものだが、今は當世風の坊さん見え、本堂よりも庫裡を光らかすに力を注ぐのは、甚だ不心得である。此寺の東北は廢園廢寺頗る多く、蟲の息なる舊名古屋を見るには、屈竟の所である。

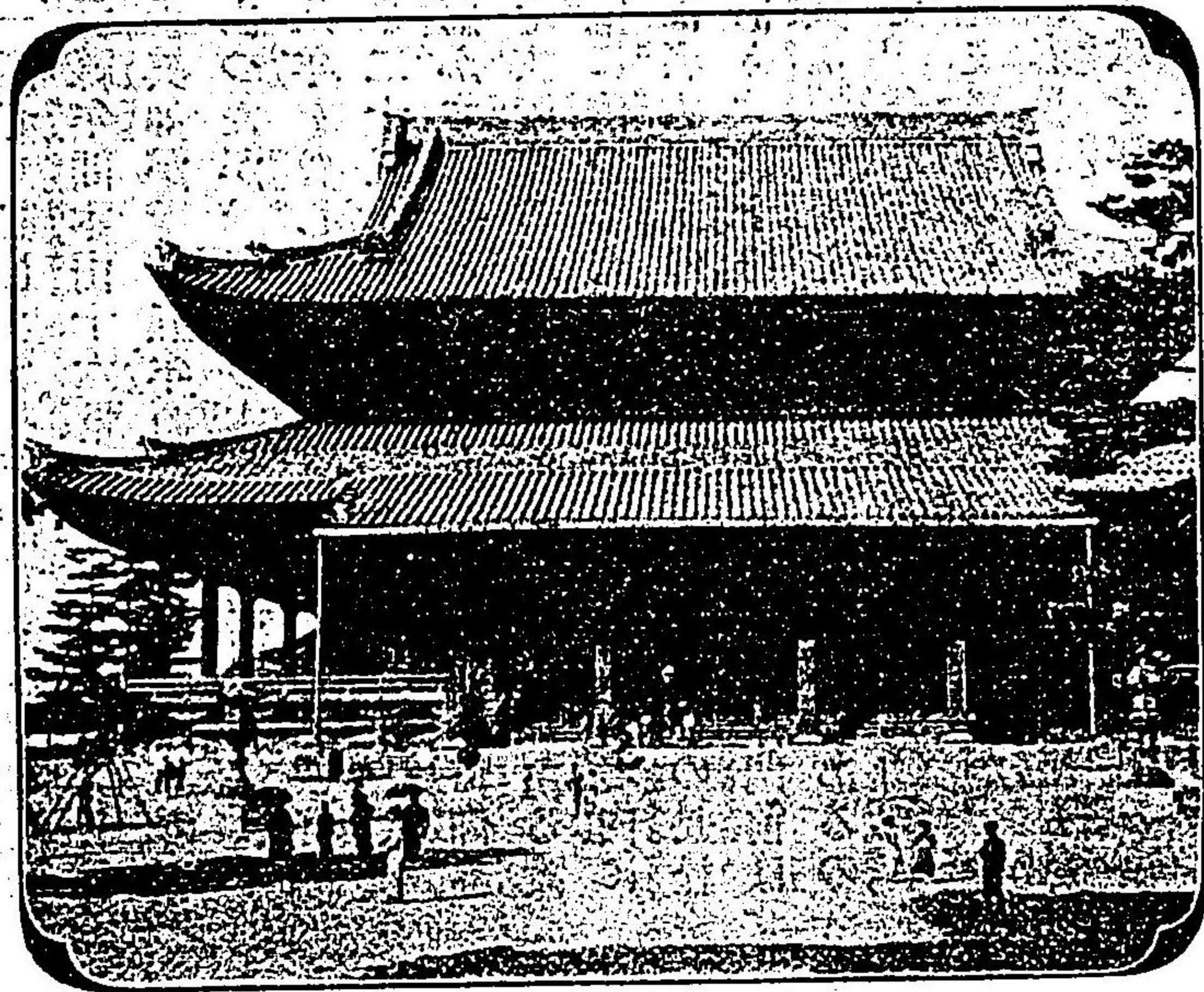
【五百羅漢】福壽山大龍寺と云ひ、新出來町は建中寺の裏手に當る、宗派は宇治の黄檗宗萬福寺末で、享保十年の建立、



寺龍大漢羅百五派樂黃

(四三)

(四一)



院別寺願本派谷大宗真

さうな、三代の住持関山和尚は、義直公の寵遇を受けた有名な詩僧。

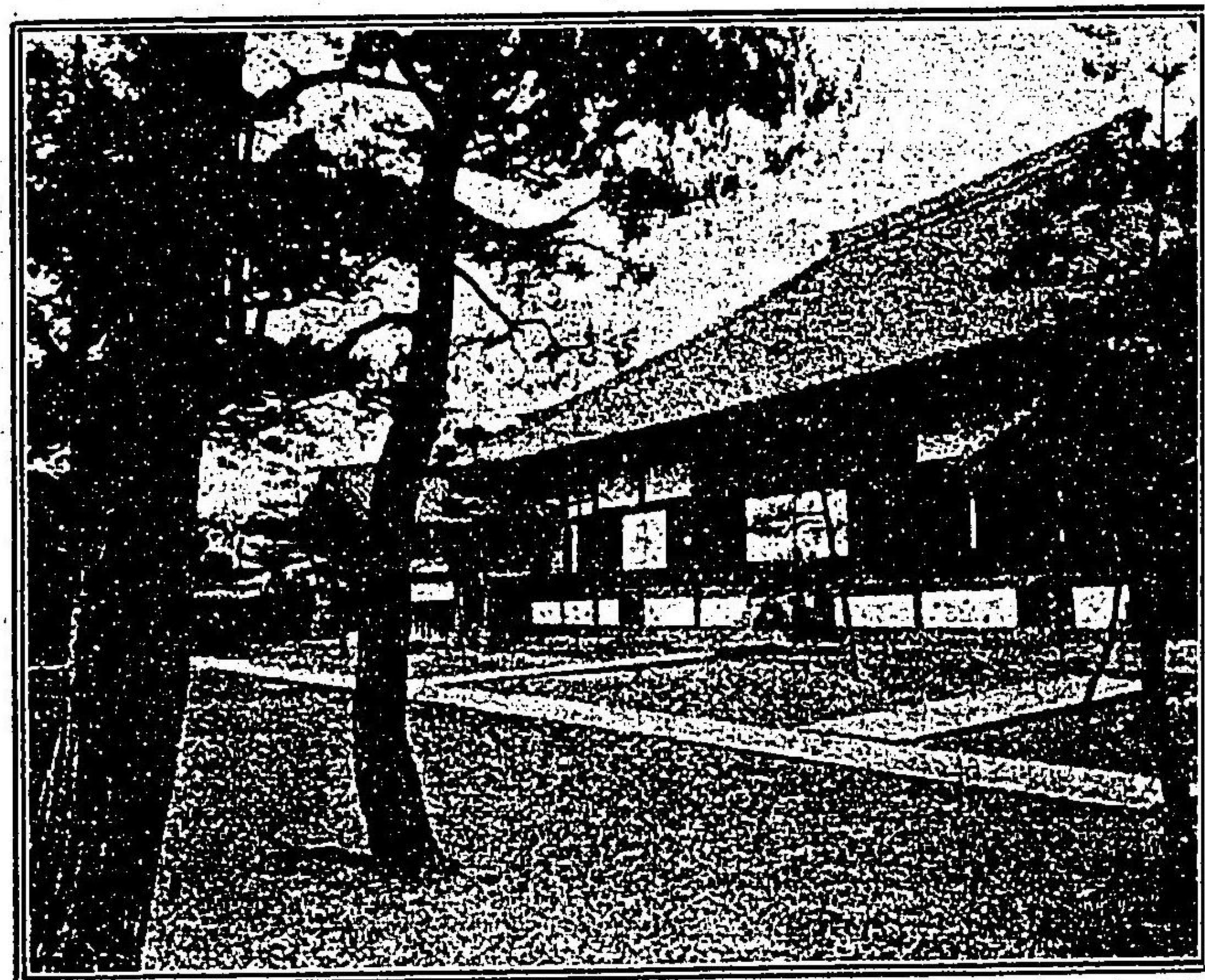
【白林寺】 政秀寺の北に本寺も矢張同
一である。藩祖義直公の創建に係り、明
曆火災後、附家老成瀬隼人正(三萬五千石)
が、父の追福の爲に再建したので、成瀬
家代々の墓がある。

【大谷派本願寺別院】 中區下茶屋町に
在り、真宗東派に屬し、尾濃其他の末寺
を支配する本坊で、寺務を司とる役僧が
輪番に來るので、俗に東掛所と云ふ。境
内は織田信秀の古渡城跡で、現に園内
に天守の跡がある。一萬有餘坪の敷地を
圍むに、巖丈な高壁を廻らした所は、嚴
然たる城廓の觀があつて、驚破と云は
法衣の下に鎧を着けて、佛法擁護の門徒

に於て眞面目に參禪でもする所は、此寺
位のものであらう。後藤登衛の名古屋時
代は、未明に落花を踏んで、此寺に參禪
したと云ふ。

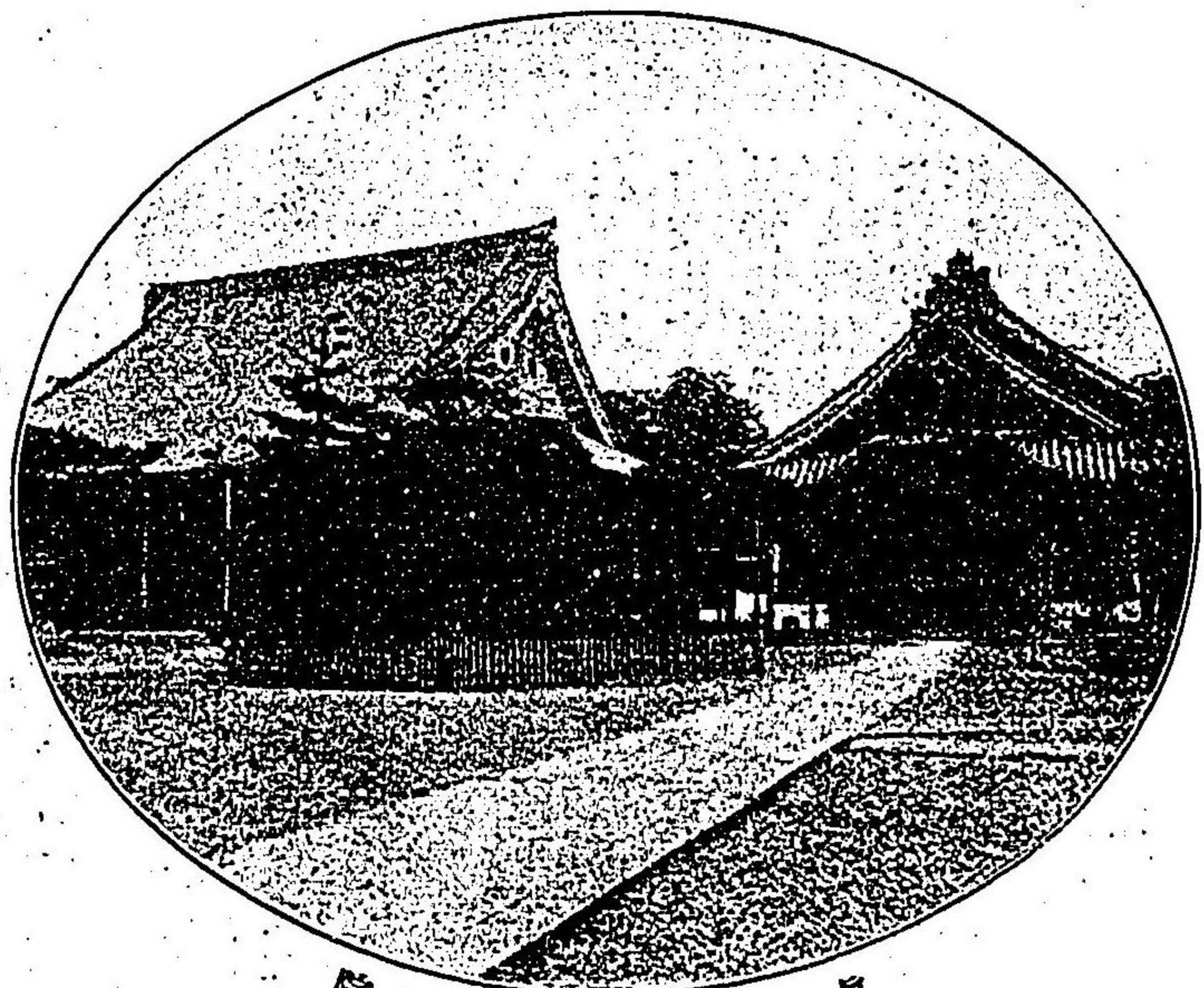
【政秀寺】 死を以て信長を諫めた平手
政秀の追福の爲め、右府の創建に係り、
政秀の墓及び藩公の姫君の墓もある。本
尊は十一面觀音で、臨濟宗妙心寺の末寺、
中區矢場町。

【總見寺】 裏門前町。本尊は藥師如來
本寺は矢張妙心寺、織田信雄が信長の菩
提の爲に清洲に建立したので移したので
今は區域も狭いが、昔は博物館布地の大
部分を包擁し、林樹幽靜の淨境であつた。
梵鐘は元熱田神宮寺にあり、山中に隠れ
て百八十餘歳を保つた異人の鑄たものさ



寺秀政派濟臨

一揆でも起さうな面構である。本坊は元祿年間本山十六世一如上人及び十七世眞如が、十五年の造營に成つたものであつたが、現今の本堂は、文化年代に十年を費して、修築再建したもので、高さ二十五間の雄大なる伽藍は、一見人を驚かすに足る。實に東別院が中京信仰界を支配する所以のものは、此堂々たる設備に依つて充分想像に餘りある。境内には名古屋式の特徴を發揮せる數株の長松あり、數十株の彼岸櫻あり、又東門前は共進會場を直下に中々の眺めがある。絶える事のない繁華の道場であるが、殊に春秋二季の彼岸會には、阿彌陀様も鼻の穴を塵埃で埋めるやうな雑沓である。



院別寺願本派本宗真

(四六)

(四七)

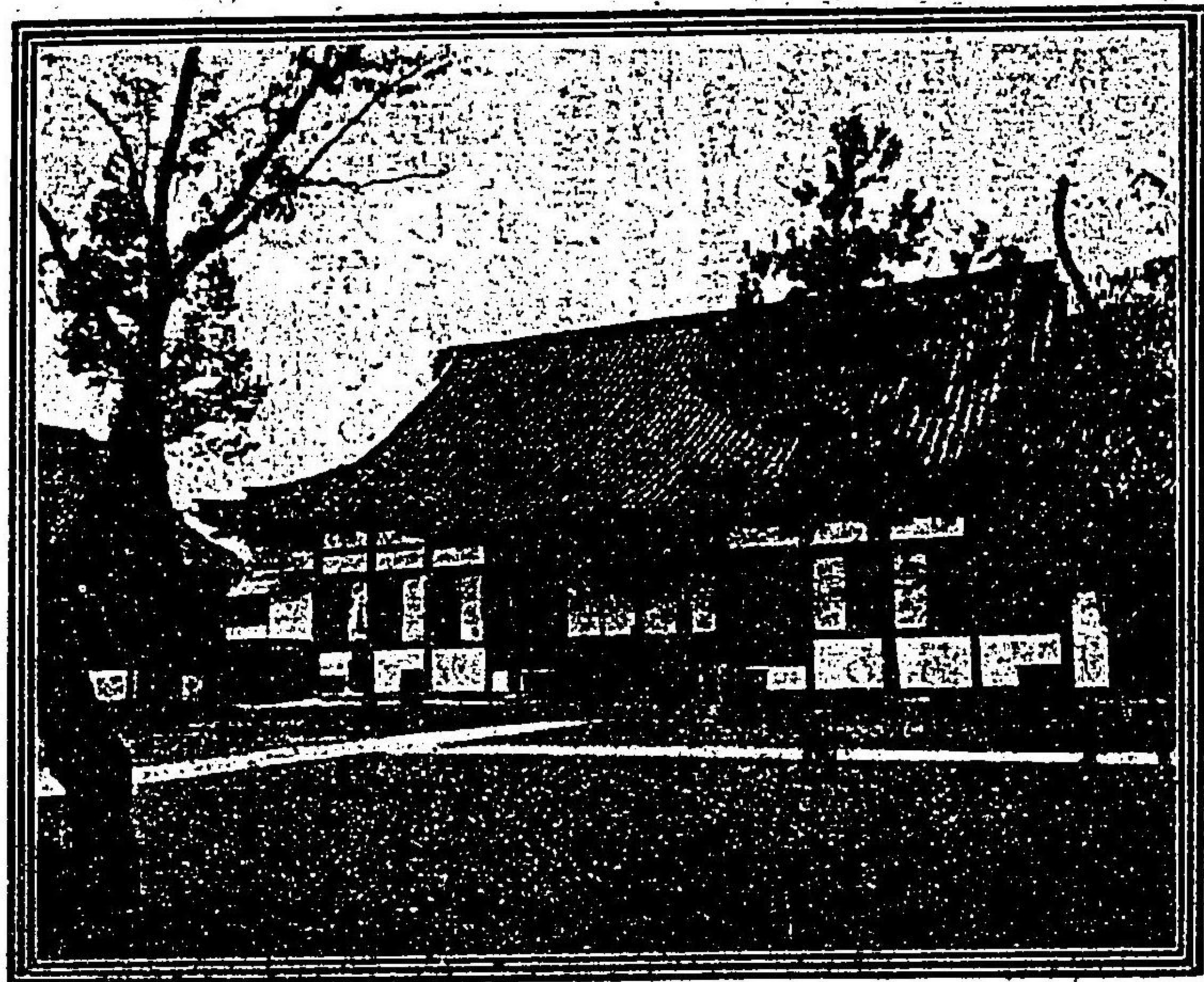
【本派本願寺別院】 中區門前町、眞宗西派尾濃勢三國の小本山で、東掛所に對して西掛所と云ふ。前身は願證寺と云つて、伊勢長島門徒の乞に依り、蓮如上人が長島の中杉江村に創建したのであつたが、元龜の頃から長島門徒は信長の命に従はず、終に門徒一揆を起して、却つて信長の銃鋒に黨類残らず亡され、寺も全く潰れて了つたが、後顯如上人が信雄に願ひ、清洲に再興したので、慶長遷府の際、今の地に移し、享保中本坊となつてから、佛殿堂宇日に増し立派になつたので、規模の雄大、勢力の隆盛は、到底東掛所に對抗が出来ないが、又市内屈指の大寺院たるを失はない。

【聖徳寺】 東區富澤町、東本願寺直末の院家で、開山閑善法師は、新羅三郎義光の後裔小笠原長顯と云ふ武人であつたが、親鸞上人の教導に依つて佛門に入り、上人から龍樹菩薩の眼睛とか、天親菩薩の舍利とか、曇鸞大師の遺骨とか、一風變つた七種の靈寶を授與されて、當寺を建立したので、其縁起から七寶山と稱する古刹である。

【養念寺】 東區飯田町、僧賢哲慶長九年の建立で、寺格前に同じ、近代の住職靈曜は頗る博學有徳の名が高かつた、後園の鳥が池と云ふは、林泉の結構と蓮花が名高く、池の風景及び詩歌は、名所圖繪にも出て居るが、今尙ほ昔を偲せる俤を残して居る。寺寶又多し。

【相應寺】

東區山口町、淨土宗智恩院の末寺、藩祖義直公が母堂相應院殿退福の爲め建



曹洞派大光院

つて居るやうな始末である。
【大光院】 門前町、曹洞派武藏忍の清善寺末で、徳川家康忠吉の深く歸依した明嶺和尚が開山して、道徳堅固て眠る事を好まず、晝夜を分たず端坐して道を修すると云ふ偉い和尚であつた。本尊は釋尊の木像で、寺寶は忠吉の寄附した、兆殿司、牧溪、周徳筆の諸佛畫である。境内には諸々の不淨を清潔にするに云ふ穢跡金剛經の烏慧沙摩明王堂がある。殊に婦人病に靈驗あると云ふので毎月二十八日の縁日には婦人の參詣者が多い。
【福生院】 西區袋町、眞言宗の寺院で、寺は格別の由緒もないが、別殿に安置する御聖觀喜天は、靈驗が顯著だと云ふので、參詣者引も切らず、未明から深更迄

立したので、後遺骸と共に駿河に在つた靈廟をも此所に移し、今現に昔の儘である。
【性高院】 門前町、寺格前に同じく、徳川忠吉其母君の爲に建立したもので、舊藩時代朝鮮の來聘使の旅館として名あり、境内の雄松は中京に於ける樹木の霸王である。尙ほ寺寶には中將姫筆、稱讚淨土經一卷と云ふ奇抜な物も在る。
【高岳院】 東區高岳町、寺格前に同じく、家康の子仙千代を葬る、惣門は有名な清洲城門で、以前は境内は頗る廣かつたが、住職其人を得ず、衰運に傾いて居る。
【阿彌陀寺】 門前町、本寺前に同じく、信長其主君斯波義統を此寺に葬る、此寺の涅槃像は畫幅でなくて、一丈餘の釋尊を初め阿羅漢以下の人畜、皆木像とは、随分振つたものだ。
【榮國寺】 中區東橋町、淨土宗禪林寺末、境内は昔刑場で、切支丹千餘人を誅した所。
【萬松寺】 裏門前町、曹洞宗總持寺末で、天文九年織田信秀の創建に係り、公の遺骸を葬る、又義直公の籠中高源院の墓もある。境内の白雪稻荷は粹界の人に信心家多く、此出店の方が繁昌する代りに、本店は痛く寂れ、お釋迦様は庫裡と本堂の幾部を、區役所に賃貸して、隅の方に小さくなつて居る有様。昔し加藤清正の宿陣として、諸大名に鼻を明かした像は兎の毛程もなく、美しい兒小姓の踊つた舞臺の邊は、今は黃花園の人形舞臺と變

線香が煙る。

【長久寺】 東區長久寺町の眞言寺、徳川忠吉清洲在城の時、鬼門の鎮護として建立したのを遷したもので、境内も相應に廣く、現今高野山出張所があるので参詣者が多い。

【神宮寺】 熱田神宮の南一町、仁明天皇の勅願を承はつて、最澄法師が開基したもの、始は天台宗であつたが、後類廢して無住寺となつたのを、長久寺住職隆慶が幕府に願つて再建してから、眞言宗となつた。本尊は弘法大師眞作の薬師如来を腹中に收めた、二丈一尺八寸の薬師如来坐像で、俗に大薬師と云ふ。

【全隆寺】 熱田幡屋町、曹洞派永平寺の末寺で、永平寺二十世智光禪師の開基に係り、其隱居所であつた、又境内は池の禪尼の子平大納言頼盛の屋敷跡、即ち池殿屋敷跡である。

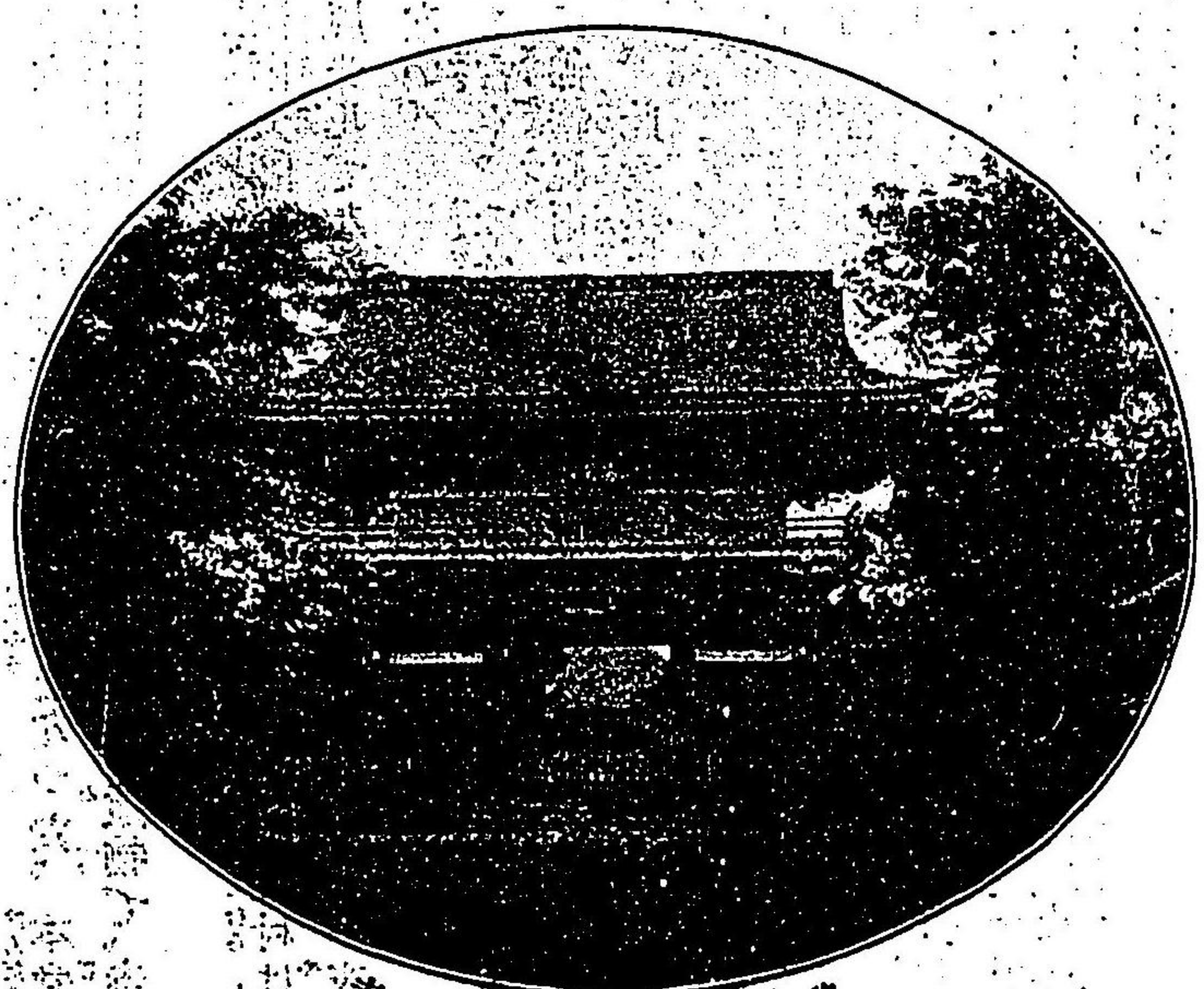
【白鳥山法持寺】 熱田白鳥町、昔し弘法大師此地に來り、熱田神宮に百日參籠して、行法を修められたが、其暇々に地藏菩薩を刻んで、此寺の本尊としたと云ふから、曹洞宗の日本に廣まらぬ先に、熱田にあつた曹洞寺院である、境内は白鳥御陵の崗續き、緜然たる石垣を積み、殿堂中々立派である。

【正覺寺】 熱田傳馬町、淨土宗京都禪林寺光明寺の兩末で、永享六年融傳和尚の創建に係り、後花園天皇の勅願所である、寺寶はもと殊に多かつたが、累年の火災で十ヶ一より残らないが、而も其數は随分多く、後花園帝の繪旨並に宸筆、後陽成帝の宸筆等ある

【甚目寺】 尾張四觀音の一で、市外海東郡甚目村に在り、本尊は閻浮檀金の聖觀音菩薩で、甚目龍鷹と呼ぶ漁師が網て海中から引上げたのを、自己の姓を其儘甚目寺と呼び、推古天皇六年二字を建立

【甚目寺】 尾張四觀音の一で、市外海東郡甚目村に在り、本尊は閻浮檀金の聖觀音菩薩で、甚目龍鷹と呼ぶ漁師が網て海中から引上げたのを、自己の姓を其儘甚目寺と呼び、推古天皇六年二字を建立

其中に最も珍らしきは、日蓮宗僧徒連署状、家康公御朱印、及び宗論記などで、是等は當寺十三世の澤道和尚が、武藏常樂院の日經和尚と、淨土日蓮二宗の優劣を云ひ募り、終に慶長十三年家康公御前にて、諸侯方列坐の上に、双方宗論を闘はし、日經論に負けて其意状を差出した書狀並に記録で、其時法に任せて剝ぎ取つた、日經の袈裟衣をも、今に所藏して居るとは、實に痛快な紀念物ではないか。



甚目寺 甚目村 甚目寺

したので、後天智天皇の御宇に勅願寺となり、堂塔伽藍完備の靈場となつた。本堂は明治初年の火災後昔の俵はないが、現在の仁王門は建久年間の再建七百年前の遺物で、寺寶も珍寶が多いと云う。

【龍泉寺】尾張四觀音の一で、傳教弘法兩大師の開基に係り、東春日井郡志談村は庄内川の清流に臨み、斷崖百尺の上にて風光凡てない、又境内は長湫戦争の時、一夜豊公の陣營を張つた所で、當年の遺蹟が少くない。

【笠覆寺】尾張四觀音の一で、縁起最も古く、本尊は天平五年禪光上人の作になる十一面觀音の像で、昔一時堂宇荒廢して、終に佛體風雨に曝された時、此邊の貧女之を憐み、殊勝にも己の笠を脱いて其頂を覆ふたが、此女後に太政大臣基經の三男兼平に寵され、兼平に乞ふて堂宇を再建したので、俗に笠寺と云ふ、熱田から一里餘の笠寺村。

【圓龍院】尾張四觀音の一で、市外荒子村に在るから荒子觀音寺と云ふ、天平元年泰澄和尚の開基に係る、年中賽者多く、殊に初觀音日の如きは中々の雑沓である。

【明眼院】延暦二十一年の創建で、開山は聖圓上人と云ふ、本尊の藥師如來は行基菩薩の刻んだもの、中興の開山清眼僧都は眼疾の妙藥を發見し、着々雲上人の眼疾を平癒させたので後水尾上皇から明眼院の寺號を給はり、次で勅願寺となつた、寺寶は中々珍品が多く、悪七兵衛景清の鎧、運慶作の仁王等がある、海東郡大治村。

【豐川陀枳尼天】有名なる三州豐川の豐川稻荷で、故有栖川宮之に豐川閣の名を賜ふ、寺號は圓福山妙嚴寺と云ひ、十一面觀世音を本尊とし、末寺五十餘を有する曹洞の巨刹である、陀枳尼天祠は縁起頗る古く、康元年中寒嚴禪師支那から歸航の途上、白狐に跨れる陀枳尼天の尊影を拜し、自ら其像を刻み、護法神として崇め祀つたに、靈驗最も顯著であつたので、織田、豊臣、徳川、今川諸將の深い歸依を受けた、現今は商業繁昌の守護神として、遠近よりの參詣者群を爲し、昔に數倍する繁華の道場となつた、境内の殿堂は、本堂、開山堂、陀枳尼天本殿、奥の院、萬燈堂、籠堂等枚擧に遑ないが、建築何れも宏壯善美を極め、金碧燦爛光彩陸離の形容詞が、懸値なしに使つても好い位、豊川鐵道の如きは、専ら稻荷參詣者の爲に布設されたものと云つても過言である。

二 娛樂

遊藝の盛んな都として、美人の産地として、有ゆる娛樂的設備の略ぼ完備した中京、懐中に金あり、一番持て見やうとするには、屈竟の齣散場である。假初にも一都府と云ふ以上は、多數の旅客を吞吐する停車場と云ふ大きな口を開き、此口から胃囊に流れ込んで来る總ての旅客を、皆面白く遊ばせる代りには、又面白く金を使はせ、財布の空々になる迄は、いつかな返さぬが常、早い話は旅客は都府に營養分を供給する衛生的食物、都府は旅客を食ひ食ふ魔王様で、旅館、料理店、待合遊廊乃至劇場寄席などは、容赦なく諸君の懐から、血液や脂肪を徴収する赤鬼青鬼共だ、つまり諸君が停車場に着いたのは食はれに來たので、一步中京の土を踏み初めるのは、魔王の舌に乗つた

(五五)

も同然、諸君が名古屋料理は凝つて居るなど、舌鼓打つ代りに、魔王は諸君の懐中土産に頬ペタを叩くのである。

だから中京滞在の日數も經つて入らつしやい、有難うの送迎を受ける度毎、懐中の減ること夥しく、まだ中京趣味の表皮も探らぬ中、早や若干の土産と、空々の財布を抱へて、歸國の汽車を待合はす停車場の客となるのが紋切形であるが、斯う絞り方の旨いのが、繁榮なる都府の都府たる所以で、毫も悔しがるにも、忌々しがるにも及ばない、若も金も使はずに逃げ歸る野暮天があつたなら、其人は此案内の書くを憚かつた、あら面白の中京趣味の匂も嗅がずに歸るお百姓に相違あるまい。

旅 館

すなら、高等旅館へ乗込んで、有ん限りの贅を極めたいが人情、よしや普通の宿屋で辛抱するとしても、室が穢なく、取扱の疎末な所は、誰しも嫌ふ道理、同じ錢を拂ふ位なら

長く滞在するなら猶更のこと、たとへ三日四日なりとも、旅館は一時の家庭である、旅の耻は掻き捨ては今の世に流行らず、經濟が許

體裁の好い、小奇麗な所へ泊るのが旅の一得。つまりは外構許りて無く、旅屋の内幕を能く香込んで、居心地の好い所に泊り込んだ人こそ、幸福と云ふものである。



名古屋

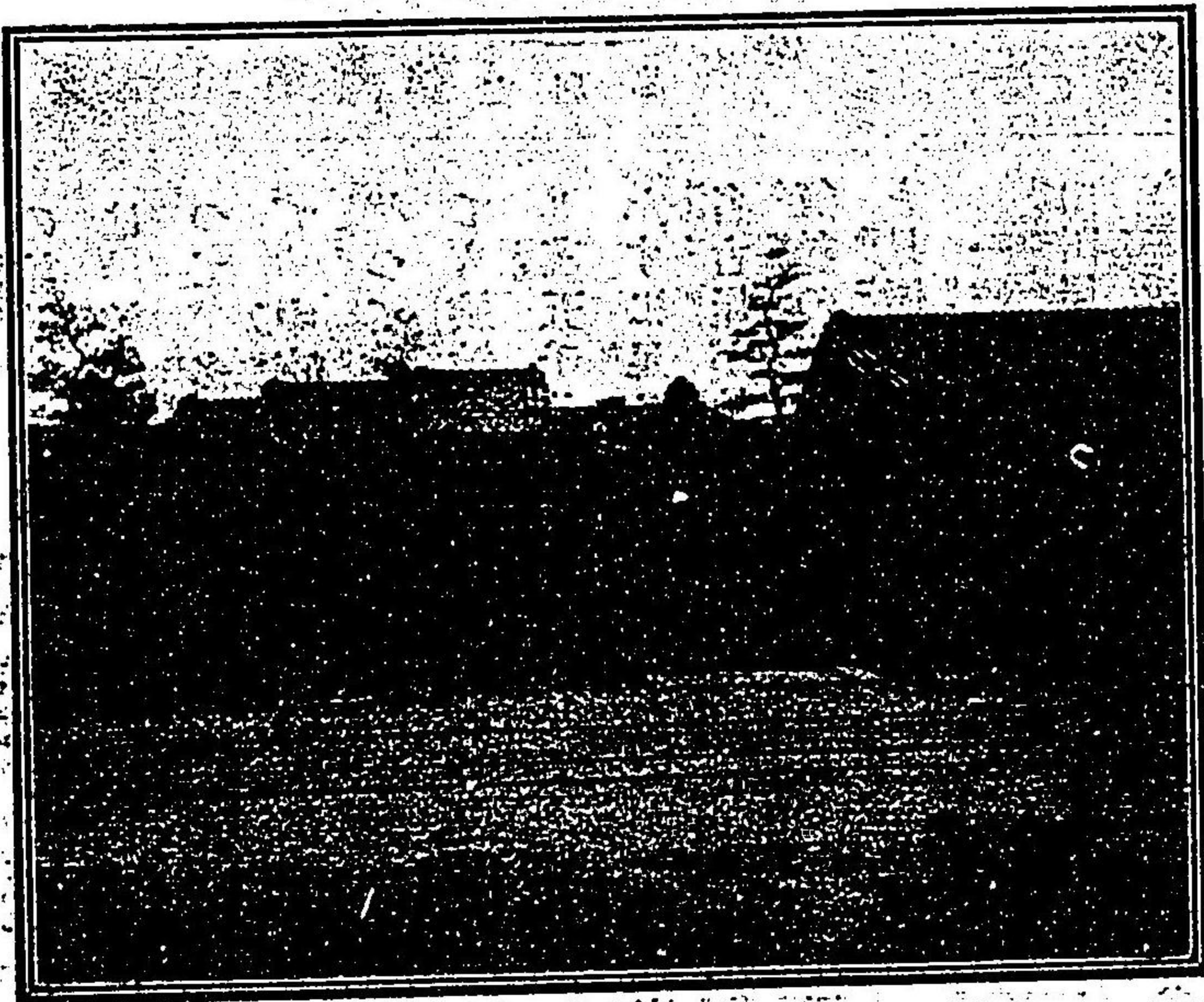
又其々に幾割かの關稅を取られるものと覺悟しなければならぬ。細かい物は格別、高價な

茶代と云ふ理窟の分らぬものにて、客の男振が上つたり下つたりするのは、日本獨特の悪い習慣であるが、既に茶代をやるものと覺悟した以上は、少々割能く先に與へるのが、初泊の宿屋で持てる法である。買物は宿屋に頼むのが便利であるが、便利の在る所

(五六)

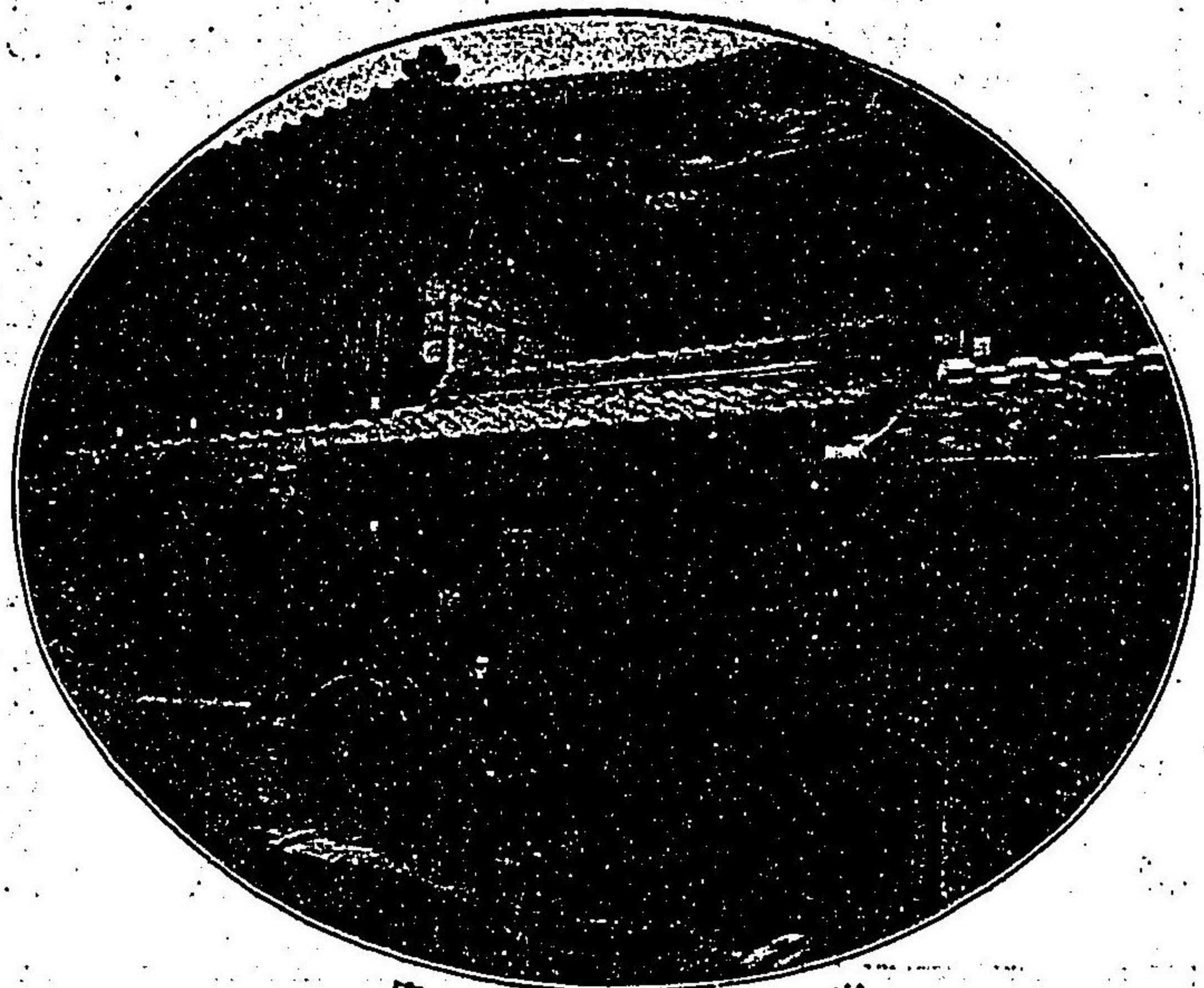
ものは有名の老舗を尋ねて、直接に買ふに若くはない。

中京の旅館は、建築概して立派である。表向は左程でないが、中へ這入ると贅澤な檜材を使つて、間取に床に欄間に随分凝つた建築が多く、大小に拘はらず、大抵寂の附いた庭園の一つ位はあると云ふ風、東京邊の旅館の鼻が問へるに比へて、幾等か餘裕のあるのが取柄、名古屋料理の御馳走、名古屋式の濃厚な取扱、旅の疲れを寛ぎの満更悪い氣持もしまい。中京は比較上最も旅館の多い所である。二百萬の東京が、旅館千五百軒足らずであるのに、四十萬の中京は、八百十三軒



旅館千秋樓

(五七)



旅館支那本店

の旅館がある。尤も東京に旅館の少いのは、旅館兼帯の下宿が、二千軒以上もあつて、多數の經濟的旅客を吸集するから、中京は是等の輕便旅館が少いから、従つて旅館の多い譯であるが、それにしても旅館八百餘軒、一年間宿泊人百四十九萬五千八百人(四十年)とは、聊か人を驚かすに足るの數字ではないか、是れ實に名古屋が地勢上將た産業上、最近勃興の氣勢の躍々たることを語る、有力な證明と見做して宜しからう。

一流旅館は千秋樓、支那忠本店、丸文、山田屋其他の五六軒、三流の上と云ふべき電話架設の旅館は約五十軒、其外の大

(五八)

多數は普通或は下等の旅館である。重に外人相手の西洋旅館は、名古屋ホテル唯一軒、以前は兎に角近來は大分設備も整つて來たさうで、等級は上拾五圓、中拾圓、並五圓の三種である。又日本旅館の宿泊料を擧げると、概ね左の標準で、上等は割合に高いが、中等下等は勉強主義安値主義の極めて割安である。

(五九)

宿料	上	中	並	晝食
旅上等	五圓	參圓	貳圓	壹圓
旅中等	壹圓	七拾錢	五拾錢	參拾錢
旅下等	五拾錢	四拾錢	參拾錢	拾五錢

大體此見當であつても、場所の便否、客室寢具の良否、取扱の如何等に依つて、自然に一二割高にもなれば、又廉くもなるので一概とは云はれなす。

【旅館所在地】

電話架設の旅館のみを擧ぐ

名古屋ホテル	堅三藏町	井筒屋	傳馬町	豊瀧	四柳町
千秋樓	榮町	井澤屋	富澤町	大橋屋	榮町
支那忠本店	富澤町	長谷川屋	八百屋町	若六	下長者町
丸文	上圓町	本牧	新柳町	鶴鳴	門前町
山田屋	榮町	とや	住吉町	河正	小田原町

銘大多立丸中倉桑丸丸

波花に名

宗松長屋藤林屋屋伊

住吉町 富澤町 榮町 七間町 新柳町 東魚町 新柳町 富澤町 征島町 住吉町 七間町

丸松松萬小東新三

仙葉宗茂西屋屋藤 清駒支店 清駒支店 清駒支店

浦燒町 門前町 榮町 本町 玉屋町 同町 富澤町 富澤町 伏見町 南長島町 停車場前

桔梗の喜支那志井八京岡

喜支那志井八京岡 支那支店 志摩屋 井筒樓 八木館 京屋 岡田

富澤町 富澤町 停車場前 新柳町 玉屋町 富澤町 富澤町 熱田神戶 同 上



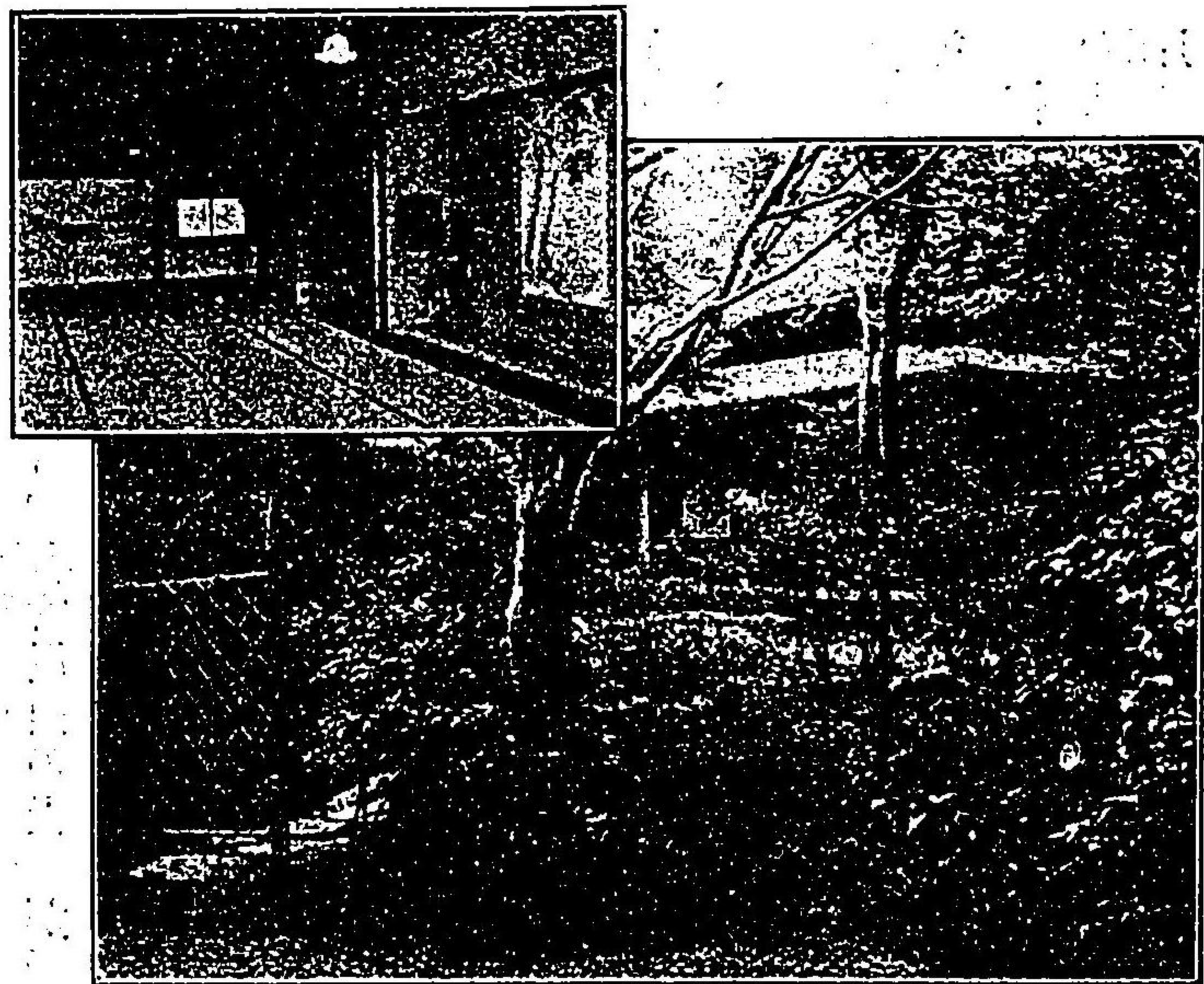
妙があるのは名古屋料理、ち疎未な舌、詰込主義の胃囊でも、名古屋料理は、中々凝つて

生粹の江戸板前とは、全く庖丁加減を異にし、京阪式に似て、而も全然上方料理とも附かず、一風變つた調理鹽梅、一種獨特な割烹の

居る哩と思はしめる。名古屋出の大又が、江戸の真中、而も食物の本場筋なる兩國薬研堀に看板を擧げ、生粹の名古屋料理で賣り出し、食ひ倒れの、贅澤な口、鋭敏な舌、細かく味ひを噛み別る所謂食味通の間に、大分評判の好いのは、之れ聽て名古屋料理の眞價の萬事を説明するものである。

名古屋料理は、植半の蜆汁と芋飯とか、尾張屋の『あなごの味噌漬』とか、凝りに凝つて調進した、名代の一品二品を其家の身上とするやうな呼物は無いが、茶會席風の乙にヒネッタ、賑やかな献立て、盛り方を吝にして、品敷を殖した所は、悪く貶せば、ち雛様の飯事とも云へるが、是が或意味から見ると、通てとして粹に當る、山盛の御馳走は、決して上品ではないからだ、けれど概して客筋は舌の教育の進歩しない、美味よりも美人を望む、造化機論的の通人、一進が二進的の通人、アイヌ的粹人が多から、需要供給の原則上の俗を離れた大通を得意として、眞に割烹の妙を發揮する、八百善式の高尙な割烹店の絶無なのは、當節柄止むを得ぬことであらう。

扱市内の料理屋は、料理店三百六十四、飲食店三百二十六あつて、食慾機關も随分大したもののであるが、河文、御納屋、百春樓、香雪軒は、此中の四天王で、萬梅、八千久、得月、十州樓などが之に次ぎ、安値の宮房、郊外の雪月花なども、中々の繁昌である。



河文

【河文】料理屋四天王の随一として、魚の棚の河文と云へば、粹不粹、通不通の間に廣く名の通つた名代の割烹店、舊藩から居据りの老舗として、建築什器などに由緒あるものも少なからず、腕揃ひの板前が調進する献立は、生粹の名古屋料理として、上流の顧客に評判が好い、構造も當世風の眩華々々しいのではなく、昔風の雅致ある奥床しい建物、庭園も温雅しい所に趣がある、客室の配備は小間廣間頗る數多く、集會に可なり、小酌にも適當、底抜け騒ぎの豪興にも適すれば、粹な爪弾きの真猫遊びにも適する、庭園の奥深く、寂びた茶席風の亭は、大分因縁のあるものさうな。

(六三)

【百春樓】一名魚半と云ひ、河文御納屋と共に、魚の棚の三つ指の一本に數へられ、暖簾を揚げてから、六代百七十有餘年の老舗で、葵の紋の幅を利かした時代は、主に町家の紳士を得意として随分繁昌したものだが、維新後は大に上流の愛顧を受け、有栖川宮始め各宮家の御用を承り、山縣井上諸元老始め桂侯などの覺えも好く、又市内紳士の間に頗る評判が好いので、昔に數倍する立派な割烹店となつた、庭園は目抜の土地に珍らしく廣く、そして幽邃な趣があるのと、客室が之と釣合つて閑雅なのが特長、洒脱の茶味と、豐厚の食膳とを供するのは、此家の自慢である。



百春樓

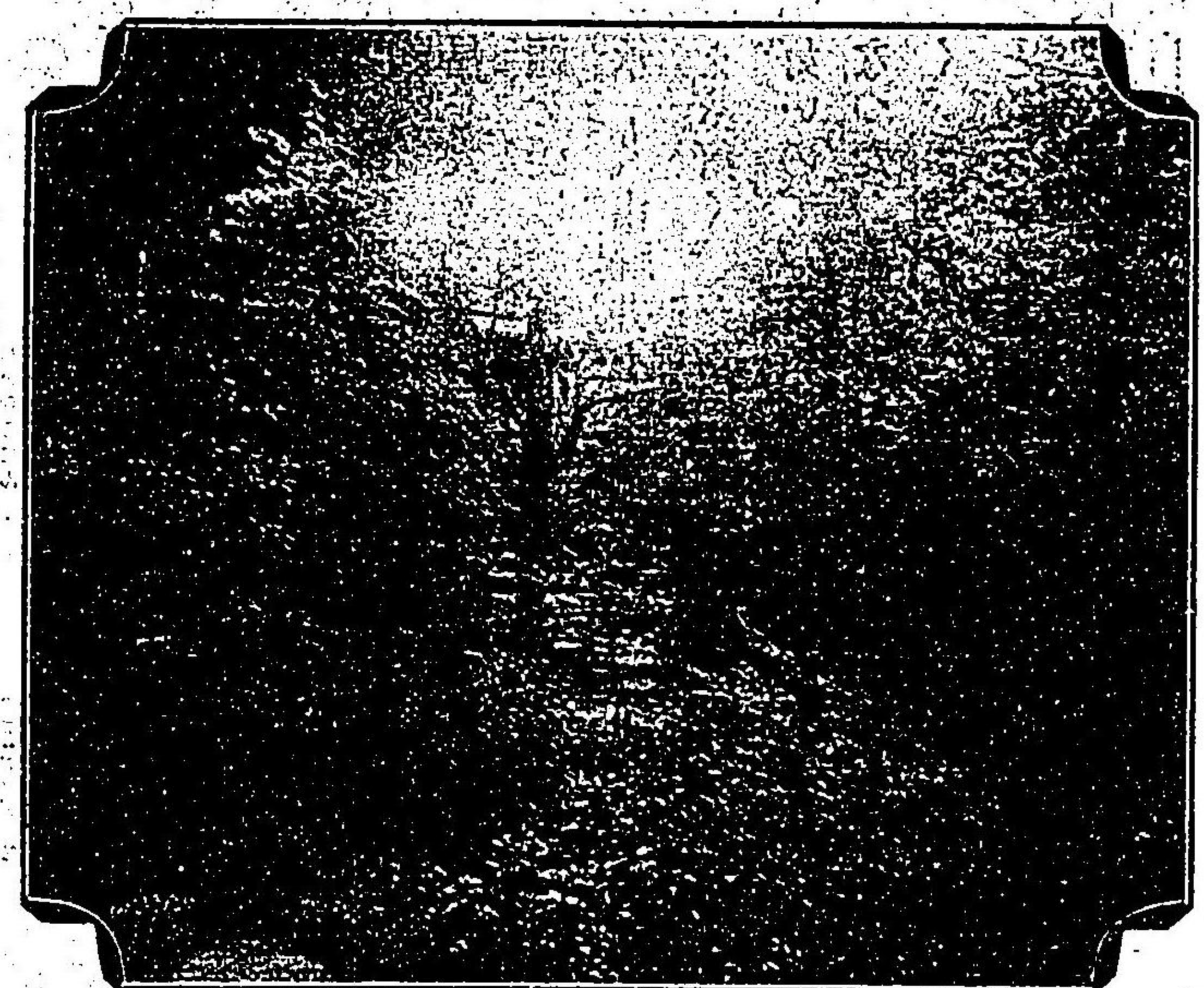
(六三)

【香雪軒】鼻を撲つのは脂粉の香か、
 頬を叩くは解語の花吹雪か、名實共に粹
 な香雪軒、その昔し一躍桂侯爵夫人の王
 の輿に乗つた花子さんは、此家の前身木
 村常次郎の養女で、今の古橋およし姐さ
 んの手に渡つたのは三十五年一月、料理
 店兼旅館として、泊り込みお詠向な、
 雑踏を離れた閑静の粹境、爪弾かなんか
 てシンミリ遊ばうとするには、屈竟の巢
 籠場所、昔も變らぬ最負筋の多いのも怪
 しむに足らぬ、調理は名古屋式の通な所
 を抜き、舌に必む味のあるのは勿論、庭
 園も座敷も餘裕のある立派な結構、構へ
 の堂々とした點は、中京割烹店の随一で、
 位地が最も共進會に近いから、來年の
 發展は今から想像される。



軒 雪 香

(三五)



屋 納 御

【御納屋】矢張魚の棚の旨い物屋、割
 烹美味の三役株は動かぬ所、由緒ありげ
 な御納屋の家號は、所謂拜領家號で、元
 祿時代から引續き、尾州家のお肴御用を
 勤めて居た時代附の老舗である、當店自
 慢の庖丁加減は、數年前に亡なつた名人
 久七の薫陶を受けた料理番が、板前を預
 つて居るから、魚の棚獨特の腕前があ
 ると云ふ評判、構造は殊更に控へ目にし
 たやうな表向の、之が有名の割烹店かと
 怪まれるが、中へ入ると庭廻り、座敷の
 模様、床の飾附から、器物の取合に至る
 迄、小瀟洒した中に、どうやら風流氣の
 ある拵へ方、遺が數寄者の主人だけに、
 生粹な中京趣味の真中を現はしたのは感
 心々々。

(三五)

【料理店所在地】

(電話架設の分のみを母)

河文 小田原町
 百春樓 西魚町
 御納屋 同町
 香雪軒 上前津
 萬梅 門前町
 八千久 同町
 安値は名古屋料理の特色であるが、八千久は最も安値で而も美味である
 得月樓 納屋町
 得月の奈良漬は割烹界の一珍
 十州樓 市外大曾根
 眺望頗る壯闊、調理の濃厚と安値は又一珍
 雪月花 市外千種町
 調理は好い加減のものなれど、都放れた土の匂ひのする所に似あり

東洋館 前津小林
 火災後元の堂々たる傍がなくなつたが、庭園の規模雄大を以て名あり
 井桁政 小田原町
 以津美 新柳町
 梅竹樓 南鷹匠町
 同支店 浅間町
 花月店 富澤町
 貝丸 澤井町
 香川 紀念碑前
 八梅支店 幡 轄社境内
 萬梅支店 西柳町
 小扇樓 富澤町
 あは雪 南長島町
 さつき屋 旅籠町
 入江町

祀ふく 米屋町
 東鯨 新柳町
 桔梗 兼(廻類) 榮町
 加藤 門前町
 雷川 日の出町
 喜彌 小田原町
 河芳 長島町
 河彌 小田原町
 大松 同町
 橋惣 同町
 魚住 園井町
 魚嘉 鷹匠町
 魚直 榮町
 近直は魚の棚に於て、河文、御納屋、百春樓と四本の指に数へられる割烹店である
 (六七)

宮房本店 車之町
 宮房中店 南伏見町
 宮房支店 門前町
 名古屋ホテル 堅三蔵町
 勝利亭 新柳町
 改良亭 住吉町
 虎屋 花園町

【西洋料理店所在地】

松榮軒 南伏見町
 新加茂 永樂町
 岡田(兼旅館)熱田神戸
 借樂亭 富澤町

いせ久(兼旅館)熱田神戸
 魚半 同町
 山丸 熱田傳馬町



藝妓屋遊廓

れる諸藝に堪能なり、顔て賣らない本當の藝者も居るであらうが、其邊の觀察は、藝妓の二字を聞いて、武者振ひを起す斯道の勇士に聞くが早道、無粋な編者が蛇足を添へる迄もなすが、併し噂に依ると、一粒選りの逸品は、大抵東男に掻浚はれ、残る逸物も老ては罷

【藝妓】美人の本場の名古屋

妓であるから、春本の萬龍に兜を脱がせるやうな素的な美妓も居るだらう、名古屋美人の特色と云は

名古屋に於て洋食らしい洋食を食はせる所は、ホテルと借樂亭に限るが、數百人の大會食を引受ける設備を有し、又現に大會を一手に引受けつゝあるのは、借樂亭唯一軒である。従つて獻立の取り合せは煩るが練れたもので、又煩る旨く食はせる、食堂の設備は小サツパリしたのが取柄である。

め、常盤、音羽、東角、香妻、富岡の八ヶ町あり、大樓は花園町の金波樓、若松町の宮田樓、壽樓、福岡樓、新金波樓、城代町の豊本樓などで、其他大小の貸座敷百三十餘軒、娼妓無慮千五百人、藝娼妓及び酒肴の求めに應ずる揚屋の数が三十一軒、中々以て盛んな事である。

熱田遊廓は、昔東海道の宿場遊廓で、随分古い歴史を持つて居るが、今は悉く勢力を旭廓に奪はれ、怪しげな十五軒の貸座敷が、磯真い隊長を相手に、僅に命脈を保つて居る位のもので、別に取立て、云ふ程のもてなし。



劇場寄席



さぬ、所謂黒人眼を具へ、充分に技藝の巧拙を批評する力があるから、従つて觀劇の面白味も深いので、外の事に掛けては、随分客な名古屋人も、芝居の蓋が開くと、中々氣前能く財布の口を開けるのである。

(半)

今から二十三年前、末廣座の名物大入の話を聞くと、芝居狂は名古屋の風土病と云つても好い位、此大入とは開場の初一日を安木戸銭で見せ、出し物の當るか外れるかを試す大事の運定め、俳優は乗るか反るか、懸命の覺悟で出場するので、芝居を見るなら大入に限ると、市中の芝居狂は渦を巻いて群々と詰め掛け、もし座員の方で何か遺損ひてしやうものなら、土瓶茶碗火鉢の雨が降り、舞臺も道具も滅茶々に壊され、此一日で芝居が立消になつて了ふ、明治十八年の延若一座の大入で、腕力と亂暴との入場争ひから、人崩れに打たれて、三人の即死者が出た位、二十九年に御園座が出来た當時に、他の各座と共同して、大入を廢して初日と改め、場代を取る事にした爲めに此風は衰へたが、東西の千兩役者も、内心密かに名古屋の興行を案ずると云ふのも、畢竟此芝居狂の氣風と、又穿ちの鋭い黒人評を恐れるからで、従つて油断なく演技に身を入れ、本場同様の引き締つた藝を見せる、劇場諸藝場の繁昌するのも當然である。

【劇 場】

御園座 南園町 定員二、四四人
末廣座 末廣町 同 一、四一三人
千歳座 南桑名町 定員一、五一七人

此二座は中京一流の劇場で、東西名優の演技は此二

座に限る、御園は設備の立派なる三都の夫れにも劣らぬが、名優のかゝるのには却つて末廣の方が多し、是は末廣が歴史が古く縁故が深い爲であらう。

新守	音羽	歌舞	寶生	三榮	富貴	京柁	朝日	相生	富本	真正	開發	南井	菊島	數島	
座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	
本重町	南伏見町	七ツ寺境内	大須境内	古渡町	前津小林	堅代官町	松之町	白鷺町	富澤町	宮出町	泥江町	橋詰町	南壽町	馬喰町	志摩町
定員一、七八六	同 一、四三二	同 一、三五〇	同 一、四二一	同 六四〇	同 六一一	同 一、二二九	同 一、〇二〇	同 九三〇	定員 四七六	同 四二七	同 七二八	同 四三二	同 五九八	同 五二五	同 三〇〇

【寄席諸藝場】

笑福	壽大	蓬來	熱田	榮田	吾妻	春喜	中京	金輝	金城	五明	桔梗	福壽
座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座
橋詰町	志摩町	江中町	熱田神戶	熱田東町	同	北瀬宜町	南伏見町	榮町	大須門前	大須門前	大須門前	同
定員一、〇七二	同 八三六	同 九三七	同 一、二九六	同 一、〇三五	同 四一〇	定員 二九四	同 四七〇	同 七二八	同 五六五	同 九九四	同 四六二	同 四六二

以上の中御園より歌舞伎までの六座を除けば、多くは寄席の毛の生いたものだ。

(七三)

千文 長座 大須門前 定員 五三七人
 龜亭 熱田 同 三〇〇人

米 本 熱田神戶町 定員 三八六



名古屋に於て一番發達したものは各種の遊藝である、従つて素人は各種の遊藝である、女に生れて茶の湯生花の心得、扱は歌舞音曲の

一手位を覚えて居ぬ者もなく、男に生れて何かすら隠藝の一つ二つを持つて居ぬ者も無い、斯く遊藝の盛んな結果は、嫁を選むに一通り遊藝の心得あるを條件とするやうになり、妻に藝あれば、自然に夫を感化し、又子供に藝を仕込むのも當然で、無藝は獨り女の耻辱のみに止まらず、男も空つきし無藝では交際が圓滑に行かない、そこで名古屋氣風の一粒となつて、上手に浮世を渡らうとする人間は、胡麻鹽頭を振り立て、菊版一頁大の手を擴げて、四十五十の頑固な踊子となり、老大耻無きの滑稽を演じなければならぬ、況して花柳界に通を振り廻すには、中々修業に骨の折れることであらう。

【茶道の師家】

松尾流 松尾宗見 櫻町

寛政の頃名古屋に松尾流を始めた、名人松尾宗政から八代目の家元、弟子は上流に多く、斯界一方の重鎮。

表千家 飛鳥井高資 南吳服町

京都不審庵千宗左の高弟、門葉多く表千流の重鎮。

香道 峰谷百枝 上宿

【生花の師家】

東山公正流 求得庵 不二見町

八代流家元 相承軒 中市場町

相阿彌流家元 月の家 園井町

嶮源流家元 嶮源齋 矢場町

天山流家元 新古庵 桑名町

松月堂古流 一路庵 平田町

香道は現今廢れて居るが、峰谷家は舊藩時代からの立派な家元。

表千家 吉田紹敬 島田町

表千家 佐竹松雨 住吉町

裏千家 村瀬玄中 門前町

元浪越山及び柳下水の保護者、又斯界有数の名流。

裏千家 宮崎宗健 白壁町

千秋流 圓鞠齋 前ノ川町

靖流 曉月庵 大曾根町

嵯峨御流家元 寸園居 上長者町

村雲御流 花明軒 鐵砲町

竹心流 竹心庵 岩井町

天真流家元 鶯樹軒 若松町

舞

踊

【遊藝師匠】

西川石松女
西川花子



西川石松女



西川花子

作り上げたのが、今の名古屋舞踊、西川流の外に舞

京の舞の道入ったのは、昔のと、後年と、藤間、山村、藤原、阪東などの諸流が追々廣まつた所へ故人の西川が来て東西の手振を折衷し、舞の真髓と、能狂言の妙味とを調和して

舞

踊がないと云ふ勢、西川親子は斯道の名人として、名古屋舞踊界の女王たる観がある。

長 藤間流で有名な故人織田幾女の養女で、西川の高弟であるが、又獨特の妙がある。

長 菫齋臣で故人六翁の門人、今は廓連の師匠と仰がれ、富豪連の歸依も深い。

長 喜多六は斯界の重鎮で、喜歌義に其高弟、淺遊連の師匠。

長 喜歌義に其高弟、淺遊連の師匠。

長 岩屋小一郎

長 今春流を以て鳴物界一方の重鎮、陸、朝日、廓連の師匠、得意は小鼓。

長 鳴物 牧田 眞季

長 太鼓が得意、淺遊連の師匠。

長 鳴物 牧田 眞季

長 鳴物の長縁と云はれた牧田長次郎、同苗縁次郎の孫で、小鼓が無類の上手、盛榮、廓、東雲、金城各連の師匠。

長 飯田 すま

長 飯田 すま

共進會場西一丁
 名古屋名所七松本
 名物御料理 牡丹亭
 電話一七二番



清 常 歌 尺 箏 狂

女に稀れな笛の名人。

清元 延齊八女
 齊兵衛門下で當市に残つた三人許りの其一人。

盤 津 岸 澤 式 右 女

式右は式大夫の門人で、岸、陸、雨連の師、式治は名古屋で有名な玉澤屋の門人、盛榮、朝日雨連の師、此二人は常盤津界の親玉。

歌 澤 芝 喜 久 女

名古屋に歌澤を扶植したのは、有名なかんく屋のお禮で、師匠は東京の三代芝金である。芝喜久も矢張芝金の弟子で、廓、陸、朝日、東雲、各連の師となつて居る。

八 内 田 紫 山

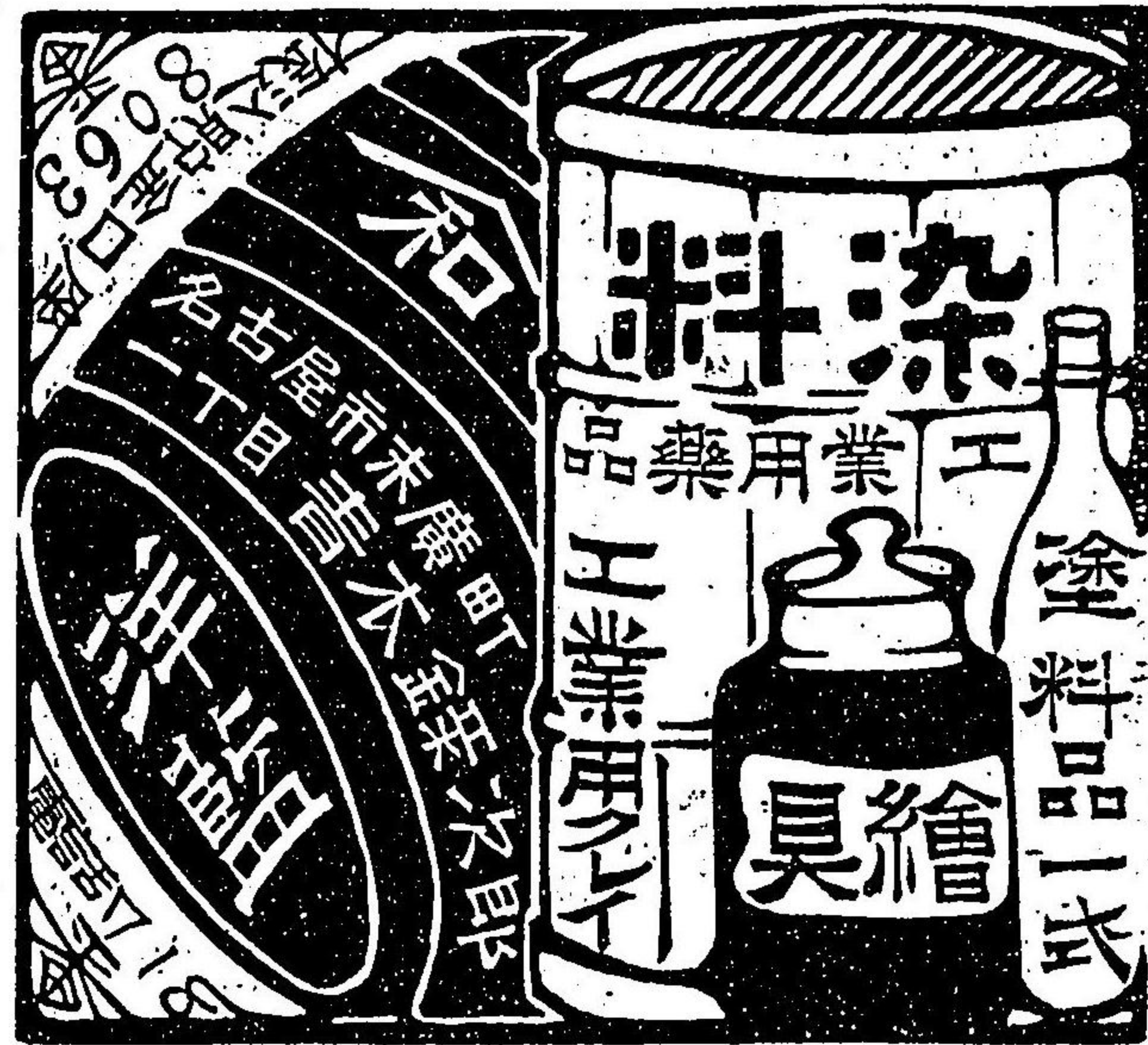
斯道の天才兼友四圍の高弟。内田の尺八と云へば、此道で有名なもの。

曲 磯 貝 け い

磯貝、寺島、小松の三家は、琴の方の勾當で、其筆頭たる磯貝翁の妹である。琴の伎倆は斯界一流。

言 井 上 菊 次 郎

尾州家と泉流の別家格、早川幸八の手取り門弟として残るは此二人。門水はお洒落會の牛耳を執り、一流の狂言番と共に、飄逸の名が高い。



肥料



魚粕

豆粕

了ルカ肥料

所
師定商店

名古屋市中區納屋町

電話
長八
七九五
電
七九五
電
七九五
夕

橘周旅館

名古屋市中區七町間三丁目

電話四二九番

松葉旅館

名古屋市中區前門七町前寺

(電話七七一番)

中京の薬名

胃病退治

健胃散

其名の如く

健胃散

石本專弘

石本專弘

石本專弘



三輪喜兵衛商店

名古屋市西區東萬町四丁目

營業品目

關東吳服太物
西陣織物
各國染絹
尾濃織物
各國産紺類
諸國白地絹
洋反物類

電話五百四十四番
電話千六百六十九番
貯金大阪七五四六番
口座
暗號使用

於東京勸業博覽會
賜第五回內閣
榮上買御省內宮賜
勸業博覽會
榮上買御省內宮賜

登錄商標

公代率

第五回內閣勸業博覽會 貳等賞銀牌

特約店 三輪商店

内外各博覽會共進會品評會金銀賞牌二十餘個受領

御琴三絃。雅樂器
樂隊用品。能樂器 製造
歐米諸音樂器直輸入商

名古屋市西區袋町

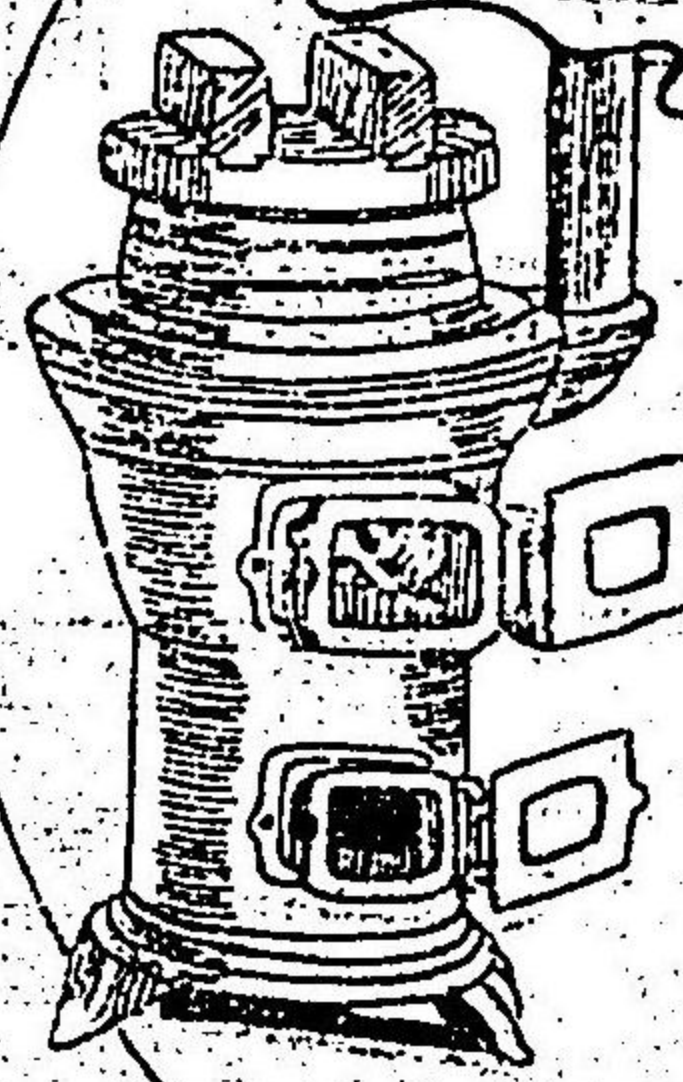
小林倫祥

電話番

名古屋市中區南大津町
中村寫真館
海部主館
海部製版所

電話一八六八番

天下の最高評
梅田電



便利は
薪石炭コークス
雑木など焚き
中試用此日間は
品質にて買戻
保障附
旧式電まはす
五割余の有無
衛生
煙房は家
器具燥らす
必要

所る金の物店電以取費

公益梅田電
記念割引

容量	釜口徑差波 曲尺正寸法	鑄鐵製
13 壹升五合器	六寸五分	金三圓五十錢也
15 二升器	七寸五分	金四圓五十也
17 三升器	八寸五分	金五圓五十也
20 四升器	九寸五分	金六圓五十也
25 五升器	一尺〇五分	金九圓也
30 六升器	一尺二寸五分	金十一圓也
38 八升器	一尺三寸五分	金十四圓也
43 一斗器	一尺四寸五分	金十七圓也
60 一斗五升器	一尺四寸五分	金二十圓也

共進會開會中特に記念
として右定價の一割引

發賣元 石原平左衛門

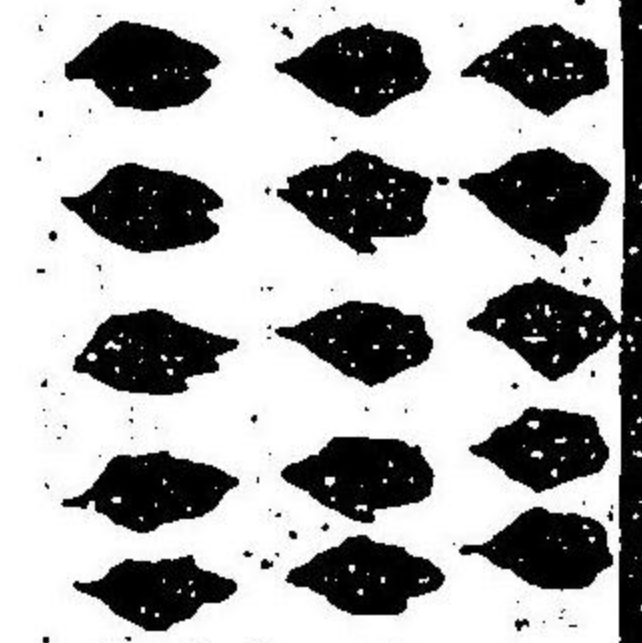
電話四百六十二番 東京貯金口座(一八〇八番)
電話八百三十番

名古屋廣小路通納屋橋西
銅鐵商

天二

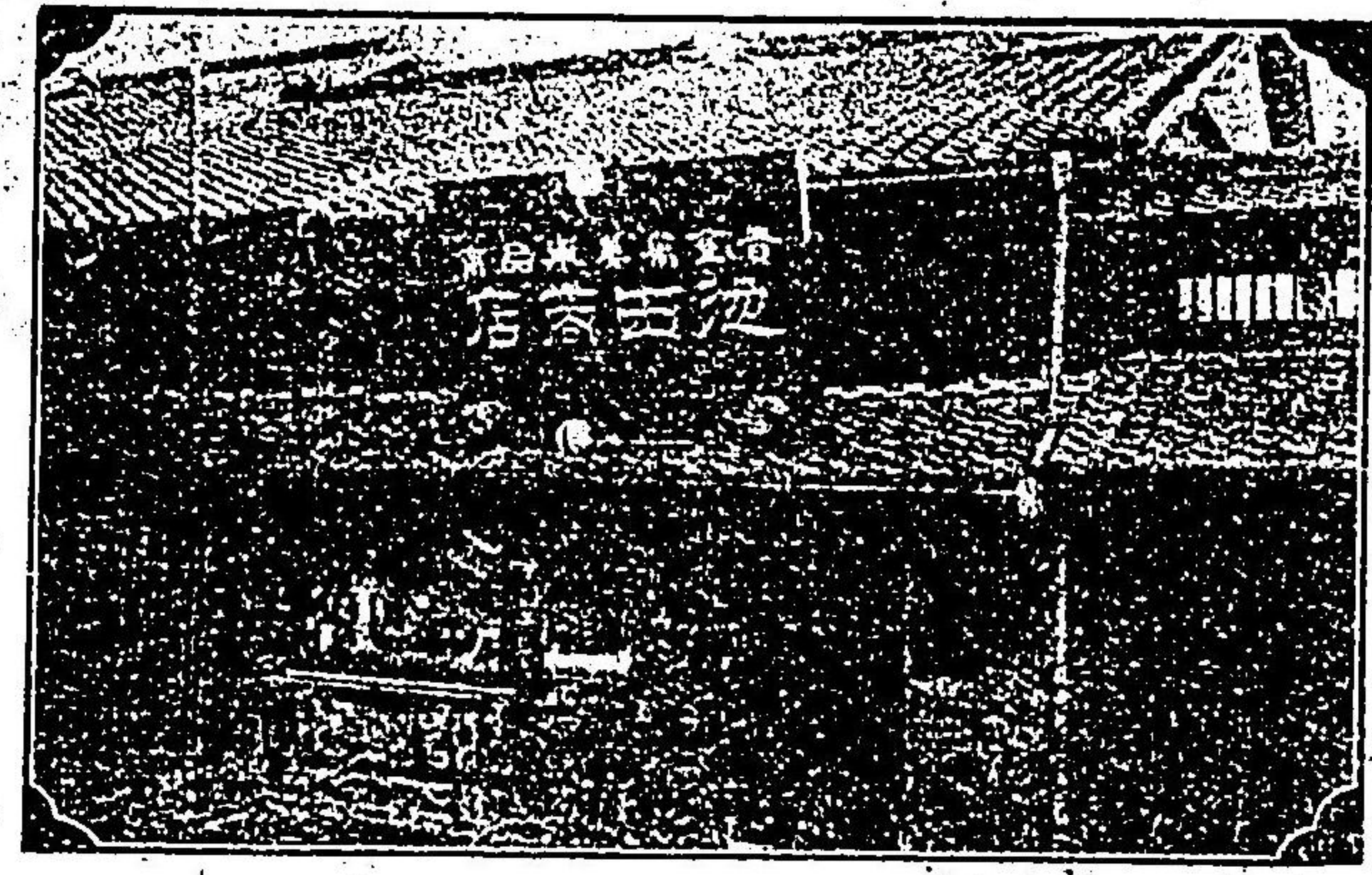
第四編
經濟卷

44



純金及寶石入指輪
金側時計鎖銀器

其他裝身具及携帶各品確實正札販賣



名古屋市中區鐵砲町

池田商店

園電話十五番

○創立 明治十四年九月
○總預金 五百四拾四萬
○餘 千餘圓

株式 伊藤銀行
會社



名古屋市西區茶屋町

株式 伊藤貯蓄銀行
會社

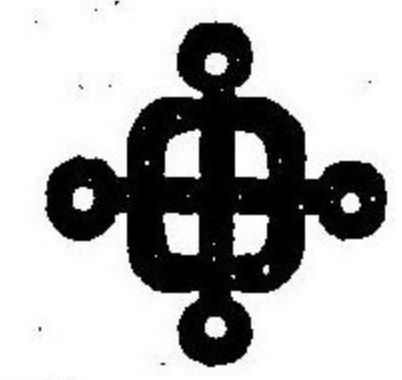
○創立 明治二十六年三月
○貯蓄 壹百八拾六萬
○預り金 四千餘圓

無限責任

名古屋市西區傳馬町二

關戶銀行

長電話一六一番



同市同區堀詰町關戶向

幅下出張店

長電話九七番

無限責任

名古屋産業の大勢

三十六年大阪博覽會の際に、今の名古屋通信社から發行した名古屋案内がある。夫を見
ると主なる會社銀行及公衙の建物と、其狀況とは殆んど一變して居る。同時に街衢の
膨脹、繁榮は、驚くべき變化を呈して居る。僅か六年の歲月は、紀念碑以西に雲衝く煉瓦
造りの薨を並べ、總ては中京の名に負かぬ堂々たる大都會を形成すべき、未來の運氣を漲
らしつゝある。此古き名古屋案内を持つて來て、榮町電鐵の丁字巷頭に立つと、直に未來
の名古屋繁昌記を想像することが出来る。
此驚くべき發展力を有する名古屋の進歩を、具體的に説明するに先づ都市盛衰の照尺
とも云ふべき、人口増進の速度を吟味せねばならぬ。それには主なる都市との對比を示す
のが早道である。

名古屋	二十六年	三十一一年	三十六年	四十一年
横濱	一九五千人	二四四千人	二八九千人	三五六千人
京都	三一七千人	三五三千人	三八一千人	三九七千人
東京	一五二千人	一九四千人	三二六千人	三七九千人

日露戦前と、戦後に於ける六七十年の間隔は、我名古屋勢力範圍の輸出貿易をして二倍に増進せしめたのである。而かも今後の趨勢に徴すると、今の名古屋は尙ほ青春の都市であるだけ夫れ丈け將來の發展は刮目の値があらう。

其生氣躍り、未來の希望燃ゆるやうな、名古屋によつて代表せられる愛知縣の産業が、如何に排列せられ、如何なる種類の事業が、中心となつて居るか云へば、直ちに商工業と答へなければならぬ。其大體の生産額は左の數字の表明する所である。

農	四七、四七六、三八六
工	七四、四七六、三八六
林	一、四二六、七〇四
礦	四〇八、九〇〇
水	二、七九九、三九二
畜	一、四一〇、九〇九
計	二二八、二六〇、〇九四

即ち全生産額約一億三千萬圓に對し、約七千五百萬圓の工業は、五割三分即ち其半以上を占めて居る。併し農産も元より豊富であつて、此豊富なる農産を背景として居ればこそ、名古屋市が商工業のチャンピオンとして、産業的舞臺の立役者たることが出来るのである。

名古屋市繁榮の根源となり、膨脹の動力となり居る工業の内容は、次項に掲げる特種事業によつて、稍々詳細の説明に亘る積りである。

名古屋特種事業

【織物】名古屋産業の中心が工業にあることは、前陳の如してあるが、其又工業の中心は、織物である。愛知縣工業の三大宗と云へば、生絲綿絲及織物であるが、其四十年に於ける生産額は、生絲九百九十六萬圓、綿絲一千百三十六萬圓に對し、織物は二千〇十三萬圓に達して居る。即ち織物は愛知縣の大動脈であつて、是から各種産業の小動脈が分派せられるのだ。尤も嚴密に名古屋の生産額を云へば、織物總體に於て約三百萬圓であつて、中島郡の六百萬圓、知多郡の三百七十萬圓に及ぶが、取引關係より云へば、名古屋は其凡てを支配するから、矢張縣全體の生産額から打算せねばならぬ。そこで最近十年間に於ける縣生産額を擧げると。

年	次	絹織物	絹紡交織	綿織物	綿毛布	其他	合計
三十一	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
三十	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
二十九	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
二十八	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
二十七	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
二十六	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇
二十五	年	三、四〇〇、〇〇〇	二、七〇〇、〇〇〇	七、八〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	一〇、三〇〇、〇〇〇

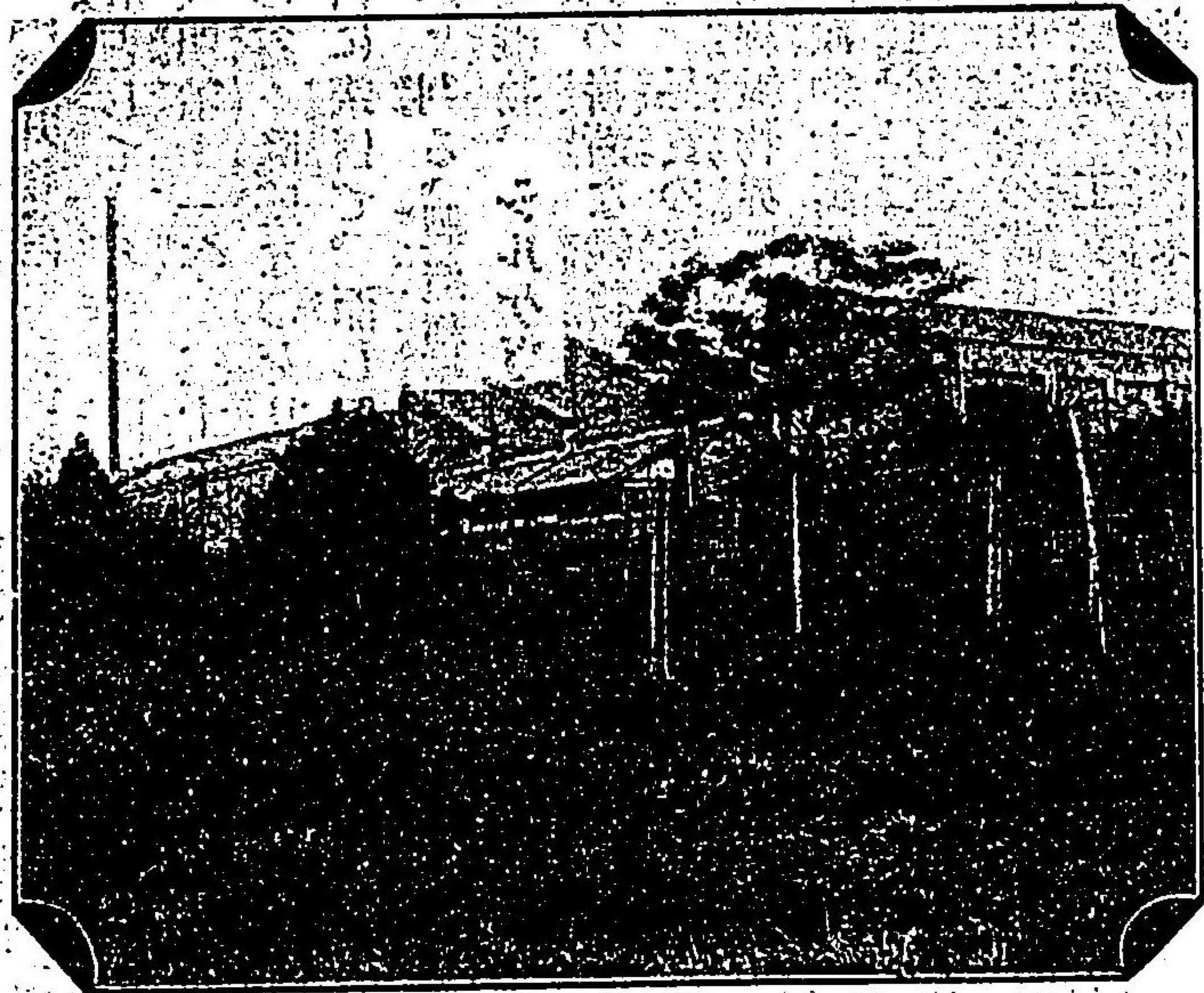
年	粗織物	細織物	粗織物	細織物	機械織物	毛織物	其他の織物	計
三十六年	1,350,000	4,000,000	1,100,000	2,800,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	11,250,000
三十七年	1,100,000	3,500,000	1,000,000	2,500,000	900,000	900,000	900,000	10,800,000
三十八年	1,200,000	3,800,000	1,100,000	2,700,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	11,700,000
三十九年	1,300,000	4,100,000	1,200,000	2,900,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	12,800,000
四十年	1,400,000	4,400,000	1,300,000	3,100,000	1,200,000	1,200,000	1,200,000	14,000,000
四十一年	1,500,000	4,700,000	1,400,000	3,300,000	1,300,000	1,300,000	1,300,000	15,200,000

以上の中綿織物は、發達の淵源が古いだけ、最も盛んであり、又有望である。そして名古屋及附近に於ける織綿物業の錚々たるものは、最新の創設に掛る名古屋織布會社を第一とし、愛知織物合資會社、名古屋製織合資會社等に次ぎ、個人としては熊野鎌三郎、水野繁三郎及び服部金三郎等の諸氏である。

(六)

【絹織物】は、名古屋に於て最も發達の新しいものである。此絹織物の中に紋綾織もあり、縮緬類もあり、軸織、平絹織等種々あるが、代表的に指目すべき價值あるものは、歐米向としての羽二重清國向としての支那縞子其他であろう。そして絹織物工場としては、唯一の帝國捻絲株式會社があるのみで、其他は微々として言ふに足らない。帝國捻絲會社は名古屋絹織物業の運命を擔ふて居る許りてなく、日本の機業界に於ても重要な地位を占めて居る。捻絲と製織と染色とは、機業の三大要素であつて、此三機關を具備して、初めて十全なる機業會社と云ふことが出来るも、日本に於て之を具備して居るものは、京都と桐野繁三郎及び服部金三郎等の諸氏である。

【絹織物】は、名古屋に於て最も發達の新しいものである。此絹織物の中に紋綾織もあり、縮緬類もあり、軸織、平絹織等種々あるが、代表的に指目すべき價值あるものは、歐米向としての羽二重清國向としての支那縞子其他であろう。そして絹織物工場としては、唯一の帝國捻絲株式會社があるのみで、其他は微々として言ふに足らない。帝國捻絲會社は名古屋絹織物業の運命を擔ふて居る許りてなく、日本の機業界に於ても重要な地位を占めて居る。捻絲と製織と染色とは、機業の三大要素であつて、此三機關を具備して、初めて十全なる機業會社と云ふことが出来るも、日本に於て之を具備して居るものは、京都と桐



名古屋織布會社

【名古屋織布株式會社】日露戰爭の際、滿洲に散布せる銀貨を如何にして吸収すべきかを、研究せる結果として、三井及び綿絲界の主なる關係者によりて、計劃せられたのが即ち此織布會社である。初めは専ら滿洲向き織布を製造したが、今は臺灣向き綿布をも製造して居る。生産額は、最近數年間の一年平均高は約二十萬反、其價格二十四萬圓である。創立は明治三十八年八月、資本金は二十萬圓であるが、其組織は一寸一般株式會社と趣を異にし、一株五百圓である。經營振りの地味で、同時に堅實なことが想像される。社長谷口房三、常務取締役岡野悌二、技師長藤原林平の諸氏、工場所在地は南區熱田西町字幣懸十九番地

生に織に一二を數ふるのみである。帝國燃絲は、此理想を以て、今や製織の第二期に入つたのである。早晩染色をも始めるであらう。又始めて貫はなければならぬ。吾人は名古屋絹織物界の爲めに、先づ帝國燃絲の大發展を祈るのである。

【綿毛布】も、清國輸出品として、名古屋機業界に特色を呈して居る。其起源は、名古屋市吉村富三郎氏の慘憺たる意匠から案出せられたもので、明治十六年に始めて製出せられ、夫から幾多の改良を経、工夫を凝らして今日に至つた。田中工場は殆んで唯一とも云ふべきものだが、專業外に近藤茂八氏などもある。

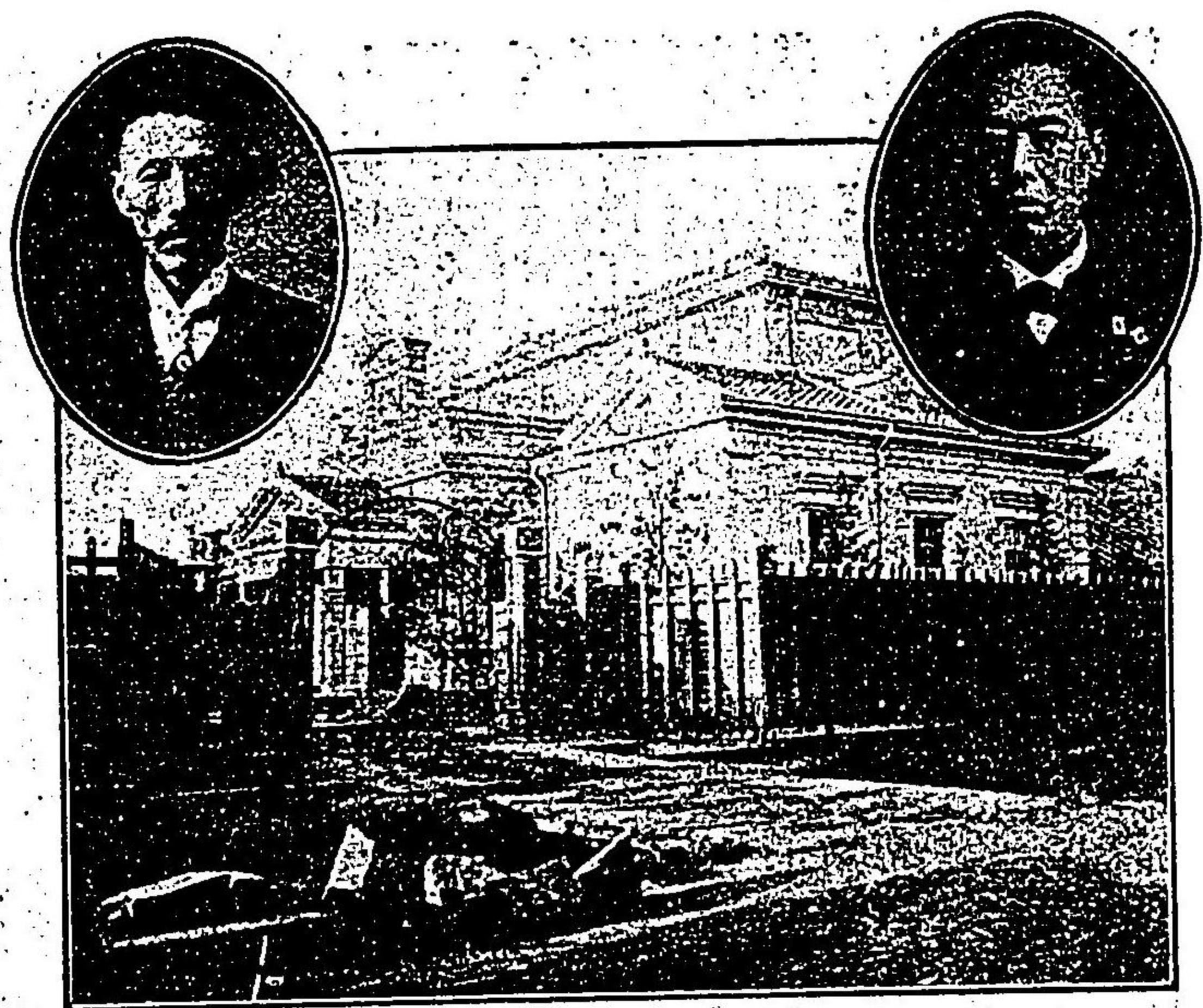
吾人は又有松絞と佐々織とを忘れてはならぬ。有松絞の尾張特産として現はれたのは、徳川義直の封ぜられた當時とも云ひ、又寛永年間とも云ひ、始めは極めて單純な蜘蛛絞であつたが、夫が年を閱すると共に、染色に意匠に、幾多の變遷を経て、今日の聲名を博したので、手廣くやつて居るのは服部與衛門氏である。佐々紬は佐々成政の子孫が發明したので、有松絞ほど有名ではないが、其染色の確かなのと、比較的價格の廉なのとを以て、可なり社會に歡迎せられて居る。而して地は純綿物もあり、又絹綿交織もある。其他フラインネルとして近藤茂八、帶地類として鈴木爲次郎、伊藤政次郎、村田友吉の諸氏、小倉地類として阪倉賀十郎、山内時治、タオルとして山内吉三郎の如き、其種類によりて一流を占めて居る。

【愛知物産合資会社】 絹綿交織類の製造會社として、名古屋機業界の重鎮である。創立は明治十一年、三十年の歴史を有して、事業の益々隆盛なのを見ても、本社の基礎が、如何に鞏固で、而して經營の宜しきを得て居るか判る。製造種類は、絹綿交織の外に毛絹綿交織物、シルケツト、黒八丈及びビジャガード式の最新な織物等であつて、染色の鮮明不褪と、品質の好良と、其意匠の奇抜とは、共に絹綿織物界に異彩を放つて居る。一ヶ年の生産額約十萬反、價格約二十三萬圓である。社長祖父江重兵衛、取締役横井半三郎、支配人石田文七の諸氏、資本金は八萬圓、積立は四萬餘圓、工女は約一千人を使用して居る、所在地は市内東區高丘町。



愛知物産合資會社

(十)

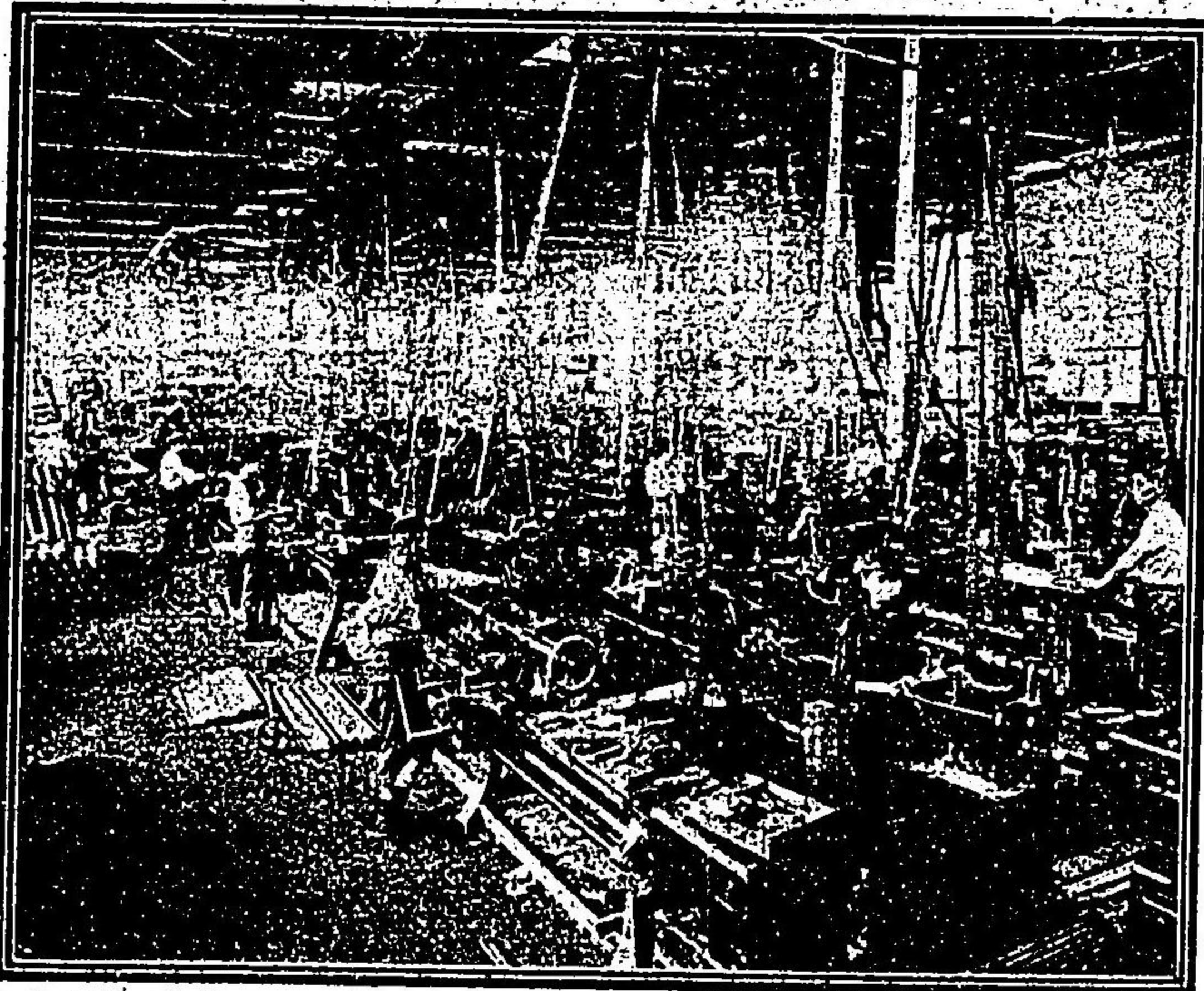


（長會瀧） 帝國撚絲織物會社（櫻井支配人）

【帝國撚絲織物株式會社】 尾州有力の機業家が、本邦絹織物のオーソリチーたるべき抱負を以て、明治三十九年九月に創立、僅半年で撚絲製造期より躍進して、織物に着手し、即ち四十年二月資本金を百五十萬圓（拂込四分一）とし、撚絲の下に織物の二字を加へて現在の會社となつた。織物は羽二重（歐米向）支那縐子（支那向）絹モスリン（印度及歐米向）黑縐子（内地向）生産額は撚絲部年約六十萬圓、織物部年約四十萬圓、取締役會長瀧兵右衛門、專務取締役瀧定助、取締役春日井丈右衛門、佐分慎一郎、監査役茂木保平、加藤彦兵衛、森本善七、支配人櫻井善吉、名譽顧問工學博士平賀義美の諸氏、工場所在地は市外金城村字上名古屋。

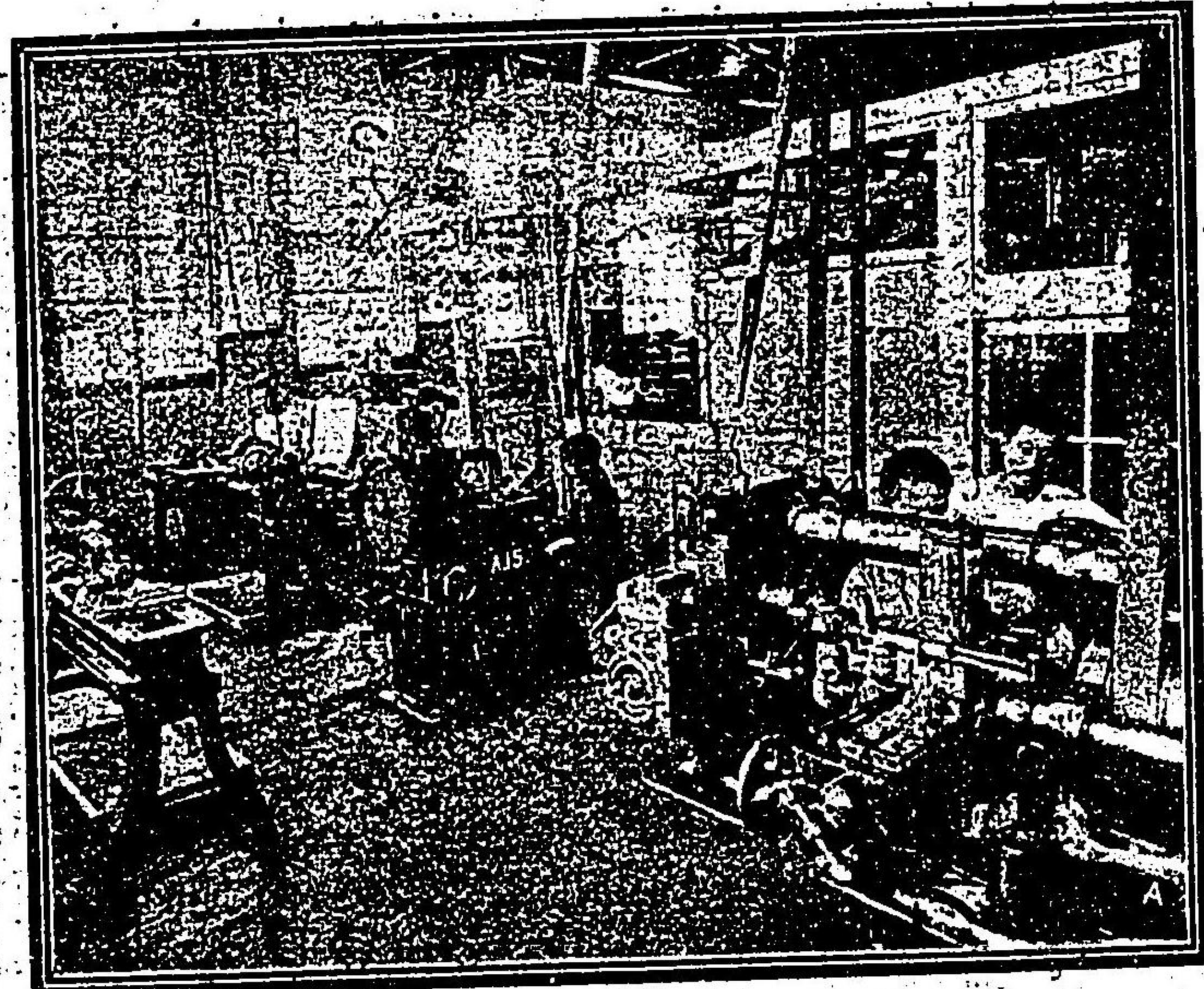
(十一)

三「豊田式織機株式会社」 名古屋が織物産地としての地盤は最も牢固であるが、同時に將來織機製産地として、大に發展すべき望あるのは慶すべき事だ、そして織機の芽を吹き出したのは、大方二十年以前でもあらうが、基礎鞏固に大々的發展の機運に向つたのは此近年で、最も特色鮮かに活動し初めたのは、豊田式織機会社である、本社の淵源は、其名の如く、豊田佐吉氏の苦心發明になれる織機に基き、明治二十八年個人經營として顯はれたのを、日露戦後事業勃興期たる四十年三月に株式組織に更たので、爾來日淺きに拘はらず工場の設備擴張と相俟つて機械は更に改良され、其精緻と嶄新は確に現時力機械界の一

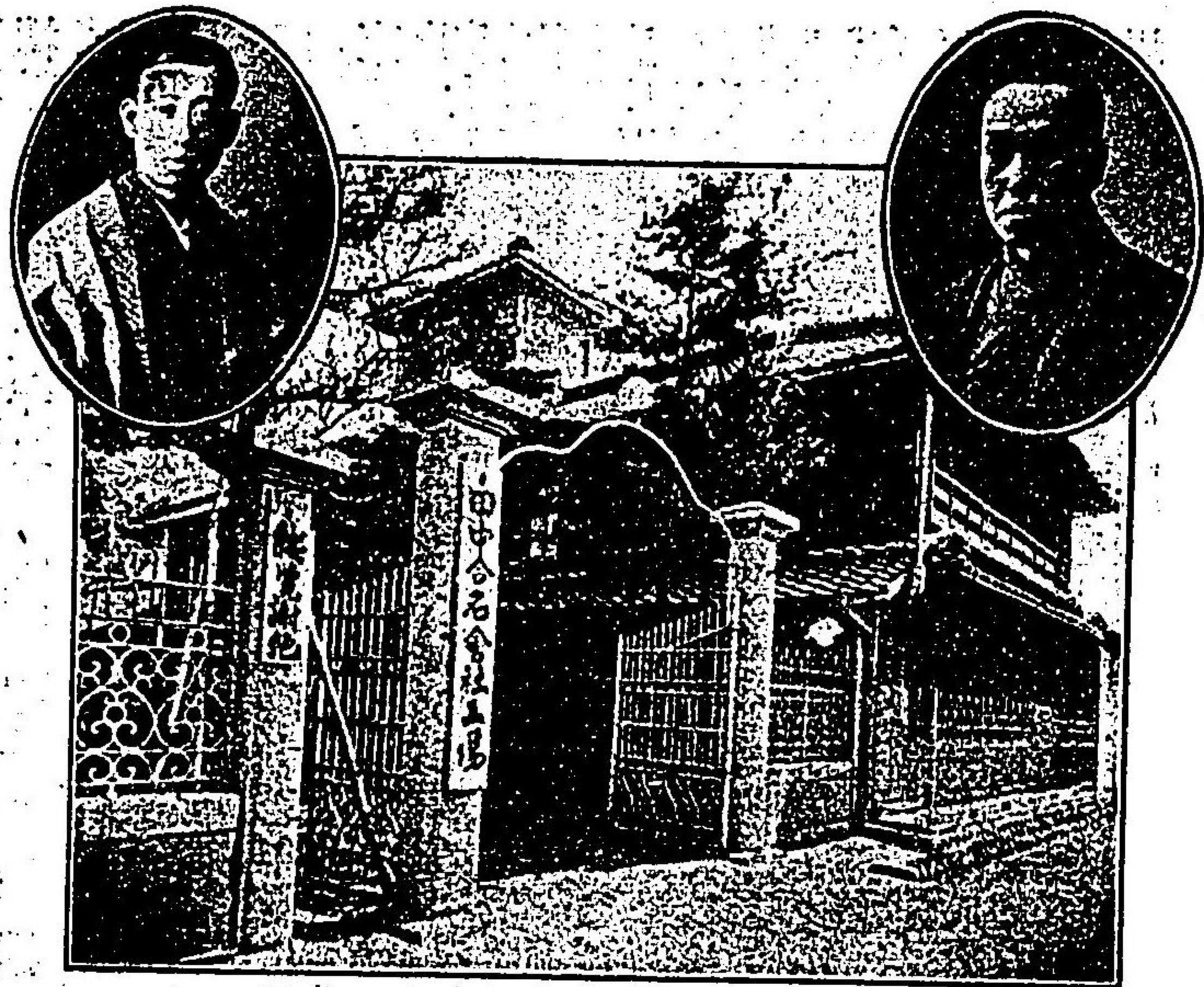


(一其)場工社會機織式田豊

機軸だ、四十二年更に絹物及絹綿交織機の發明されたのは、又力織機に特筆するの價値がある、絹織機は南清方面に販路を開拓し、四十年中上海に百四十五臺、四十二年新に廣東に百六十餘臺を送り、其据え付に引續ぎ技師を送り、滿洲にも又指を染めて居る、又絹物及絹綿交織機は、埼玉八王子以東、仙臺盛岡弘前の奥羽地方にまで手を延ばし、前途の有望想見される、資本金百萬圓(四分一拂込)重役は取締役會長谷口房藏、常務取締役豊田佐吉、取締役岩下清周、益田太郎、志方勢七、監査役伊藤傳七、山邊丈夫、支配人榎爪頑太郎、相談役藤野龜之助、齋藤恒三の諸氏、工場所在地は西區島崎町。



(二其)場工社會機織式田豊



(氏郎太秀同) 場造製布毛綿中田 (氏郎三徳中田)

【田中綿毛布製造場】現在綿毛布製造業として最も盛んなのは、田中徳三郎氏の工場である。氏が奮て斯業を創めたのは、明治十九年四月で、當時は手織の爲め事業抄々しくなかつたが、二十六年にメカニツク式機械を應用するに至りて、首めて一道の光明を開き、基礎鞏固となつた。其後改良に改良を加へ、清國へ輸出と共に、販路は殆んど内國全部に行き渡つた。工場備付三臺の起毛器中一臺は佛國の最新式で、全國中僅に紀州に二臺あるのみ。一臺能く一日千枚を生産する。息秀太郎氏を資けて工場の經營監督、支配人は高須菊次郎氏、三十年現製造所に移轉、市内各所に支工場がある。

(十五)

【綿絲】明治十七年に今の三重紡績の分工場たる、尾張紡績の創立されたのが、抑々名古屋に於ける紡績事業の濫觴である。日露戦前までは、各紡績工場が銘々獨立割據の姿であつたが、トラストの大勢は、先づ三重紡績、尾張紡績の合同に端を開き、近數年にして勢尾一圓の紡績を擧げて、三重紡績の名の下に合同したので、大會社の殘存して獨立を保てるものは、一宮の日本紡績會社あるのみである。過ぐる十年間に於ける縣全體の生産額は左の如し。

(十六)

年	数量	價格	年	数量	價格
一	三三三、三三三	四、四七	廿	三、三三三	六、三三
二	三三三、三三三	四、四七	廿一	三、三三三	六、三三
三	三三三、三三三	四、四七	廿二	三、三三三	六、三三
四	三三三、三三三	四、四七	廿三	三、三三三	六、三三
五	三三三、三三三	四、四七	廿四	三、三三三	六、三三

即ち十年間の進歩割合は、數量に於て約二倍、價格に於て約三倍以内の増加で、其中名古屋市の純生産額は、殆んど七割近くを占めて居る。販路は、内地向きが六割乃至七割、他の三割乃至四割は、阪神兩港の手を経て、清國及韓國に輸出せられるのである。清國の大市場を控えて居るから、其前途の有望なのは勿論であるが、而も其清國輸出が動もすると、後歩する傾向あるのは甚だ遺憾である。

【三重紡績株式会社】 三重紡績は縣工業額の第一位を占むる綿絲の殆ど全部を産出する大會社である。明治十九年七月三十萬圓の株式組織を



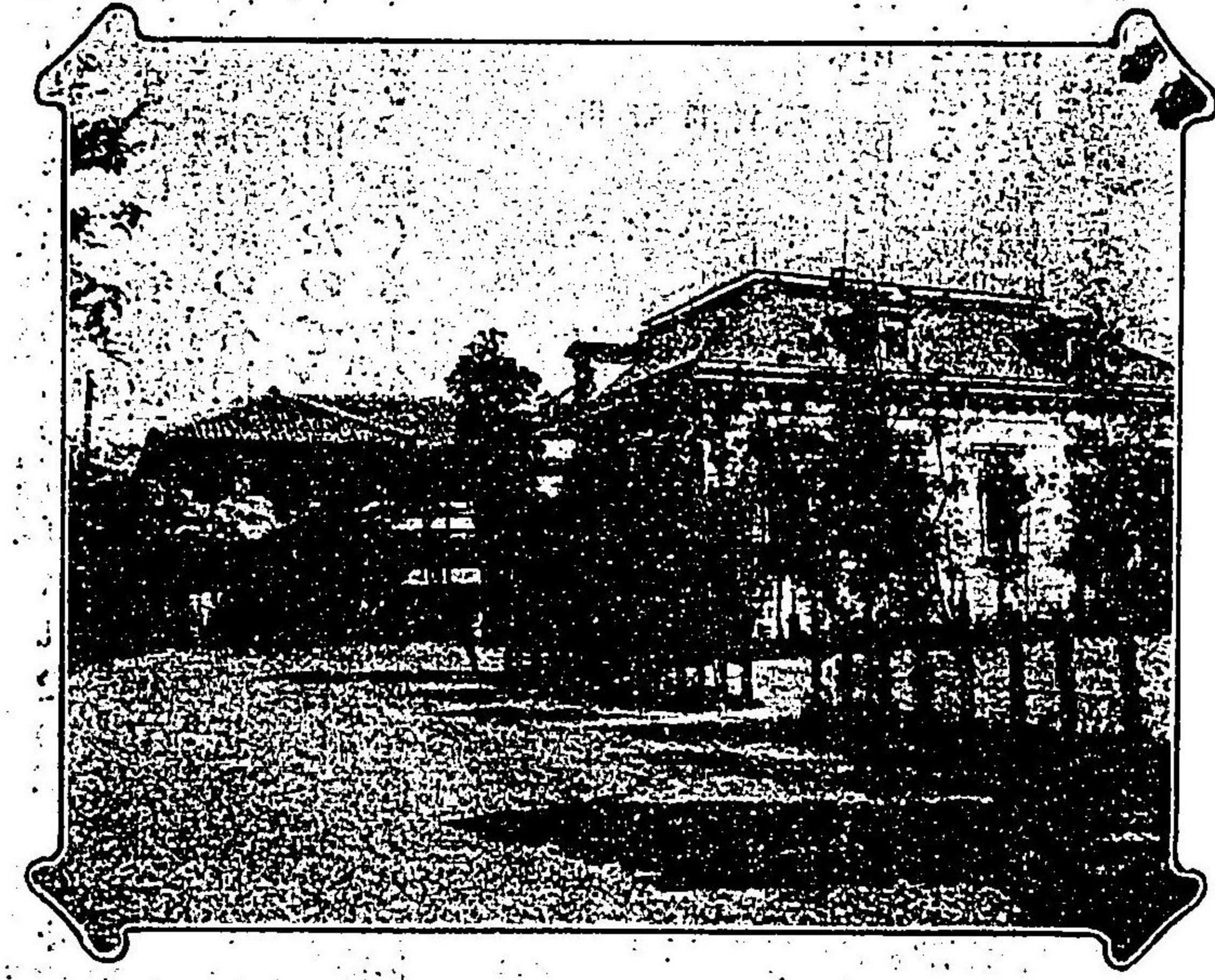
務專藤齊



務專藤伊

九百六十萬圓拂込五百八十七萬餘圓積立金三百卅六萬圓を有する全國屈指の大會社となつた。取締役(長)奥田正香、(専務)齋藤恒三、伊藤傳七の諸氏市内中町の支店は事實上の主腦部である。

以て前身たる伊藤傳七氏の三重川島村紡績所(十三年)を買収して四日市に本社を置たのが抑もの淵源で、其後資本を増して愛知、津、伊勢、紡尾、張紡、名古屋、紡績、紡西、成紡、桑名、紡知、多紡等の各工場及會社を新設買収合併し、資本



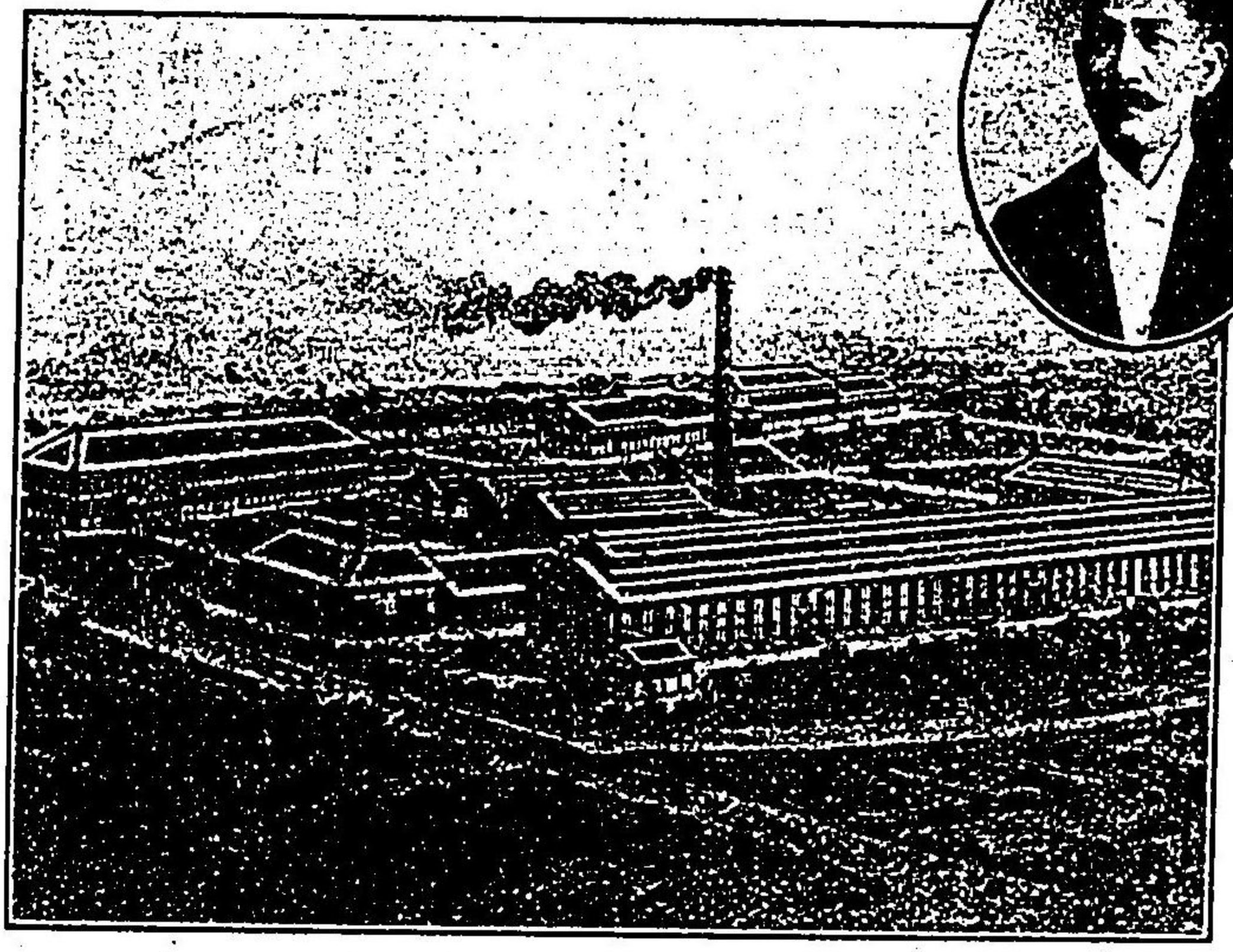
店支屋古名社會式株績紡重三

(十七)

【生絲】 製絲事業は縣の重要物産で、而して前途最も有望なるもの。其生産額は、最近十年間に於て二倍以上の増加だ。例に依つて其割合を數字で示さう。

年次	数量	價格	輸出高
三三三三三	十	一五、五八〇	三、九四六、八八八
三三三三三	十	一一、一六四	三、四五八、〇五五
三三三三三	十	一一、三九六	四、二五六、二五三
三三三三三	十	一四、二六二	五、一〇七、五〇〇
三三三三三	十	一五、八二〇	六、九七八、〇七七

一般とは云へないが、本縣が優良絲たるエキストラを産出するのは大に注目すべき點の一端、信州諏訪製絲が越からず聲價を墮しつゝる時に、尾州絲の逐年隆盛に起く所を見るに、今後の奮發次第で、信州の覇權を移すこと左迄困難ではあるまい。愛知附近有名な優良絲の製出地が甚だ多いが、中に就て伊勢室山の伊藤工場は、絲質の好良第一品と稱せられ、愛知では岡崎の三龍社(四百五)名古屋市外の原製絲所、共にエキストラの製造によつて、絲界の鎮となつて居る。而して原製絲は、三龍社をも凌ぐ良絲を造るとは横濱の公評である。以上の外に一の宮の片倉組(三百)、津島の佐屋川製絲場、渥美郡の川口製絲場、合同組合として三庫社(三河)、親友館、愛知館等屈指の製絲場である。



(氏次健田前)場絲製原

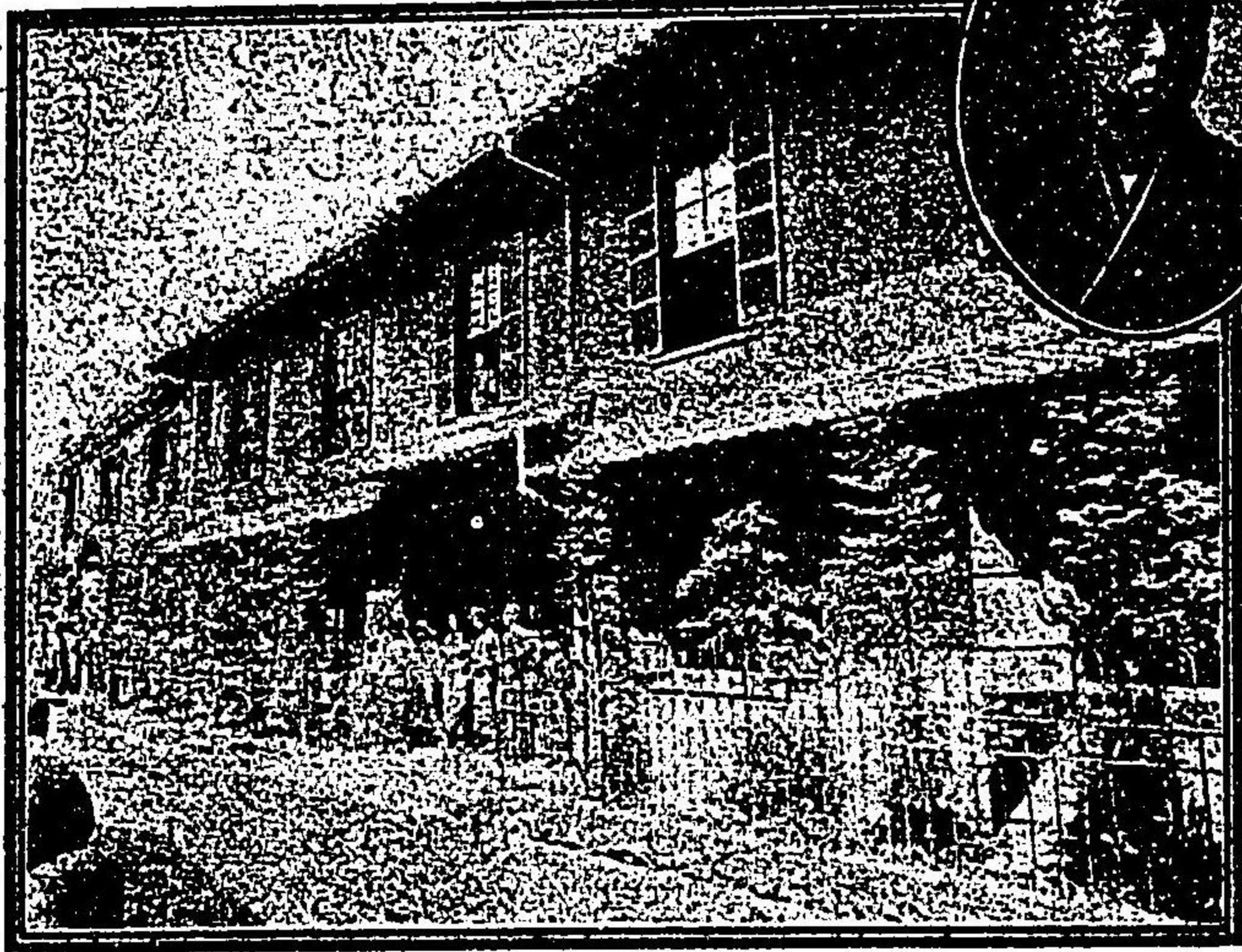
【原名古屋製絲場】前身は三井製絲場であつたが、三十六年中横濱の原富太郎氏が同家より譲受けたので、規模の雄大な點は、近縣能く匹敵するものがない。現時は四百五十釜の三井時代より六百釜に増加し、其生産額は三井時代の七百柵より漸次増加し、本年から一千八百柵を製出することゝなつた。而して製絲は全部エキストラで、横濱市場では模範絲として歡迎されて居る。所長として經營の全部を引受けて居るのは、斯界に敏腕家の開えある前田健次氏で、以前は同じく原氏の經營に係る武州波良瀬の製絲場を督した經歷もある。工場地は市外金城村字志賀。

(六)

【陶磁器】陶磁器の生産地としては、尾張は全國に首位を占めて居る。夫れは製陶に適する原土の多いのが、即ち此事業發展の原因となつたらしい。陶磁器窯業の當地に起つた濫觴は、遠く嵯峨天皇の御宇に發し、御後名工の續出と相俟つて、發達の素地をなしたのてであるが、就中徳川の覇業定まり、潘祖源敬公が藤四郎を多治見より呼戻し、赤津瀬戸を根底として、其妙技を揮はしめてから、窯業鬱然として尾州に興つたので、明治維新以來増々盛大に起き、新文明の化學的應用と共に、一轉外國輸出品として、重要な地位を占めて來た。例に依つて明治三十五年以來の生産額及輸出額を左に擧げやう。

年次	生産額	輸出額
三十五年	2,000,000	2,000,000
三十六年	2,500,000	2,500,000
三十七年	3,000,000	3,000,000
三十八年	3,500,000	3,500,000
三十九年	4,000,000	4,000,000
四十年	4,500,000	4,500,000
四十一年	5,000,000	5,000,000

製造の最も熾んなのは、名古屋市以外に丹羽郡、碧海郡、西加茂郡等で、焼物の名高きは瀬戸を尤とし、常滑、犬山、富士見、夜寒、東雲焼等である。製造者の主なるものは、日本陶器合名會社、森村組、千種陶器合資會社、田代商店、瀬戸陶磁器局同業組合員及常滑陶器同業組合員等であるが、日本陶器と森村組とは兩身一體であるが如く、千種陶器と田代商店も矢張一體で、是等は輸出向製造業者として、重要な地位を占めて居る。日本陶器は本邦同業の最たるものであるが、同會社は一切其内容を秘密にして、吾人に紹介の材料を與ふるを肯んぜぬのは頗る遺憾である。



田代支店加藤梅太郎氏

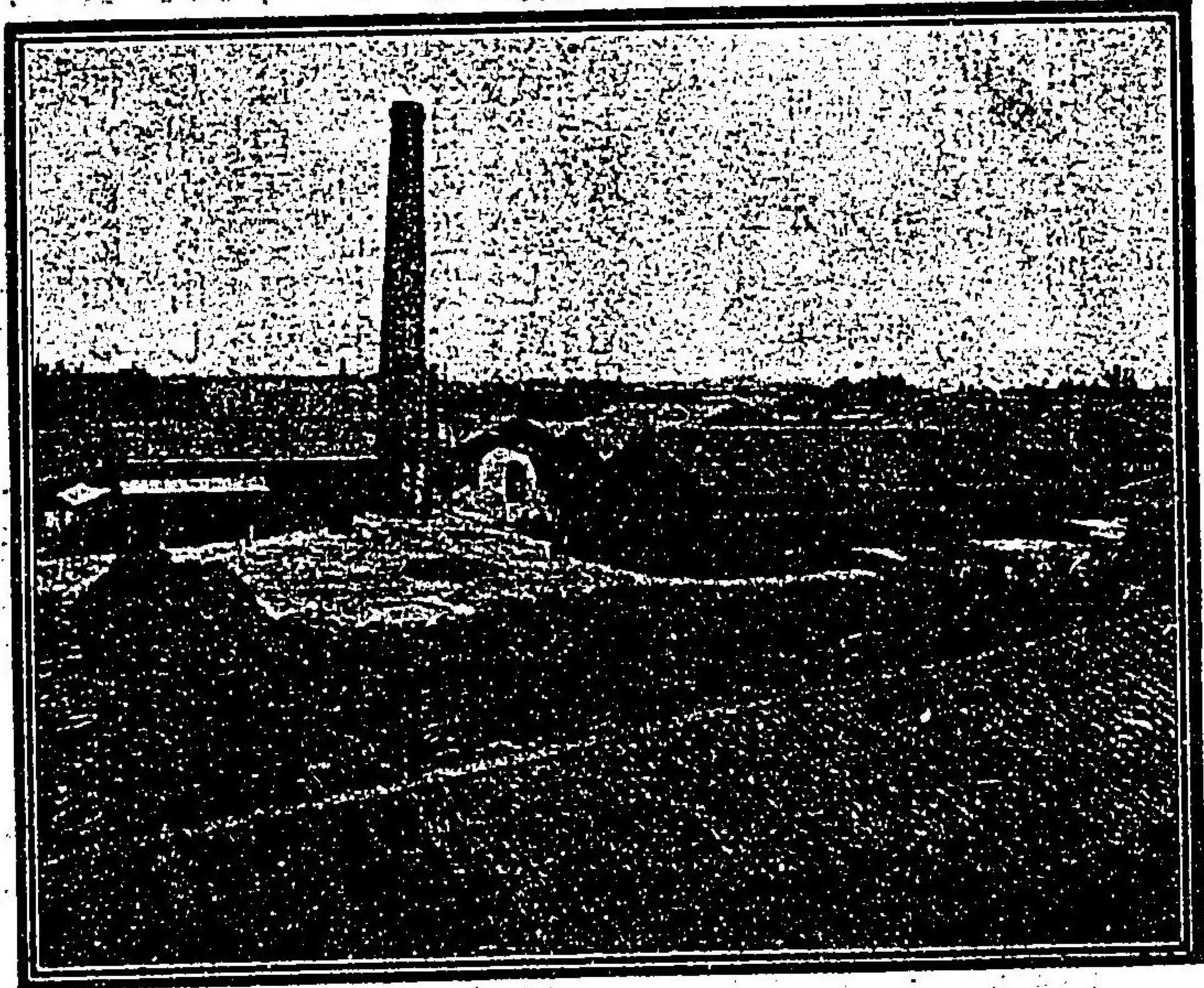
【田代支店】本店は横濱にありて、歐米を相手とせる陶磁器輸出商としては、最も舊きもの、一人である。事業の發展と共に、其生産地に支店を置くの必要を感じ、七曲町の現支店を設立したのは明治二十二年である。製品の精巧で質の堅固な點は、森村組の日本陶器を除けば、當店に指を屈せざるを得ない。樓上の陳列場は常に公開してあるから、尾州陶器を観んとするものは、此處を見逃してはならぬ。店主は田代市郎次氏であるが、支店を支配して居るのは加藤梅太郎氏で、當店一切の經營は、凡て氏の頭腦から割り出されるのである。其取扱額は年約六七十萬圓と稱せられる。

(三)

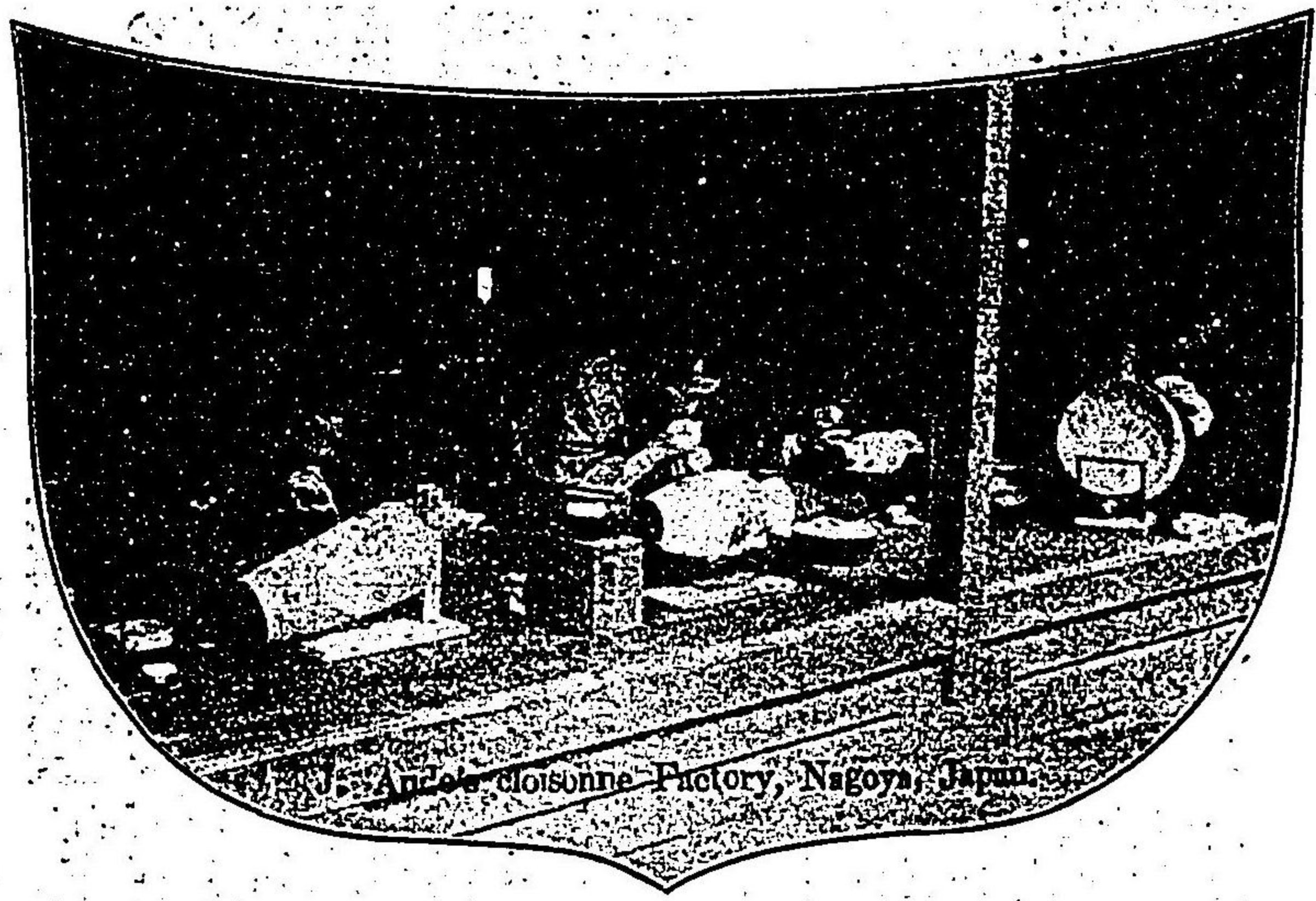
(二)

【千種製陶合名會社】

財政上は全然別物であるが、其組織の目的人物からすれば、田代商店の分身と云つても差支ない。即ち前掲田代市郎次氏と加藤梅太郎氏との合名組織で、田代商店の取扱へる陶磁器は、凡て此千種製陶會社から供給するのである。創立は最近四十一年一月で、當社製品の特色は、専ら生地の鮮麗に加ふるに、能く強靱な點にある。目下の所生産額は年約五萬圓位ださうなが、盛々社運の隆興すべきは、疑を容れない。所在地は市外千種町字内山である。



千種製陶合名會社



安藤七寶店職場

【安藤七寶店】明治十四年頃早くも海外貿易に着眼し、全力を七寶業に注ぎ、斯業中興の祖梶正吉の子孫を助け、日本固有の美術を應用して、製法意匠圖案の改善を謀り、支店を京橋元數寄屋町に設け、外客に接して其嗜好を察し、或は外國博覽會に出品する等大に七寶の聲價を揚げたのは、市内矢場町の安藤重兵衛氏である。殊に贅澤一方の七寶を一般日用品に應用し販路を擴張したのは、全氏の發案に基く、斯業は目下不振の状態ながら、氏は之を意とせず、今後支那及び露西亞に向つて販路を廣くさうて、他の同業者の如く縮少方針を取らぬ。

【七寶】七寶の起源も可なり古く、享保年間に至りて一時全盛を極めたそうだが、夫れから長く中絶し、徳川の末季まで、天下七寶の何たるを知るものなしと云ふ僻な有様であつたが、文政年間に至り、偶々斯業中興の祖を尾州から出したので、七寶は尾張名産の一つとなつた。七寶の製法と云へば、明治初年迄は白玉(ガラス粉と云ふ現今のガラス)と稱へる陶器用の釉薬で出来た。泥七寶と呼ぶものであつたが、明治十年頃に現今用ひられる硝子釉薬を製成するに至つて、斯業の一大革新を促し、今日の進歩を來したので、初め銅生地有線七寶に限られたものが、漸く無線七寶、省線七寶、伏線七寶等が案出せられ、近年又銀生地に透明釉薬を施した銀七寶製造せられ、更に銀七寶の模造品なる銀引と稱するものさへ巧に造られる様になつた。其産額及輸出額を左に。

年次	生産額	輸出額
五年	五〇八六	三二六〇
六年	三三三六	三三六八
七年	三三三〇	三三三〇
八年	三三三〇	三三三〇
九年	三三三〇	三三三〇
十年	三三三〇	三三三〇

主要産地は、當市其大部を占め、愛知郡及海東郡からも多少製出せられる。主なる製造者は安藤重兵衛、服部唯三郎、太田善四郎、川口文左衛門、太田甚兵衛、林小傳治、桑野締太郎及兒玉清三郎の諸氏である。

【時計】 置時計及掛時計の製産地としては、全國中當市に匹敵する所がない、否、唯一の製造地と云ふことが出来る。七八部は輸出向で、販路は韓國へも行き、海峽殖民地へも行くが、斯業の消長を支配する中心は無論清國市場である、日露戦後他の事業と共に長足の進歩をなしたが、同時に其反動も免れることが出来なかつた、加之銀價の下落や南清の排日貨やられて、近一二年は非常の打撃を蒙つた、併し今はそろ／＼順境に嚮ひつゝあるが、清國市場に於ける有力な競争者は、米國品と獨逸品である、前者は機械の精巧堅牢を以て、後者は格外なる低廉を以て、ともすれば我製品を壓する、名古屋製造業者は之に打克ねばならぬ大責任を擔ふて居る、例の如く明治三十五年以來の製造及輸出額を擧げやう。

年次	生産額	輸出額	年次	生産額	輸出額
三十五年	500,000	1,400,000	三十八年	500,000	4,100,000
三十六年	2,180,000	5,700,000	三十九年	9,500,000	6,500,000
三十七年	2,700,000	4,800,000	四十年	1,000,000	6,500,000

製造業者の重なるものは、林時計製造所(林市兵衛)、愛知時計製造株式會社、尾張時計株式會社、ハートエツチ精工所(長谷川興吉)、神谷時計製造所(神谷)、水野時計製造所(水野)、水谷時計製造所(水谷)等である、尙ほ原料金屬は全部各製造所で製造するが、外函用木材は多く北海道の楡の木を需用して居る。

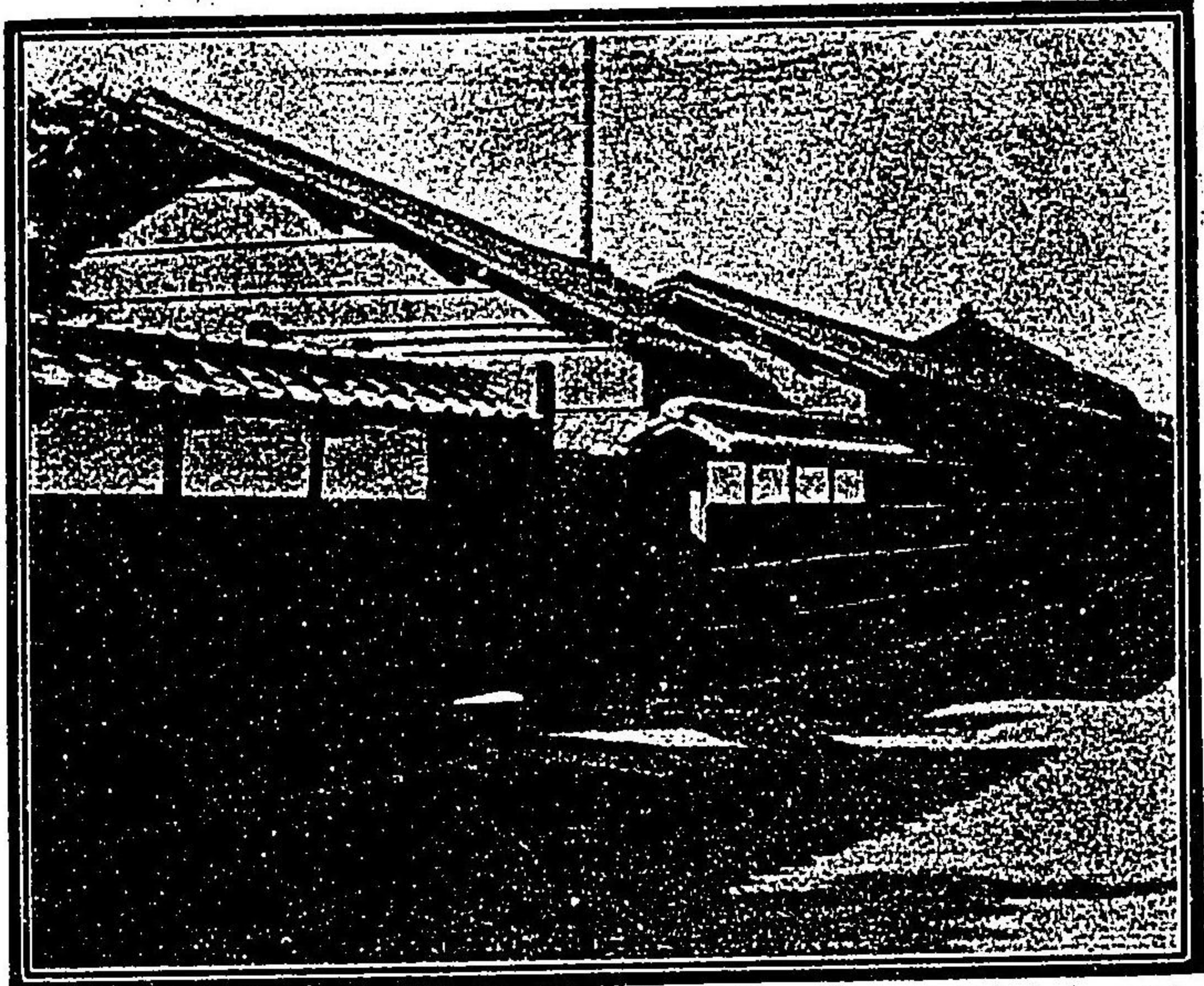
(三十一)

【愛知時計製造株式會社】 創立は、明治二十四年の秋で、當時は合資組織であつたが、株式組織に更めたのは三十一年七月之が社運隆具の一段階となつた、製品は掛時計、置時計及テンプ時計の各種で、自由時計と稱して距離を測定するものは、當社の發明品で、專賣特許を受けて居る、工場は機械工場、仕組工場、仕上工場、木工場と分れ、建坪は約八百餘坪、之に要する職工は百五十名許、生産高は月約一萬個平均、資本金は四萬圓全部拂込濟である、重役は社長鈴木徳兵衛、常務取締役五明良平、青木鎌太郎、取締役水野松三、水谷嘉助の諸氏、本社所在地は東區橋町である。



愛知時計製造株式會社工場内

(三十二)



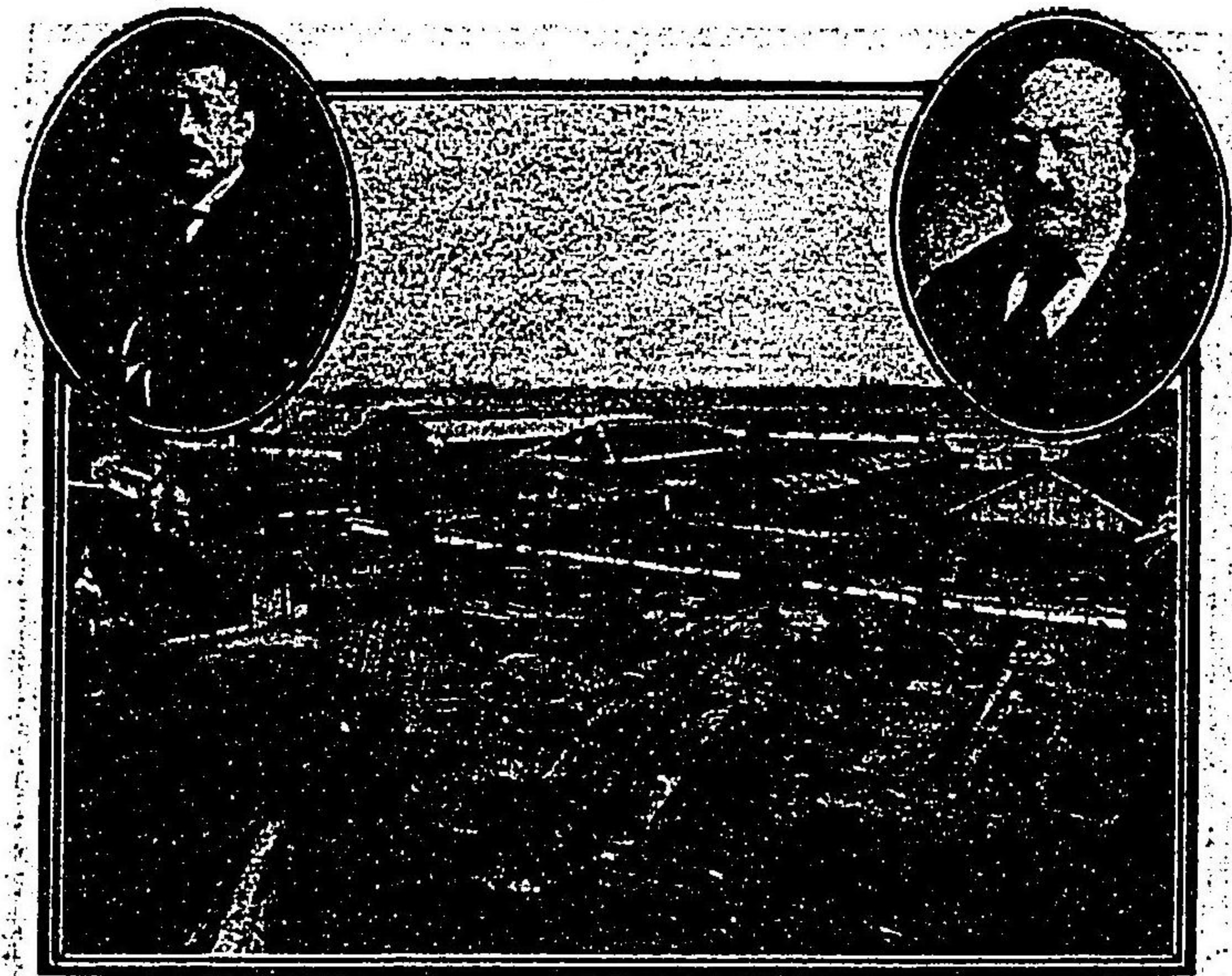
社 東 城

【城東社】 個人經營で主人は青山理三郎氏である。開業は明治三十四年で、恰も燐寸業の將に盛大に赴かんとする間際に出來た。工場の建坪は約千二百坪、従業員男女百五十人、獨逸式軸木排列機械八臺を備付け、一日三十五噸までの製造力を持つて居る。當社は内地向を主とし、京都以東北海道までは其販路である。而して燐寸業として當工場はリツテルを有して居る一人である。工場所在地は東區山口町十一番地。

【燐寸】 燐寸は縣重要製造品の一となつて居るが、事業としては随分盛衰の波瀾を経、前途も又聊か崎嶇羊腸たるを免れない。名古屋に燐寸業の現れたのは明治十二年で、當時同業者僅かに一人、製造高も一日一噸を出てなかつたが、二十年頃から漸次隆盛に赴き、二十五年には同業者十四五名となり、軸木並列用の獨逸式器械を輸入してから、稍々斯業の基礎が固くなつた。けれど日露戰役は多くの事業に刷新發展の機運を與へたに拘はらず、燐寸業のみは原料騰貴の爲に却て逆境に瀕したのみか、本縣製品の唯一市場たる支那に於て、同一製造業の起りつゝあるのと、外品競争の激しいのが手傳つて、兎角面白からぬので、今後とても此方面に大に發展し得べきや否は頗る疑問である。左の表を見ると此關係は明かに看取せられる。

年次	生産額	輸出額	年次	生産額	輸出額
三十五年	九七、二〇八	三三、三三三	三十八年	一〇八、六八三	一〇七、〇〇〇
三十六年	七五、〇〇〇	三三、〇〇〇	三十九年	七三、〇〇〇	七三、〇〇〇
三十七年	一三六、八〇五	三三、〇〇〇	四十年	六八、一〇〇	七五、五〇〇

主なる製造業者は前榮合資會社、愛知燐寸合資會社、杉浦燐寸合名會社、渡邊燐寸製造會社及城東社等である。是等の中輸出向を主とする者と、内地向を専業とする者があるが輸出は概ね大阪神戸在留の清商を相手として取引して居る。

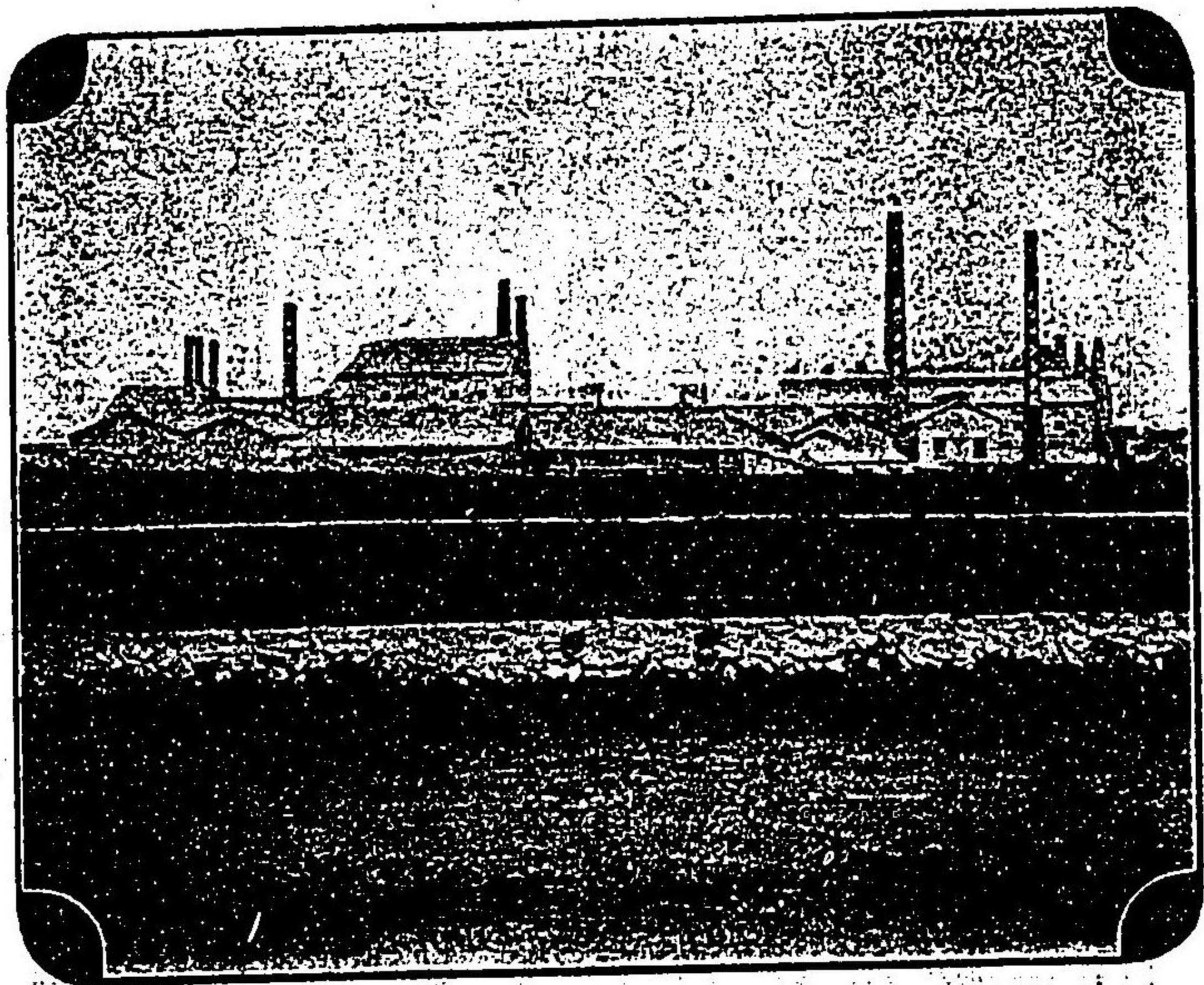


(氏郎太小中田) 社會式株造製輛車本日 (氏勤部服)

【日本車輛製造株式會社】 資本百二十萬圓
 敷地三萬三千坪、各種工場、機關、其他の建築物、七十五坪に及び規模頗る壯大、特種産業として中京に異彩を放つと同時に、全國斯業界に雄視する大會社である。一時は逆境に奮闘した時代もあるが、各地電鐵の勃興と、日露戦役後の景氣恢復とに依り、漸く順境に向ひ、既往五ヶ年間の成績は客車四百九十七輛、貨車三千三百六十三輛、其他各種の製作多數に上り、前々年度一割一分、前年度九分の配當をなした。社長奥田正香氏、常務取締役上遠野富之助氏、取締役技師長服部勤氏、取締役兼支配人田中小太郎氏。

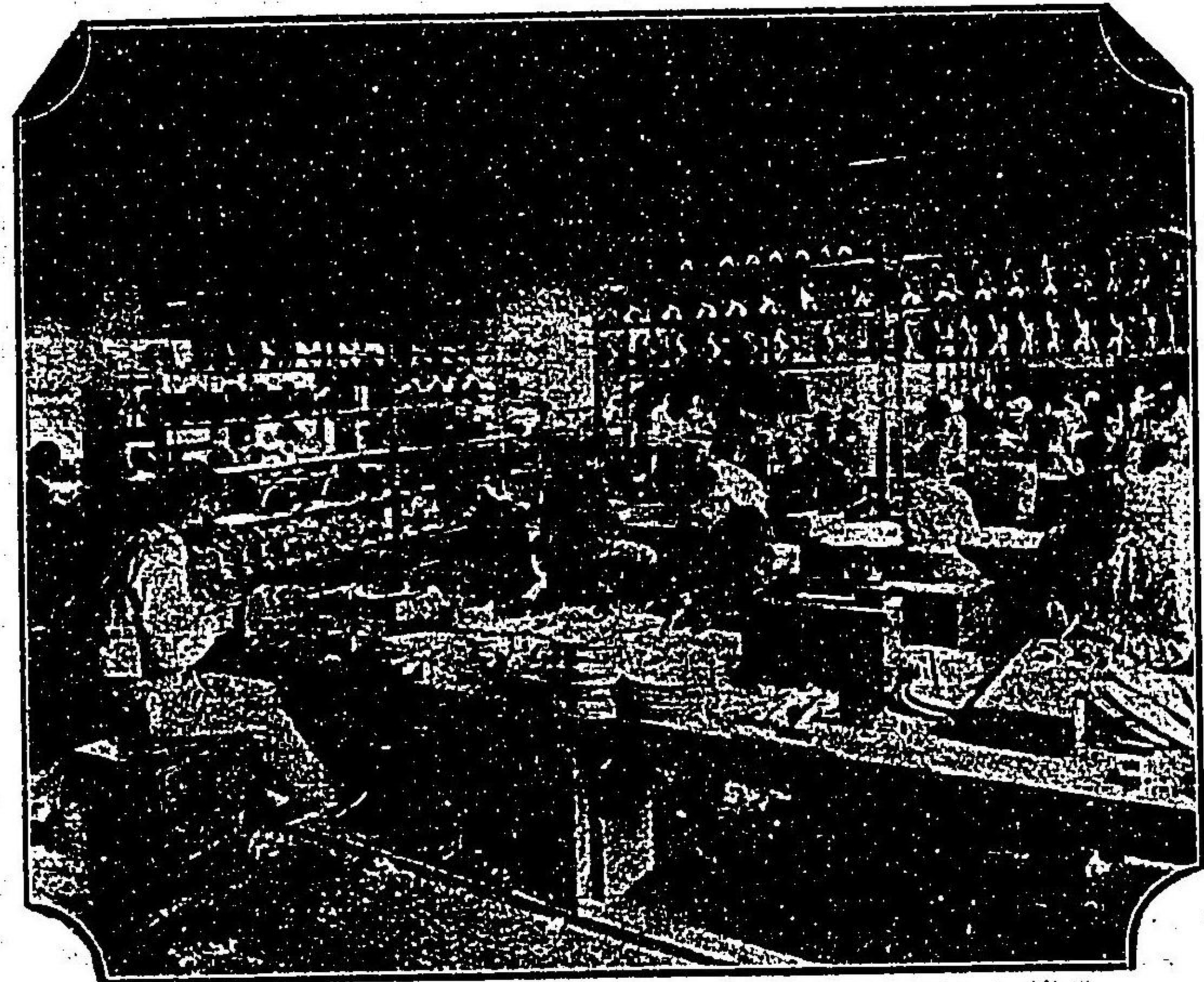
(二六)

【愛知セメント株式會社】 縣内に當會社の外に、三河セメントもあるが、其製造高は僅に當社の一割に過ぎない、本社製品の特徴は粉末極微、抱砂能率の大なる點で、獨り本縣許りてなく、本邦全體の同業に對して、重要な地位を占めて居る。本社の前身は京岐商會と云つて、二十年の創立であるが、翌年高島嘉右衛門、服部與三次、坂田伯孝の合資組織となり、二十三年に株式組織の現狀となつたので、資本金百二十萬圓拂込額七十二萬九千餘圓である。重役は社長高島嘉兵衛、取締役服部小十郎、坂田春雄、高島嘉右衛門、支配人藤井光藏の諸氏、工場所在地は熱田、支店は東京、京橋區三十間堀二丁目である。



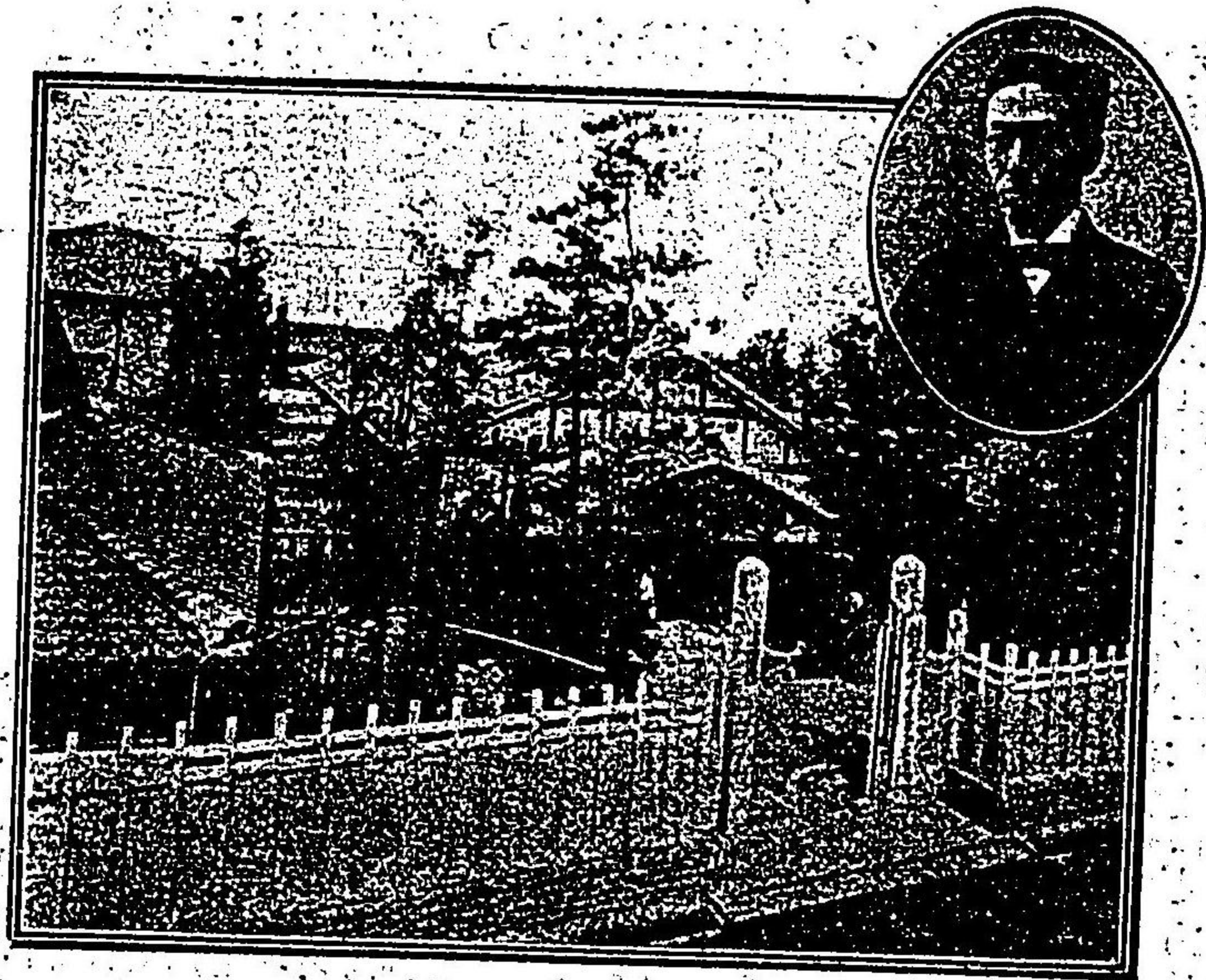
社會式株トメセ知愛

(三九)



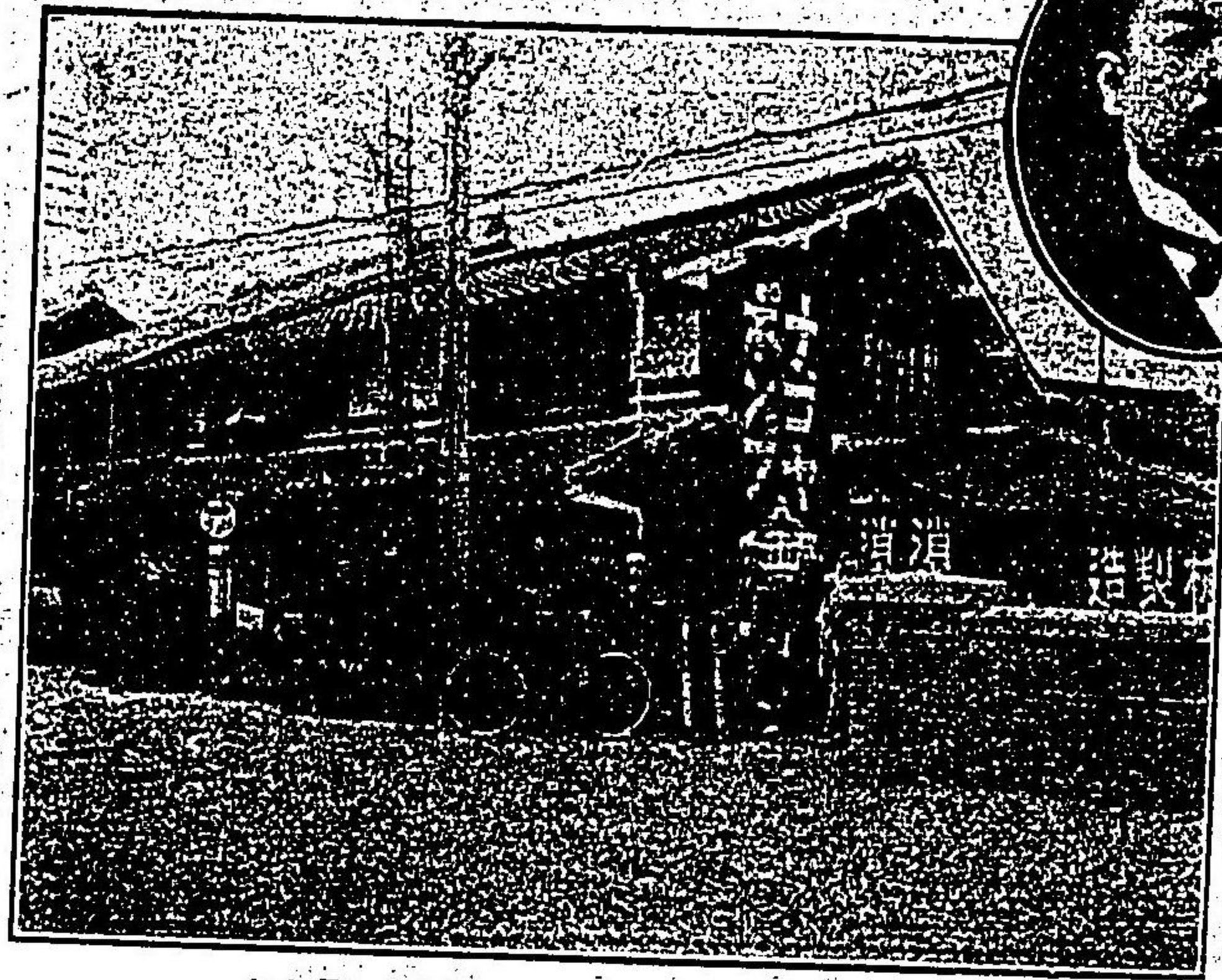
鈴木バイオリン工場内

性質塗方等の必要條件に就き得る所あり、次て外國になき適材を發見し大に勇氣を得たが第二の難關として、手工の不揃と外國の競争に打勝べき、器械の必要が起つた。是が爲に又七ヶ年の苦心を重ねた結果、遂に棹の頭部を作る鉋機械及び胴板を高低自在に削る鉋機械其他十數種の小機械を發明したので、十中の七分は機械力を用ひ、大に生産額を増加すると同時に、大に製造費を節減し、精巧低廉の二大特色を以て、外國品を凌駕し、殆んど絶對に輸入を防遏し、東洋の獨占事業たるの名譽を擔ふやうになつた。此點に於て名古屋特種事業中の最も異彩あるものである。



鈴木バイオリン工場(鈴木政吉氏)

【鈴木バイオリン工場】東門前町鈴木政吉氏の經營する所、精妙無比なる鈴木バイオリンは、實に氏が十數年苦心慘澹の餘に成つたもの、其努力研鑽の迹を見ると、立派に發明家別傳に入るべき人だ、氏の職業は元來琴三味線などの樂器師であるから、外觀を眞似ることは寧ろ容易で、廿一年中既に模造品を拵へたが、先づ第一の困難に逢着したのはバイオリンの生命たる音色であつた、氏は此困難に打勝べく有ゆる苦き經驗を嘗めた結果音色の基礎たる胴を組織する腹板背板側板の三部は、各特殊の性質を具備するを悟り、各板の脂量木質木理及び乾燥程度、並に塗料の



(氏耶太義辻芝)社合簡唧屋古名

【名古屋唧筒合資會社】名古屋に於ける唧筒製造の發達は、其淵源頗る古く、明治初年外國よりの輸入と共に、第一着に其製造をしたのは名古屋である。だから當初名古屋龍吐水と云へば、全國に聲價を博し、職工は各方面に輸出せられた。其後競争の結果、粗製濫造に陥つたので、明治二十九年同業者全部を合して合資組織となし、大に面目を改め、全國に取引店を設ける盛況を呈したが、夫れも五六年にして解散の已むべらざるに至り、當社と外三四が存在して、依然特色を維持して居る。總製造高一千臺(一臺約百圓)の中、當社は其三分の一を製造する。業務擔當社員は芝辻義太郎と木和竹次郎の二氏、所在地は市内古渡町である。

既往拾箇年間各種産業統計

附表三十八

第一表 各古屋市人口累計年比較表

年次	人口
三十二年	10,000
三十三年	10,500
三十四年	11,000
三十五年	11,500
三十六年	12,000
三十七年	12,500
三十八年	13,000
三十九年	13,500
四十年	14,000
四十一年	14,500

第二表 輸出入貨物

年次	輸出	輸入
三十二年	100,000	150,000
三十三年	110,000	160,000
三十四年	120,000	170,000
三十五年	130,000	180,000
三十六年	140,000	190,000
三十七年	150,000	200,000
三十八年	160,000	210,000
三十九年	170,000	220,000
四十年	180,000	230,000
四十一年	190,000	240,000

第三表 外國貿易

年次	輸出	輸入
三十二年	50,000	70,000
三十三年	55,000	75,000
三十四年	60,000	80,000
三十五年	65,000	85,000
三十六年	70,000	90,000
三十七年	75,000	95,000
三十八年	80,000	100,000
三十九年	85,000	105,000
四十年	90,000	110,000
四十一年	95,000	115,000

第四表 資賦課内本給出進

年次	給出	進
三十二年	100,000	120,000
三十三年	110,000	130,000
三十四年	120,000	140,000
三十五年	130,000	150,000
三十六年	140,000	160,000
三十七年	150,000	170,000
三十八年	160,000	180,000
三十九年	170,000	190,000
四十年	180,000	200,000
四十一年	190,000	210,000

第五表 愛知縣 歳入歳出

年次	歳入	歳出
三十二年	1,000,000	1,200,000
三十三年	1,100,000	1,300,000
三十四年	1,200,000	1,400,000
三十五年	1,300,000	1,500,000
三十六年	1,400,000	1,600,000
三十七年	1,500,000	1,700,000
三十八年	1,600,000	1,800,000
三十九年	1,700,000	1,900,000
四十年	1,800,000	2,000,000
四十一年	1,900,000	2,100,000

第六表 備考

年次	備考
三十二年	前年度繰越繰越金及翌年度收入市繰上セザル實例ナリ而シテ縣ノ統計ハ三十六年來總計算ノ上ニ之ヲ計上セズ
三十三年	同
三十四年	同
三十五年	同
三十六年	同
三十七年	同
三十八年	同
三十九年	同
四十年	同
四十一年	同

一、四十二年度分入繰越額ノ攝ハ、其他ハ決算額ヲ攝ル
 二、三十六年度分ニ於テ歳出比シ歳入ハ少キハ、同年度收入中、前年度繰上セザル實例ナリ而シテ縣ノ統計ハ三十六年來總計算ノ上ニ之ヲ計上セズ
 三、前年度繰越繰越金及翌年度收入市繰上セザル實例ナリ而シテ縣ノ統計ハ三十六年來總計算ノ上ニ之ヲ計上セズ

第二表 内國輸出入重要品類別表

第一輸出之部

品目	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年	三十九年	四十年
米	1,315,000	不詳	4,100,000	5,000,000	4,800,000	5,600,000	4,300,000	4,800,000	5,600,000
小麦	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
大麦	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
豆	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
油	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
糖	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
茶	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
海味	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
干魚	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
鮮魚	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
蔬菜	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
調味料	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
清酒	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
小麥粉	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
雜穀	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000
其他	1,115,000		1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000	1,115,000

大 本表ハ名古屋商業會議所ノ調査ニ係ル貨物集散表ニ依ル
 三十三分ハ全然其調査ヲ缺ク其他前年ニ概ハレシテ後年ニ概ハレタルハ調査ノ歩進ミタルニ依ル
 本表ハ四十年ニ於ケル拾萬圓以上ノ集散アル貨物ノ品名ヲ掲ゲ、其以下ノ分ハ他種品中ニ包含セシム
 物品ノ集散ハ特別ノ事情ナキ限り、年ニ依リ甚ダシキ異動ヲ生セザルヲ原則ト爲スモ、統計主任者意見ノ變化、更任又ハ調査精
 粗ニ依リ露ク可キ異動アルヲ見ル、看者豫メ此點ヲ知ラセラル、ト要ス
 貨物ノ集散ハ陸運ハ名古屋、愛知、中種、熱田驛發着貨物ヲ調査シ、之ニ加フルニ水運ニ依ル集散ヲ計上セルモノナリ

既往拾箇年間各種産業統計

前卷三十八號



表一 各古屋市人口累計年比較表

年次	人口
三十二年	10,000
三十三年	10,500
三十四年	11,000
三十五年	11,500
三十六年	12,000
三十七年	12,500
三十八年	13,000
三十九年	13,500
四十年	14,000
四十一年	14,500

表二 輸出入貨物

年次	輸出	輸入
三十二年	100,000	150,000
三十三年	110,000	160,000
三十四年	120,000	170,000
三十五年	130,000	180,000
三十六年	140,000	190,000
三十七年	150,000	200,000
三十八年	160,000	210,000
三十九年	170,000	220,000
四十年	180,000	230,000
四十一年	190,000	240,000

表三 外國貿易

年次	輸出	輸入
三十二年	50,000	70,000
三十三年	55,000	75,000
三十四年	60,000	80,000
三十五年	65,000	85,000
三十六年	70,000	90,000
三十七年	75,000	95,000
三十八年	80,000	100,000
三十九年	85,000	105,000
四十年	90,000	110,000
四十一年	95,000	115,000

第三 外國貿易

表四 資賦課内本給出

年次	給出
三十二年	100,000
三十三年	110,000
三十四年	120,000
三十五年	130,000
三十六年	140,000
三十七年	150,000
三十八年	160,000
三十九年	170,000
四十年	180,000
四十一年	190,000

第五 愛知縣歳入歳出

年次	歳入	歳出
三十二年	1,000,000	1,200,000
三十三年	1,100,000	1,300,000
三十四年	1,200,000	1,400,000
三十五年	1,300,000	1,500,000
三十六年	1,400,000	1,600,000
三十七年	1,500,000	1,700,000
三十八年	1,600,000	1,800,000
三十九年	1,700,000	1,900,000
四十年	1,800,000	2,000,000
四十一年	1,900,000	2,100,000

一、四十二年度分三算額を掲げ、其他の決算額を掲げ、
 二、三十六年度分三算額を掲げ、前年度繰越金並三十七年度分三算額を掲げ、
 三、前年度繰越金並三十七年度分三算額を掲げ、前年度繰越金並三十七年度分三算額を掲げ、

三、前年如左 第六 名古屋市歳入出

區分	年次	歳入	歳出
備考(四十年度) 名古屋市中編入 熱田町分加算	三十二年	1,000,000	1,000,000
	三十三年	1,000,000	1,000,000
	三十四年	1,000,000	1,000,000
	三十五年	1,000,000	1,000,000
	三十六年	1,000,000	1,000,000
	三十七年	1,000,000	1,000,000
	三十八年	1,000,000	1,000,000
	三十九年	1,000,000	1,000,000
	四十年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000

第七 愛知縣内米麥生産額

區分	年次	米	麥
備考(四十年度) 愛知縣内米麥 生産額	三十二年	1,000,000	1,000,000
	三十三年	1,000,000	1,000,000
	三十四年	1,000,000	1,000,000
	三十五年	1,000,000	1,000,000
	三十六年	1,000,000	1,000,000
	三十七年	1,000,000	1,000,000
	三十八年	1,000,000	1,000,000
	三十九年	1,000,000	1,000,000
	四十年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000

第四 愛知縣内生絲生産額

區分	年次	生絲
備考(四十年度) 愛知縣内生絲 生産額	三十二年	1,000,000
	三十三年	1,000,000
	三十四年	1,000,000
	三十五年	1,000,000
	三十六年	1,000,000
	三十七年	1,000,000
	三十八年	1,000,000
	三十九年	1,000,000
	四十年	1,000,000
	四十一年	1,000,000
	四十一年	1,000,000

第三 名古屋市貯蓄金及爲替高

區分	年次	貯蓄金	爲替高
備考(四十年度) 名古屋市中編入 熱田町分加算	三十二年	1,000,000	1,000,000
	三十三年	1,000,000	1,000,000
	三十四年	1,000,000	1,000,000
	三十五年	1,000,000	1,000,000
	三十六年	1,000,000	1,000,000
	三十七年	1,000,000	1,000,000
	三十八年	1,000,000	1,000,000
	三十九年	1,000,000	1,000,000
	四十年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000

區分	年次	乗客數	乗客數
備考(四十年度) 名古屋市中編入 熱田町分加算	三十二年	1,000,000	1,000,000
	三十三年	1,000,000	1,000,000
	三十四年	1,000,000	1,000,000
	三十五年	1,000,000	1,000,000
	三十六年	1,000,000	1,000,000
	三十七年	1,000,000	1,000,000
	三十八年	1,000,000	1,000,000
	三十九年	1,000,000	1,000,000
	四十年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000
	四十一年	1,000,000	1,000,000

備考三十八年... 貨金値上... 結果人員減少... 貨金亦增加... 熱田線延長... 四十一年...

第二表 内國輸出入重要品類別表

第一輸出之部

品目	三十二年	三十三年	三十四年	三十五年	三十六年	三十七年	三十八年	三十九年	四十年
米	1,115,000	不詳	4,120,000	5,035,900	4,812,300	5,676,150	5,752,500	4,807,500	4,807,500
小麦			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
大豆			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
其他穀類			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
油類			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
豆油			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
菜油			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
其他油類			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
糖類			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
食糖			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
其他糖類			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
其他重要品			1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000

本表ハ名古屋商業會議所ノ調査ニ係ル貨物集散表ニ依ル
 三十二年分ハ全然其調査ヲ缺ク其他前年ニ類ハレヌシテ後年ニ願ハレタルハ調査ノ非進ミタルニ依ル
 本表ハ四十年ニ於ケル拾萬圓以上ノ集散アル貨物ノ品名ヲ掲ゲ、其以下ノ分ハ總テ雜品中ニ包含セシム
 物品ノ集散ハ特別ノ事情ナキ限り、年々依リテ其變動ヲ生ゼルハ其原則ト爲スモ、統計主任者意見ノ變化、更任又ハ調査精
 粗ニ依リテ可キ異動アルヲ見ル、番者豫メ此點ヲ知ラセラル、ヲ要ス
 貨物ノ集散ハ陸運ハ名古屋、愛知、宇種、熱田港發着貨物ヲ調査シ、之ニ加アルニ水運ニ依ル集散ヲ計上セルモノナリ

【河合機械製作所】 豊田式織機械會社、日
 本車輛會社等の特種鐵工事業を除くと、鐵工
 場としての大會社はなく、個人事業は區々末
 末で何れか斯業の覇者たるかを甄別し難いが
 河合工場の場合は、個人事業中屈指のもので
 工場主は山田鐵次郎氏(京町十五番目)、開業は明
 治二十六年である。製作種目は石油發動機、
 シヤクソン瓦斯、インジン、蒸汽機關等其重な
 るもので、外に掛置時計をも製造する。取引
 先は九州より關東一圓、一ヶ年の生産額は約
 十二萬圓許りて、事業界の景氣回復を待つて、
 更に工場擴張の準備計劃中である。工場所
 在地は東區清水坂上である。



河合機械製造所

名古屋經濟會會規

- 第一條 本會は名古屋經濟會と稱す
- 第二條 本會會場は名古屋商業會議所内に置く
- 第三條 本會の目的は經濟問題を研究するに在り
- 第四條 會務を處理する爲め幹事五名を置く
- 第五條 本會は毎月一回金曜日午後五時より開會す
但時宜に依り臨時會を開くことあるへし
- 第六條 本會に入會せんと欲するものは會員二名以上の紹介を以て幹事に申出べし幹事に申出に對し會員の意見を諮ひ諾否を與ふるものとす

第七條 本會會員は會費として毎月金壹圓五拾錢を幹事に納むべし

幹事

- (順はるい)
- 伊藤 守松
 - 原 勘七郎
 - 岡野 悌二郎
 - 田中 小太郎
 - 永田 金三郎

名古屋經濟會會員

- 愛知銀行取締役 名古屋市中舟町十九 伊藤 由太郎
- 第一銀行支店支配人 同南久屋町一二 伊藤 與七
- 三重紡績會社取締役 三重縣四日市濱町 伊藤 傳七
- 石油米雜穀肥料商 名古屋市中大船町二九 伊藤 清助
- 尾三農工銀行取締役 同南辰巳町一七ノ一 伊藤 義平
- 絹織物業 知多郡龜崎町二九 伊藤 順三郎
- 名古屋商業學校長 名古屋市中池町二六 市村 芳樹
- 知多商業會議所會頭 知多郡龜崎町七〇九 井口 半兵衛
- 魚問屋商 名古屋市中熱田木ノ免 磯貝 浩
- 尾張時計會社取締役 同市東柳町 今井 藤吉
- 國民新聞支局主任 名古屋市中京町一丁目八 市川 重彦
- 明治銀行副支配人 同七間町三丁目 生駒 重彦
- 洋服商 同研屋町三丁目四〇 岩田 金三郎
- 第一銀行支店員 同伏見町二丁目一六 井上 德治郎
- 呉服商 同茶屋町三十八 伊藤 守松
- 速記者 同江川町五丁目 伊藤 守中
- 名古屋職長 同花車町一 猪飼 鐵太郎
- 三重紡績尾張分工場 同 聯官會 飯田 義一
- 主任技師 同白壁町二丁目八 服部 俊一
- 材木商 同下堀川町三六 服部 小十郎

(三區)

- 扶桑新聞理事 名古屋市中久屋町三丁目 大友 保儀三
- 内國通運會社支店長 同下堀川町三丁目一 小澤 文太郎
- 北濱銀行員 同伊勢町七九 小川 孫助
- 精糖士 同茶屋町七九 大住 増藏
- 報知新聞記者 同京町三丁目 大西 貞一郎
- 名古屋實業會社技師 同殿前町六四 岡谷 清二郎
- 愛知セメント會社員 同熱田須賀町 大川 千代松
- 同三輪町 同本 櫻
- 同新柳町六にや方 同本 四郎
- 同南久屋町三丁目四 和邊 陽太郎
- 同石壁町三丁目 波邊 磯那
- 同南武平町三二 上遠野 富之助
- 同南久屋町八八 神野 金之助
- 同下長者町三丁目二 加藤 平兵衛
- 同流川町八九 加藤 重三郎
- 同玉屋町一丁目六 加藤 隆三郎
- 同南鍛冶屋町二丁目 同門前町四四 加藤 隆三郎
- 同三輪町三七 同三輪町三七 加藤 隆三郎
- 同玉屋町一丁目三 同下堀川町三 加藤 隆三郎
- 同下堀川町一 同下堀川町一 加藤 隆三郎
- 同榮町七丁目一〇 同榮町七丁目一〇 加藤 隆三郎
- 扶桑新聞理事 名古屋市中久屋町三丁目 大友 保儀三
- 内國通運會社支店長 同下堀川町三丁目一 小澤 文太郎
- 北濱銀行員 同伊勢町七九 小川 孫助
- 精糖士 同茶屋町七九 大住 増藏
- 報知新聞記者 同京町三丁目 大西 貞一郎
- 名古屋實業會社技師 同殿前町六四 岡谷 清二郎
- 愛知セメント會社員 同熱田須賀町 大川 千代松
- 同三輪町 同本 櫻
- 同新柳町六にや方 同本 四郎
- 同南久屋町三丁目四 和邊 陽太郎
- 同石壁町三丁目 波邊 磯那
- 同南武平町三二 上遠野 富之助
- 同南久屋町八八 神野 金之助
- 同下長者町三丁目二 加藤 平兵衛
- 同流川町八九 加藤 重三郎
- 同玉屋町一丁目六 加藤 隆三郎
- 同南鍛冶屋町二丁目 同門前町四四 加藤 隆三郎
- 同三輪町三七 同三輪町三七 加藤 隆三郎
- 同玉屋町一丁目三 同下堀川町三 加藤 隆三郎
- 同下堀川町一 同下堀川町一 加藤 隆三郎
- 同榮町七丁目一〇 同榮町七丁目一〇 加藤 隆三郎
- 扶桑新聞理事 名古屋市中久屋町三丁目 大友 保儀三
- 内國通運會社支店長 同下堀川町三丁目一 小澤 文太郎
- 北濱銀行員 同伊勢町七九 小川 孫助
- 精糖士 同茶屋町七九 大住 増藏
- 報知新聞記者 同京町三丁目 大西 貞一郎
- 名古屋實業會社技師 同殿前町六四 岡谷 清二郎
- 愛知セメント會社員 同熱田須賀町 大川 千代松
- 同三輪町 同本 櫻
- 同新柳町六にや方 同本 四郎
- 同南久屋町三丁目四 和邊 陽太郎
- 同石壁町三丁目 波邊 磯那
- 同南武平町三二 上遠野 富之助
- 同南久屋町八八 神野 金之助
- 同下長者町三丁目二 加藤 平兵衛
- 同流川町八九 加藤 重三郎
- 同玉屋町一丁目六 加藤 隆三郎
- 同南鍛冶屋町二丁目 同門前町四四 加藤 隆三郎
- 同三輪町三七 同三輪町三七 加藤 隆三郎
- 同玉屋町一丁目三 同下堀川町三 加藤 隆三郎
- 同下堀川町一 同下堀川町一 加藤 隆三郎
- 同榮町七丁目一〇 同榮町七丁目一〇 加藤 隆三郎

日本車輛會社取締役
 兼支配人
 愛知農商銀行支配人
 日本郵船出張所長
 名古屋電力會社員
 辯護士
 眞服商
 北濱銀行支店長
 日清生命保險會社出
 張所長
 株式仲買人
 甲野銀行理事
 名古屋新聞記者
 商業與信所出張所長
 名古屋銀行集會所書
 記長
 株式仲買人
 辯護士
 日本電報通信社支局
 主任
 四日市商業會議所會
 頭
 林木白木商
 名古屋電氣鐵道會社
 支配人

名古屋新柳町一
 岐阜市八ツ寺町
 名古屋伊倉町
 同南伊勢町
 愛知郡呼嚶町大字千
 龍字深ノ内
 名古屋市京町一五
 同熱田東町五ノ井
 同熱田東町四三
 同南武平町四三
 同下野杉ノ町甲三二
 同東古渡町字柳畑
 四春日井郡金城村大
 字田幡
 名古屋傳馬町六丁目
 名古屋熱田神戶町
 同正木町二〇
 同熱田東町五三
 三重縣四日市市巖町六五
 名古屋西柳町鐵道
 官舎第十三號
 同島田町三丁目
 同上長者町五ノ六
 同傳馬町一六〇

三井銀行支店長
 渡飛農工銀行取締役
 活版印刷業
 辯護士
 眞田貿易會社取締役
 諸機械製造業
 日本車輛製造會社技
 師
 三重紡績會社技師長
 名古屋商業會議所書
 記長
 合名會社前田商會代
 表社員
 原名古屋製絲所支配
 人
 愛知農商銀行取締役
 三井物產會社支店技
 師
 四日市市長
 名古屋新聞社長
 福壽生命保險支配人
 綿糸商

矢田 亮吉
 山田 眞吉
 山田 文次
 山田 鐵次郎
 柳井 清一
 眞野 愛三郎
 佐野 敏三郎
 前田 内藏七
 前田 健二
 前田 健二
 松尾 要
 深田 仙太郎
 藤原 林平
 藤田 清二郎
 福井 鏡吉
 船橋 賢鑑
 小山 松壽
 近藤 德三郎
 近藤 友右衛門

千代田生命保險會社
 支部長
 伊藤銀行支配人
 名古屋電力會社技師
 豐表麻学商
 毛織物商
 味噌溜り醸造業
 明治銀行副支配人
 愛知時計製造會社取
 締役
 辯護士
 關戶銀行支配人
 明治銀行支配人
 衆議院議員
 日本銀行支店長
 七賢商
 明治銀行熱田支店支
 配人
 辯護士
 宮銀行取締役
 十六銀行支配人
 三重紡績會社事務取
 締役
 日本郵船會社出張所
 支配人
 林木商

名古屋市東片端町三ノ
 四四
 同吳服町
 同武平町二ノ一二七
 同玉屋町一九
 同東萬町一〇二
 愛知郡呼嚶町大字千龍
 名古屋市主稅町三丁目
 同富澤町
 同東魚町七〇
 同和泉町六三
 同長堀町六丁目七
 同下園町三五五
 同南吳服町
 同矢場町
 同熱田須賀町五九
 同堅三ノ藏町二丁目
 甲九八
 同園井町一八〇
 岐阜市金澤町九五三
 名古屋白壁町二ノ二
 同木挽町九
 同東橋町二五一

小山 順三
 紅村 清之助
 小山 朝佐
 榎並 庄兵衛
 江崎 勤之助
 江崎 秀雄
 青木 文次郎
 青木 謙次郎
 藍川 清成
 天野 泰介
 安樂 男十郎
 安本 敏之
 麻生 二郎
 安藤 重壽
 青木 兵二郎
 青木 義彦
 佐藤 義一
 佐分 慎一
 四郷 金治
 齋藤 恒三
 佐々木次兵衛
 佐々木左衛門

株式仲買人
 帝國燃絲會社支配人
 辯護士
 好生館長
 伊藤吳服店庶務課長
 眞服商
 商業與信所支所員
 味噌溜り醸造業
 新愛知新聞記者
 貿易商
 石炭商
 魚問屋
 名古屋セルプロカ
 一店主
 機械井鐵油商
 第一中學校兼明倫中
 學校長
 運送業
 小間物商
 關戶銀行主
 衆議院議員
 味噌溜り醸造業
 味噌新聞記者
 衆議院議員
 石炭商
 大阪毎日新聞支局長

名古屋市南伊勢町
 同白壁町二丁目
 同本重町一丁目一九二
 同南外堀町三一〇
 同皆戸町二一
 同東萬町四丁目一
 同種木町一ノ八
 同赤松町五七七
 同長堀町六ノ一八
 同袋町一六六
 同南大津町三三
 同南區熱田木ノ免町
 一〇一
 同住吉町一ノ二五
 同南伊勢町二
 同區南久屋町九三
 同玉屋町甲五六
 同鐵砲町三九
 同堀詰町一七
 同木挽町五八
 同車ノ町二七
 同南武平町一
 同南久屋町四ノ二
 同下堀川町四〇
 同久屋町三丁目

佐久間 光次
 櫻井 善吉
 北川 乙治郎
 鬼頭 幸七
 三輪 喜兵衛
 三木 保吉
 宮崎 平四郎
 水野 錦溪
 白石 房次郎
 下山 民義
 島本 權左衛門
 白井 庄三郎
 平井 繁男
 日比野 寛
 森本 元藏
 森本 守彦
 關戶 守彦
 鈴木 德兵衛
 鈴木 善六
 鈴木 健次郎
 鈴木 倉次郎
 鈴木 樹次郎
 鈴木 清節

明治四十二年十二月十日印刷
明治四十二年十二月十三日發行



編者 名古屋經濟會

名古屋市東區下堅杉町一丁目十八番地
小野剛方

發行者 伊藤忠治

東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町三丁目一番地

印刷所 三秀舍

名古屋市四區島田町五十目五番地

名古屋經濟會

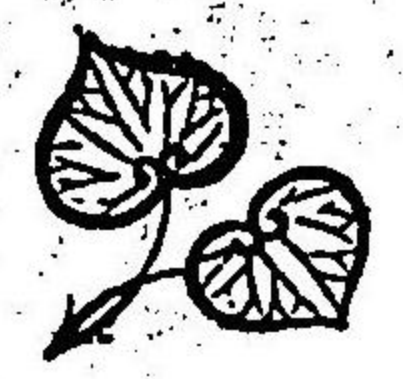
名古屋市中區海町四丁目

東京堂

電話一七九四番

發行所
大賣捌所

標商錄登



二葉香油

芳香無比貴婦人用

芳香馥郁として毛髪
を黒く艶々出し癖を
直しフクを去る

元慶年間開業舊藩徳川家用達を命ぜられたり
各博覽會へ出品賞牌を賜ひ貴婦人間に賞賛あり

名古屋物産

御元結

名古屋市西區傳馬町

葵香
庄助本店

電話一五四九番